



420
289

陸軍中將 中井良太郎 著

長期戦の國史考

國民新聞社發行

始



特231
933



陸軍中將 中井良太郎 著

長期戦の國史考

國民新聞社發行





目次

自序

緒 説	一
第一章 建 國 聖 戦	二
第二章 景行天皇の熊襲御親征	二
第三章 仲哀天皇の御征西と神功皇后の御征韓	一七
第四章 神功皇后御征韓後に於ける韓半島の經略戦	二二
第五章 蝦夷の同化戦	二七
第六章 前九年の役	二九
第七章 源頼朝の覇業確立戦	三七

目次

一

目 次

第八章	元寇撃滅戦	五二
第九章	建武中興を繞る内戦	六三
第十章	戦國時代の争覇戦	七四
第十一章	織田信長の建設戦	九四
第十二章	豊臣秀吉の統一戦及征鮮役	一二六
ひすび		一三八

以上

自 序

— 發刊の辭 —

本冊子は、著者が大東亞戦争開始前、國民新聞社の求めに應じ、急ぎ執筆したものであるが、此の度、同社が更に之を一本に纏められると聞き、誠に光榮に思ふ次第である所が客年十二月八日、米英に對する膺懲撃滅戦が展開せられた後、本冊子を發刊することとなつたので、發刊に際し多少加筆した所があることを御断り申して置く。

今次の聖戦も勿論長期戦たることは疑ひなく然も偉大なる建設戦である。我等祖先の長期建設戦の迹を温めた本書が、聖戦完遂の奉公の爲、其の心構への一助ともならば、筆者の本懐之に過ぐるものはない。

昭和十七年 月 日

著 者 識 す

緒 説

曾て筆者の尊敬する先輩某軍が、長期建設戦の史観に付き放送せられたことがあつた。夫は有益な講演であつたが、其の引用せられた戦例は主として歐米の戦史であつた。依つて筆者は我が國史上の長期建設戦を概考しようと思ふ。蓋し外國史考は彼を知るの重要素乃至は他山の石的價値の大なるもの、國史考は己を知るの要道で且つ我山の寶玉鑑定である。長期建設戦史考も内外史考相俟つて百戦不殆の戦理を索め得らるるからである。筆者は史家ではない。只幼少時より歴史が好きで暇あらば之に親しみ今日に及んで居るに過ぎぬ。本稿は史實の正否を探究せんとするものではない。國民の國史常識を基礎としての概考であるが、讀者各位は吾等祖先の偉大なる長期建設戦力を偲ばれ、大東亞戦争完遂必勝の爲の心構への一助ともなれば、幸甚でいる。

尙附言するが、人往々、我が内戦史殊に古戦史は兵力は小、作戦地域は狭く甲冑時代の戦史だとして輕んずる傾向があるが、斯様な觀方は甚だ當を失するものと思ふ。戦理から觀れば、我が古戦史は實に貴いものがあり、歐米の戦史に優ると思ふ

點は少なしとしない。故に筆者は書名に拘らず所々外國戰史と比較した。之は御互に吾等日本民族の優越點を捉へて之を現代化し、温故知新以て對手の追隨を許さざる戰理を求め戰爭指導や戰法を考案することが緊要と思ふからである。兵家は勿論史家も亦此の點に付き一顧を與へられんことを念願して以下本論に入らう。

第一章 建國聖戰

建國聖戰の本質と年數

建國聖戰史考の重要性

我が建國聖戰は申す迄もなく神武天皇の御東征である。御東征と申すが、實は天降民族男女を擧げて率ゐ給ふた御東遷であり、戰史的に考察すれば天降民族の總力戰である。そして夫れは日本書紀に依れば六年、古事記に依れば十六年となつて居り大なる相違があるが、何れにしても、長期建設戰たるに變りはない。

今次の聖戰も 天皇の掩八紘而爲宇（所謂八紘爲宇）の大御理想の現代的奉行であると國民は堅く信念致して居ることは、今更事新しく云ふ迄もないが、建國戰史に遺し給ふた聖戰訓を謹考すれば、長期建設戰の眞理は此に盡されて居ると拜察する。翻つて今次開戦前の世相を顧ると、口には八紘爲宇と唱へながら其の言に表裏あり、言行亦一致しないのではないかと問ひたくなる場面に遭遇することもなかつた。此の意

味に於て筆者は今一度我が建國聖戰の迹を温ねて吾等の心構へを強化し今次聖戰完遂の奉公の資に供したいと思ふ。

今より二千六百餘年前と云へば西曆紀元前六百六、七十年以前である。西洋史に有名なハンニバルの羅馬遠征開始は西曆紀元前二百十八年であるから我が建國聖戰はそれより尙ほ四百五、六十年も昔のことである。今日奈良縣と宮崎縣との關係から申せば隣近所であるが、二千六百餘年前の南紀の山岳地帯や瀬戸内海とは云へ、その舟艇に依る交通のことなどを想ひ且つ未知未開の蠻界に向はせ給ふ御東征を想起し奉れば、ハンニバルや其の後奈翁のアルプス越えのみに驚歎する必要はない。神武天皇を始め奉り、我等祖先の偉大さを拜して民族の矜持とせねばなるまい。

建國聖戰の迹を温めれば、得難き戰史教訓は少なしとしないが、長期建設戰と云ふ觀點から概考しよう。

第一には 天皇の御雄圖と御理想である。此のことは、御東遷の大御言及御即位建國の大詔に依り伺ひ奉ることは出来ることは、萬民の知る通りで、今更申述べる必要はない。何れの時代に於ても、この偉大なる御雄圖と宏遠なる御理想を以て我等民族不動の最高示標と仰がねばならぬ。然し八紘爲宇の御理想は斷して侵略主義でなく歐米流の帝國主義でもない。世界大家族主義とでも申すことが出来やう。世界を和やかなる一

御雄圖と御理想

家の如く爲し萬邦各々其の所を得しめ兆民をして其の堵に安んぜしめ給はんとの偉大且つ崇高なる御理想であると拜誦せねばならぬ。大東亞共榮圈も亦大東亞一家族主義的精神團結がその根基で、經濟的自給自足はこの家族主義精神に基く必然の結果と考ふべきであらう、自給自足の經濟圏てふ語義や本質を單に唯物觀のみに立つて考ふべきものではないと信ずる。

第二は 天皇の聖戰御指導には、民族に輝やかしき希望を與へ給ふた點である。御東遷の大御言に宜はせられた中には天皇御親から輝やかしき御希望を有し給ふと共に之を皇兄皇子に傳へ給ふて居ることは書紀を見れば伺ひ奉るに十分である。此の大御言は必ずや臣民にも語りましましたといふことも推想し奉ることが出来る。

凡そ戰爭は之を賣られて止むを得ず買はねばならぬこと猶日清日露の兩役の如きこともある。即ち清國露國の傍若無人的乃至は高壓的傲慢暴戾なる挑戰態度に對し國運を賭して戦つた如き之である。斯かる場合には希望も絶望もない、只國運を賭すると云ふ悲壯なる決意の下、人事を盡して天命を待つた努力を以て戦ふのみであるが、長期建設戦となると其の原因動機如何に拘らず、國民に前途の光明と希望とを與へる指導であらねばならぬ。天皇は二千六百餘年前に於かせられて既に此の聖戰訓を貽し給つて居る。天皇の御東征は天孫に授け給はつた大八洲國の中州に蟠踞して、皇化に服せざる豪族を

民族に輝やか
しき希望を與
へ給ふ

討平げ給ひ、神勅に宜ふ所を顯現し給はんとする聖戰であり、初めから長期建設の聖慮がましましたことは、御征行の御道程を以ても拜察することが出来ると思ふ。そして之が爲めには十分なる前途の希望を宣し給はつて居るのを拜するときは、聖慮の程長き極である。

今次の大東亞聖戰も長期戦となることが必然と思ふが、前途は實に輝やかしき希望に充ちて居ると思ふ。唯長期戦となれば此の間幾多の難事に遭遇することは當然である。此の難事を克服すべき旺盛なる決意は熱烈なる忠君愛國心と前途の希望から生ずるものである。長期戦下に於て國民を刺戟し感傷的ならしむる如き指導は必ずしも當らぬことであらう。病氣でも名醫に依り大丈夫と保證せらるれば、快癒が早いが、營利本位の藪醫者から色々の事を聞かされると、氣が腐つて病が癒えぬやうな場合もある。長期戦下の國民を病人に譬へる事は當を得ないが、一喜一憂することはやむを得ない國民の心理である。假令國民に、一喜一憂する勿れと云つた所で、施策に依り之を示さざれば國民は果して其の言を信ずるや否や疑はしい。言論を以て、國民を指導することは勿論大切であるが、宿敵英米の首腦者共の大言壯語も今果して如何。長期戦の國民指導には百の大言壯語や美辭麗句よりも一つの無言の有力適切なる施策がより必要である。開戦以來の皇軍の偉大なる戦果こそ實に此の真理の模範的表現である。

作戦と建設とを併行せしめ給ふ

建軍本義の確立

第三に建國聖戰に於ける得難き聖戰訓は、天皇が御途中の御建設を爲し給ひつゝ漸次東遷し給ふた點である。筑紫の岡田宮、安藝國埃宮及吉備國高島宮の御駐蹕は記紀其の年月を甚だしく異にして居るが、夫は夫れ々々爾後の作戦の御準備であらせられることは書紀にも明瞭に記されて居る。又一面、政治的には該地方の御建設であり、戰略的には作戦基地の躍進であつたと謹考することが出来る。且つ戦ひ且つ建設することは長期戦建設戦に必須の指導方策である。戦力を養ひつゝ、一步一步と堅實に其の作戦と政治の地歩を建設しつゝ、戦争目的を達成すると云ふことは長期遠征的建設戦の大原則である。天皇は既に二千六百餘年以前に於て此の大原則を今日に貽し給はつたのである。

由來速戦速決は戦争指導の要諦なりと説く兵家は多い。出来れば夫れに越したことはないが、古來一氣呵成的な懸軍長驅を爲し、初期には輝やかしき戦果を収めても遂に敗者となつた例はだんくある。瑞典のカール十二世や、奈翁の露國侵入の如き其の顯著なる戦例である。長期建設戦となれば速算速決氣分を一擲して、天皇の建國聖戦の御教訓を翫味し一步一步と堅實なる建設と作戦とを併行せしめることが肝要であると思ふ。

第四には我が建軍の本義は實に此の建國聖戦に淵源創始し給ふたことである。當時 天皇の率ゐ給ふ皇軍は天降民族の男女を擧げて編成し給ひ皇軍には男軍と女軍とがあり、女軍亦堂々と一方面的の戦闘を擔任して赫々たる戦果を擧げて居ることは日本

御統帥の御非
凡則高邁御卓
越

必勝の御信念

御統帥の御非
凡

書紀に明記せられる所で、周知の通りである。眞に名實共に國民皆兵である。天皇御親率の下、國民皆兵は我が建軍の基本體制であるが、此の基本體制は、神武天皇の建國聖戦において確立せられたことは史を讀み軍制を研究する者の誰知らぬことなきところである。建國聖戦は天降民族皆兵で、皇軍即皇民であり作戦即總力戦で且つ民族戦である。第五には、天皇の御統帥の御非凡御高邁御卓越の點である。此の事は書紀を見れば敢て説明を要しないが、天皇が後世に遺し給へる政戦兩略の若干を申述べよう。

天皇は軍民に輝かしき前途の希望を與へ給ふと共に、御躬ら堅確不動の必勝御信念を有し給ふたことは聖戦史を飾る精華である。天皇が八十梟帥を撃ち給ふた戦記に關する書紀の記述に「天皇志存必克」とあり、又愈々長髓彦の最後の誅滅の所にも「先是皇軍攻必取戦必勝」とある。此の御信念は長期建國戦を御完遂遊ばされた重因であると拜する。

天皇は作戦間如何なる御艱難に遭遇し給ふとも毫も御軫念を御表現遊ばさず、必ず敵に勝つの戦策を繞らし給ひ、如實に百折不撓の聖範を垂れさせ給ふを拜するも、誠に畏き極みである。史上孔舍衛の坂の御難戦は史家に依りては草香沼畔の御上陸の水際戦闘であると考察して居る人もあるが、何れにしても戦況不利なる場合、斷乎として攻撃を

續けるか、夫れとも適宜敵と離脱して他の戦策を採るかを考定して赫々たる戦果を擧げること古來非凡の名將ならでは出来ぬことである。天皇は孔舍衛の坂(或は草香沼畔)の戦鬪を御断念ましまし断乎として南紀沿岸に向ひ、舟艇機動を御敢行遊ばした戦略上の聖慮は畏れ乍ら非凡中の非凡で、後世に對し戰略迂回及舟艇機動の良範を垂れさせ給ふと共に、特に長期戦に於ては損害を少くし兵力を愛惜しつゝ、最良の戦果を擧ぐべきことを聖訓ましましたと申上ぐべきである。

天皇が紀伊路より大和に御進攻の山地突破戦は如何に御艱難であらせられたは書を読む者の等しく御推量申上ぐる處であらう。

天皇は斯かる嶮難に於て頑敵を突破遊ばさるゝ際にも廣大無邊の聖徳、御豊富なる御詩藻を以て常に士氣を御鼓舞遊ばされ必勝の御信念を益々御堅固に遊ばされたことも書紀に明記する處である。

志氣の御鼓舞

最後の若干月

戦鬪は最後の五分間で決するといふが、戦争殊に長期戦争でも亦、最後の若干月といふ處で決するのである。我が建國聖戦も亦最後の三、四ヶ月で決した譯である。第一次世界大戦に於て連戦連勝の獨軍が瓦解したのも最後の三四ヶ月であつた。之を思ふと長期戦は永引けば永引く程益々必勝の信念を鞏固にせねばならぬ。天皇は建國聖戦に於て至高且最良の聖範を垂れ給はつたことを拜して我等は今大戦争の完遂の奉公に邁進せねばならぬ。

聖戦御完遂の最大原因

天皇は如何なる御艱難に處し給ふても少しも御軫念を玉顔に現し給ふやうな御事なく又假令戦況極て有利に進展し偉大なる戦果を擧げさせ給ふても常に軍に對し些も戦勝に驕るが如きことなきやう聖諭遊ばされた。八十梟帥を御討滅後、天皇は「戦勝而無驕者良將之行也」として戦勝の餘威に驕らぬやう聖諭ましまして居る。誠に畏き極みである。長期戦間一喜一憂を色に現はすやうなことは大國民の襟度ではない。國民は互に大に戒めねばならぬ所であるが、皇軍が建國聖戦六年(古事記に依れば十六年)の長年月間一喜一憂なく、此の大聖業を扶翼し奉ることが出来たのは偏へに、天皇の御統帥の御宜しかりし賜である。前途に希望を與へ給ひ、必勝の御信念を御垂範遊ばされ、如何なる御艱苦に於かせられても御自若として常に最善の御施策遊ばされたことは其の廣大無邊の御聖徳と相俟つて建國聖戦御完遂の最大原因であると謹考する。

天祐神護

第六に申述べたいことは天皇は常に天祐と神護とを享けさせ給はつてゐる。そして最善の努力を爲さば、必ず天祐と神護があると云ふことを後世の軍官民に貽し給つてゐるのを拜することである。元寇における神風の如きも當時我國上下が舉國一致最善の努力を爲した所に與へられた天祐神護の最も顯著なる一つであることは今更申す迄もない所であるが、我が國史や戦史を通じて天祐神護と目すべき史實は非常に多い。

建國聖戰における天皇の御作戦の迹を拜すれば最善の御努力を遊ばされてゐることは書紀に依り明らかである。實に、天皇の御努力は將帥には勿論一般軍官民に對し垂れさせ給ふた最高の聖範である。苟くも多少たりとも實戰の體驗を有する者は天祐と神護とを感知しないものはあるまい。筆者は最善を盡す所に必ず天祐と神護とがあることを體驗確信するものである。而してそれは斷して迷信ではない。さりとして必ずしも宗教心からでもない。我が建國聖戰及びその後の史實を以て植付けられた信念である。

長期戦となると艱難は夫れから夫れへと生ずるものである。そして爲めに、民心が不安となり、不安となる所に動すれば迷信が生じ、其の弊の及ぶ所、測るべからざるものがある。我が戰國時代の名將等は何れも神佛信仰心が厚かつたが、迷信打破には随分思ひ切つたことをやつて居る。此の點は後述する機會もあるから茲には省略するが、頃日内務當局が迷信打破の爲、曆の吉凶日等を抹消すると云ふやうな新聞記事を見たことがある。誠に尤もな著想であるが、更に進んで時局を喰物にし民心の不安弱點に附け込む邪説流布の輩を取締る必要もあらう。併乍ら最善の努力を盡して、然る後天祐と神護を仰ぐは斷して迷信ではない。最善の努力を盡さずして天祐と神護とを仰がんとするは功利思想の甚だしきものである。同時に又迷信打破に急にして却て正しき國民の信仰心を害しないやうに意を用ふることも肝要である。廣佛乘釋論の復活の如き論議は却て正しき

信仰心を阻害する結果となる虞がある。

日露戰爭中、奉天會戰前、兒玉將軍が作戰計畫に最善の努力を拂はれ、此の上は唯天祐を仰ぐのみであると、信念せられ、毎朝日輪を拜まれたと云ふが、斯様なことは決して迷信からではない。最善の努力の後に生ずる當然の心理である。

要するに吾等は建國聖戰に於て、神武天皇の胎し給へる最善の努力を盡して後、天祐と神護とを仰ぐとの聖範を堅く心に刻みて現在の長期建設戰を完遂すべきであり迷信乃至は溺れる者は藁でもつかむの心理にならぬやう民心を指導すべきである。

第七に仰ぐことは皇戰は只單に武力のみを以て敵を壓倒するのではなく、歳徳を以て敵を服するのであると云ふ皇戰の特質を御確立御垂範し給ふた點である。天皇は賊共に對しては極めて御寛容にましまし、或は降將を御登用遊ばされ、又は降族を宣撫し給ひ「かたき」の御言は用ひ給はず、「あだ」の御言を思ひ給ふた點などは、書紀を繕けば何人も必ず氣付く所である。建設戰には必ず、徳を以て對手を服することが必要である。東西の歴史を讀み、大帝國の崩壞の因を温ねると建設に際し徳を以て對手を服せざりし所に其の互解の比較的早きを見るのである。又建設を速かにする爲めにも徳を以てするを必要とする。天皇は御準備には長年月を御用ひ遊ばされたか愈々中州の賊の御平定には絶大なる御難儀があつたに拘らず、其の奏功が速かで、而も御平定後にも、國內に動

皇戰の特質

統治の本義を知らしめ給

横がなく、皇化に服したことは一つに天皇の御作戦は聖徳を以て對手を服し給はつた結果であるとして謙考する。
最後に申述べたいことは、天皇の御統治の一端であるが、御即位建國の大詔の中に「夫大人立制。義必隨時。苟有利民。何妨聖造」と宣はせられたことは周知の通りである。此の聖旨こそ眞に建設や統治の根本思想であらねばならぬ。現下長期建設戦は大東亞共榮圏の建設たると共に又其の中心盟主たる我が國內にも幾多の部分的建設事項がある。指導者は口を開けば八紘爲宇の大御理想の具現を絶叫する。まことに其の通りであるが指導者は單に「掩八紘而爲宇」の聖旨のみならず、此の大詔の全部を拜誦して聖旨を奉行せねばならぬ。換言すれば八紘爲宇の聖旨は御結言とも申し奉るべきもので、此の民族的大理想を具現するための道程たるべき聖旨を感佩奉行するの必要がある。此の點は指導者として再考を要する點であるまいかと思はれる。

第二章 景行天皇の熊襲御親征

熊襲御親征の目的

景行天皇の御即位十二年より八箇年に亘る熊襲御親征は、我が西邊の秩序再建設の爲めの長期戦である。熊襲叛亂の原因は三韓の魔手が我が西邊に伸びた爲めであると、考

長期戦指導の重大意義

證してゐる史家もあるが、或はさうであつたかも知れぬ。それはさて置き此の御親征の史を繙き、長期建設戦指導に關し、天皇の貽し給へる御教訓を温ねよう。
此の御親征の史を讀み、吾等の特に意を用ひねばならぬことは長期戦に於ては、兵力と民力とを愛惜すると云ふことである。

兵力民力の御愛惜

日本書紀卷七に、
十二月癸巳丁酉。議討熊襲。於是天皇詔群卿曰。朕聞之。襲國有厚鹿文迹鹿文者。是兩人熊襲之渠帥者也。衆類多。是謂熊襲八十梟帥。其鋒不可當焉。少興師則不堪滅賊。多動兵是百姓之害。何不假鋒刃之威。坐平其國。

とあることは讀者の御承知の通りである。實に長期戦指導の重大戦理を御宣示遊ばされたものと申すべきである。國力や民力及兵力を辨へず殊に、國內民心の動向を洞察せずして勢ひと力とに任せて征戦を續行して失敗することは、往々外國の覇者の史に於て之を見る所である。古くは漢楚の争覇戦に於ける項羽の如きも其の一人と謂はれないことはあるまい。ポエニ戦争に於けるハンニバルのローマ遠征史を見ればハンニバルに對しては之れぞと指摘して非難を加へる程の餘地もなく、彼のカンネ會戦の指導の如きは歐洲人に貴重せらるる戦例であるが、強ひて謂へば、彼はカルタゴ國內の政情、民心の墮落を彼れの優越せる武力のみを以て償はふとするやうな點が見える。意氣は誠に壯であ

るが、遠征の勝利だけでは、墮落したる民心を醒ます其の心を繋ぎ得ざる一證左となるであらう。彼れの征戦も最後には成功しなかつた。其の原因はカルタゴの爲政者の墮落に在るが、ハンニバルとしては、對内的の手を考へねばならぬ所であつたであらう。ケールが暗殺せられ、ルイ十四世の覇業は却て後年佛國の大革命の遠因となり、カール十二世も、奈翁も遂に其の終を全うすることを得ず、第一次世界大戦に於ける帝政獨逸も最後に屈服したのは、何れも長期に於て武力萬能、然も己を知るの明がなく唯覇心に驅られた結果と評せざるを得ざる點がある。是等から見れば後述する我が戰國時代の覇者は遙に優れる點がある。そして斯様な我が武將の戰爭指導精神も歸する所、我が傳統の精神であり、右謹抄の 景行天皇の詔、迦れば 神武天皇の聖戰訓が不知の間に我が武將の血脈に傳へられ流れて居るからである。長期建設戦に於ては常に彼を知ると同時に己を知ることの必要は短期戦や、一戦場の作戦に比し殊の外大切である。就中兵力及民力を愛惜し疲勞倦怠を覺えしめずして戰爭を遂行せしむるの指導が肝要であると思ふ。苦勞艱難は戰爭には附きもので長期戦は其れが殊に加重するが、此の苦勞艱難に堪へ克つて輝かしき勝利を得る爲には 天皇の御親征に於ける作戦の御方針の如く兵力民力の愛惜と云ふことは極めて重要な指導著想である。艱苦に當面した場合、叱咤督勵して効を奏する場合もあり、愛惜激勵を以て目的を達する場合もある。其の何れの方法

を撰ぶべきやは、全く固有の民族性と時の民心動向とに依り定むべきである。

天皇の熊襲御親征史に於て更に拜察し奉ることは 天皇は兵力及び民力の御愛惜の聖慮から皇道に基く御謀略を用ひ給ふた點である。即ち一面大に宣撫し給ふと共に、他面、どうしても歸順しない賊は之を謀略を以て殺されたことである。

日本書紀の傾田國(今の大分地方)の土蜘蛛御誅伐の所に

仍與_三群臣議之曰。今多勳_三兵衆。以討_三土蜘蛛。若其畏_三我兵勢。將降_三山野。必爲_三後愁。則採_三海石榴樹。作椎爲兵。因簡_三猛卒。授_三兵椎。以穿_三山排。草獲_三石室土蜘蛛。

と見えてゐる。茲にも無用の兵力を御使用遊ばされず、御巧妙なる御計策を立てさせ給はつてゐる。所在に蟠居する頑強なる敵を損害を避けて討伐する有力なる一戦法を教へ給はつてゐる。又今日のトーチカ肉迫攻撃に通ずる一眞理をも教へ給はつてゐる。土蜘蛛とはどんなものであつたかは茲に之を考證することを止めるが、かうして古史を讀んでもトーチカ肉迫攻撃の眞理が遠く千八百五十餘年の昔に御創意ましましてゐることが分る。古戦史は斯様な小局部的の所にも貴重性を以てゐる。

天皇の御親征史を繙くと戰闘、謀略、宣撫の三者を極めて御適切に用ひ給ひ、武力のみを以て終始遊ばされぬ所に畏れ乍ら御非凡な點を拜するのである。殊に前述の如く大兵を御親率遊ばされても妄りに之れを動かし給はず兵威の下、謀略と宣撫とを中心に作戦

を御指導遊ばされて居ることは、天皇御作戦の一大御特長と拜するものである。そして其の御謀略も常に皇道に則り給ひ、些かも霸道の如き所を御見受け申さぬ。彼の市乾鹿文が父の熊襲梟帥を酔はしめて其の弦を断ち、皇師の一兵が之を殺した。此の市乾鹿文と其の妹の市鹿文を利用して梟帥を屈服すると云ふ臣下から奏上の謀略の筋は、天皇の御裁可遊ばしたことであるが、市乾鹿文の行爲は聖旨に副はなかつた。即ち左様な不孝を爲さしめ給ふ聖旨ではなかつたのであつた。そこで天皇は其の不孝を惡み給ひ、市乾鹿文誅して妹の市鹿文を火國造と爲し給ふのである。皇國は忠孝一本で、又大義親を滅すと云ふこともあるが、聖旨は此の場合父を殺さなくとも他に歸順せしむる方法がある、大義親を滅すと云ふが、まだ殺すと云ふ最後手段を用ふべきではないとの御思召ではなかつたかとも拜察すると共に、天皇は如何に孝と云ふ點に重きを置き給ふたかを伺ひ奉ることが出来る。そして妹を火國造とし給ふたことは、北條氏が賞朝を殺した公曉を斬つた謀略とは全く比較にならぬ御聖断であり何處にも霸道謀略と申すべき何物をもないのである。

天皇の御一代は右熊襲御親征の外、日本武尊を遣はされての熊襲及東夷の御征討もあり臣下を遣はされての邊境御宣撫もあるが、必ずしも長期戦とも申されぬ。併し熊襲は次の御代の仲哀天皇及神功皇后が魔手の本源を封じ給ふたことに依り其の完全歸服を見

東夷は其の後約七百年恒武天皇の御代坂上田村麿の征討迄完全歸服を見るに至らなかつたことを思ふと、異民族の完全同化は容易の業にあらず、一氣可成的でなく、倦まざる大長期の努力に依り成功するものであると云ふことを知るべきである。單なる目前の三年、五年將又十年や二十年の歲月を以て完成したと思ふが如きは淺見と云はざるを得ない。

第二章 仲哀天皇の御征西 神功皇后の御征韓

我が國の外戦は約崇神天皇の六十五年（紀元六百廿八年）任那の請を容れ給ひ、鹽乘津彦を遣はされ任那に來寇する隣邦の勢力を驅逐せしめられたことを嚆矢とするやうである。爾來任那は我が保護國となつたことは著名の史實である。

其の後二百廿數年韓半島諸國の興亡状況も幾變遷し、仲哀天皇の御即位前より、新羅の勢力は益々募り、其の暴戻は愈々激しくなつた。之を膺懲して韓半島に皇道を宣布し我が西邊を安泰にし給はんとするのが、仲哀天皇の御雄圖であらせられたやうに窺はれる。史家の中には仲哀天皇の御征西は單に熊襲の御親征ではなく、夫れは新羅御征討が

仲哀天皇の御
地圖

眞の御目的であつたと考證してゐる向もあるが、筆者は兵家としての戦史常識からこの説に共鳴するもので熊襲の叛亂は新羅の後押であつたことは、神功皇后の神夢のみならず、事實はそれであつたのではなからうかと思ふ。新羅の有力な第五列部隊が我が西邊に侵入して熊襲を煽動之を援助すること尙支那事變に於ける蔣とその背後の米英との關係と似寄つた状態にあつたのではなからうか。又熊襲征伐と云ふことは新羅征討といふ御企圖を御秘匿の爲故らに御標榜になつたことかも知れぬ。然し斯様な史實の考察は別として、仲哀天皇の御征西は八、九年の長きに亘つてゐる。そして正史はそれを熊襲御征討の爲めだと傳へてゐるが、神功皇后の御征韓と併せ考察すれば、天皇の御征西は假令熊襲の御征討であつても同時にまた新羅御征討の御準備でもある。仲哀天皇が九年の御準備の末、畏れ多くも急に崩御遊ばされたが、既に御準備も成つて居つたので、皇后は電撃的に新羅御進攻を遊ばされたと謹考するも必ずしも見當はづれの妄斷でもあるまいと思ふ。

筆者は斯様に、仲哀天皇の御征西と、神功皇后の御征韓とを通して之を一大長期建設戦として本戦役を概考しようと思ふ。此の、聖戦は我が對外長期建設戦の初めと申して宜しからう。

書紀に依れば、仲哀天皇の御西幸は御即位の二年であり、穴門（長門）の豊浦宮を建

對外長期建設
戦の初

て給ひ之を大本營と爲し給ふたのは、其の年九月である。そして八年春筑紫の香椎宮に行幸ましまし崩御は九年の春であるから此の間八年である。併し御西幸前或は紀州に或は敦賀地方に行幸遊ばされて居るが之も新羅御征討の御準備であると云ふ史家の考察を併せて謹考すれば九年である。

天皇の御征西間の御事蹟は、書紀にも詳しく記されて居らぬ。史家は此の間の御事蹟に付種々と考證して居る。筆者も成る程と肯かされる點もあるが夫れは別として一口に申せば長門（穴門）の豊浦宮にましました間は作戦の御準備であり香椎宮への御遷幸は愈々三韓御親征の爲であつたことは否定することは出来まい。天皇の此の作戦御準備は八、九年の長期であつたと云ふことは非常な大規模な作戦を御敢行一舉に韓半島の禍根を爰除し給ふ御思召にあらせられたと謹考することは決して妄斷とは申されまい。

凡そ作戦は其の準備が大切で此の準備が萬全であらば、實施は電撃的に奏功するものである。神功皇后の新羅御征討は書紀に依れば僅かに二ヶ月である。夫は作戦の御計畫、御準備、御指導の御適切であつた結果たることは申す迄もないが、天皇の長期に亘る御準備が御周到であつた結果とも謹考する。

歐洲大戰に於て獨逸が周到なる準備の下に各方面に於て電撃作戦を行つて居るのを見て驚嘆する向きも多いが千八百年以前に於ける、仲哀天皇及、神功皇后の御作戦を拜す

作戦の成果を
収むるには準
備が肝要なる
所以を御準備

れば、獨軍に驚嘆するに先ち、我等祖先の偉業に矜持を持つべきである。同時に不準備の下に生起したる戦争は其の指導に或は蹉跌を生じ又は、非常なる困難の伴ふものであることを知らねばならぬ。

此の長期戦も最後の二月で結末した

仲哀天皇及 神功皇后の長期御征戦も最後の二ヶ月で片付いた譯である。長期戦は最後の若干月が大事であることは茲にも其戦例を見るのである。神功皇后の御征韓は、速戦速決の得難き範例であるが、本稿は長期戦の史考を目的とするものであるから、速戦速決の作戦を論ずることは其の目的に副はないが、此の御作戦は實に世界に誇るべき國寶的戦史であると考へるので、若干後世の者の心構へとなることに付申述べよう。

御征韓の作戦方針

史家の中には 皇后の御作戦は、各一部を以て現在の大邱及蔚山方面より新羅軍を西方及南方に牽制し 皇后御親率の主力は之を壹岐沿岸に船團として待機し、陸上作戦の進展を見て不意に迎日灣に進航、新羅の首都を衝くにあつたと考證して居る人があるが筆者は戰略眼から此の説に共鳴し、此の説を支持するものである。新羅王は面搏して降を請ふたのも恐らくは新羅軍の主力は皇軍の各一部の爲西方及南方に牽制せられ首都の守備は甚だ薄かつた時機に皇軍主力から其の不意を衝かれ、手も足も出なかつた結果であらう。全く今日の上陸作戦原則の本源であり且つ模範的の上陸作戦と申して宜しからう。

旨旨

責任重なる御垂範

次に特に申したいことは 皇后が愈々御出征と御決心遊ばされた際、御下賜の旨旨に師ヲ興シ衆ヲ動スハ國ノ大事ナリ、安危成敗必ス爰ニ在リ今征伐スル所アルニ、事ヲ以テ群臣ニ付セバ、若シ事成ラザルトキハ罰群臣ニ歸セン、是甚ダ傷マシ、吾婦女ニシテ又不肖ナリ、然レドモ男装シテ強テ雄略ヲ起シ、上ハ神祇ノ靈ヲ蒙リ下ハ群臣ノ助ケニ藉リテ兵甲ヲ振ヒ嶮浪ヲ度リ艫船ヲ整ヘ以テ財士ヲ求メンニ、若シ、事就ラバ群臣共ニ功アリ、事就ラザル時ハ吾獨リ罪アラン、既ニ此ノ意アリソレ共ニ之ヲ議セヨ

と見えて居る事である。凡そ武將の軍陣に臨む場合は勿論、苟くも戦争指導に任ずる者は此の旨旨を以て心とせねばならぬ。殊に責任を重んじ、聊かも之を回避してはならぬ。爲政者の如きも亦然りて、國民に要求し、其の責任を負はすに先ち、自から責任を負ふの範を國民に示すべきである。此の事なければ國民は附いて來ない。口先のみで彼此れ小言を云ふよりも一つ責任を重んずる垂範が必要である。

皇后の御征韓を、純兵學的觀點から謹考すれば、他に幾多の貴き御教訓があるが、本稿の目的上之を省略し、最後に 皇后が熊襲の背後の新羅を討たせ給ふたと云ふことは支那事變と米英の討滅との關係に付遠き以前に於て示唆を與へ給ふたかのやうに伺ひ得

ることを附言し且つ本戰役は、準備を十全にし、準備成らば雷撃的に作戦を行ふと云ふ模範的の戰史であることを重ねて特筆する。

第四章 神功皇后御征韓後に於ける韓半島の經略戰

崇神天皇が初めて任那に日本府を置き給ふてから、約七百三十年、神功皇后の御征韓から約四百六十年に於ける我が外戰史は韓半島の經略戰であり、此の間韓半島へ出兵した回数約廿回である。神功皇后の御征韓後平均廿二、三年に一度韓半島に出兵して居る割合である。此の四百六十年を通じ之を長期建設戰と見るやうな觀方もあらうが、其の各戰役を捉へると一番長いのは、仁徳天皇の御代の末に於ける高句麗との大抗爭戰である。史家は此の抗爭戰は十餘年に亙り其の内四年位は主たる作戦期であつたと考證し且つ其の戰果としては高句麗の南下を大同江以北に喰ひ止めたと云つて居る。此の役は忍苦十餘年の長期戰である。仁徳天皇の三年免租の御仁政も此の長期戰に依り疲弊したる民力回復の大御心からであつたと考察して居る史家もあるが、又之を否定して此の長期戰は仁徳朝の末期から、履中、反正の兩朝に亙ると云ふ説もある。所で此の長期戰

高句麗との抗爭戰

對韓政策史に現はれた教訓

は書紀に記されず高句麗の好大王の碑に依り發見したものであるから、當時の我が國に及ぼした影響とか我が作戦の實相等も判明せぬが兎に角吾等の祖先は當時の大強國たる高句麗を向うに廻して忍苦十年、大同江以南を確保したと云ふ點は明白である。

此の長期戰に付ては先づ此の程度に止め筆者は、神功皇后の御征韓後約四百年間に亙る韓半島の經略史を大觀すると、後世吾等の戒訓たるべきものが甚だ多いやうに思ふが左に其の結論的のもの若干を述べよう。

神功皇后の御征韓後、其の御攝政の時代に於ても更に二回新羅を膺懲し給ひ、應仁、仁徳兩朝を通じ數次三韓に出兵せられて居るが此の時代迄は、我が對韓策は何れかと云へば強硬策で三韓に於ける我が勢力は伸張して居たやうに思ふ。

乍併、三韓就中、新羅は何處迄もづうくしき限りなしである。新羅の對日外交は全く詐謀の一點張りである、履中朝以降に於ては、我が出先の官憲も武將も全く彼れに翻弄せられて居ると云ふ有様である。外交にかけては我が方は全く零で作戦としても亦甚だ不徹底のものが多し。新羅に出兵しても、彼は降服、和を請ひ、朝貢すれば、夫れで満足し、高々王族を人質とすれば夫れで安心して居る。新羅は日本から出兵し、彼れが不利と見れば和を請ひ、反對に日本軍に弱點ありと見れば之に乗ずる、日本は新羅から降參を申込み朝貢を約すると、夫れで勘辨してやり、直に撤兵する。我が軍が引上げる

と、新羅は又策動を初める。外交上に於ても日本の決意が弱いと見ると、威高になつて付け上り、日本の決意が強いと見ると頭を下げる。全く始末は悪い。(明治の初め頃から日露戦争前迄の韓國の對日外交振りは新羅の對日外交の生寫しであるやうな氣持ちがある)

履中朝から推古朝迄は右申したやうなことを繰返し、二百數十年を經つて居るのである。

書紀を緝けば、履中朝以降は我國史にも、餘り香しからぬ事柄、否、頗る忌むべきことも尠なしとせず、大逆事件もあつたことは周知の所である。内には權臣が權を恣にし或は權力を争ひ、外では韓地の總督とも云ふべき者が新羅と通じて祖國に向つて弓を引き、其の他と雖も韓地の施政經路見るべきものがない。夫れと云ふのも氏族制度が其弊を増した爲めで、内では凡庸者流が國務に當り、私慾滿々たる權臣が我儘の一切を爲し平群眞鳥の如き皇位を窺ふ大不逞漢や、蘇我の馬子や入鹿の如き大逆を敢てするやうな大逆臣が居つては、對外策はうまく行かう筈はない。雄略朝より以後、聖德太子の攝政前迄の間には我が國史上國家の爲大功あつた重臣は殆どなく多くは只惡行と醜名とを後世に遺した權臣のみであると評するも過言ではない。

兎に角萬事は人が其の基である。神功皇后の御偉業も、履中朝以後に於て衰弱の一途

を辿つたと云ふ原因には種々あるが、歸する所重臣の凡庸と其の罪惡が最重要因である。内に其の人を得ず、内が整はずして力を外に用ひ得よう筈はない。内を整へて後、力を外に伸ばすのが正道であり、整はざる内を整へんが爲、民心を外に向けようとするのは奇道である。我が上古に於ける對韓史を見ると内も外も整はずと云ふ時代は二百數十年もあらう。

列聖は何れも御英邁にましましたが、一、二の重臣を除くの外は輔弼の文臣は皆凡庸武臣は凡將であり、對韓策に勇斷なく、却て御雄大なる皇諷さへも遮り奉ると云ふやうな奴輩が重職を占め、假令出兵しても將帥は作戰頗る拙劣であつたことも尠なしとしな。幸にして、聖德太子が攝政となり給ひ大に内を整へられ、對外策も亦高邁なる御方策を以て臨まれたが、御早逝の爲、遂に有終の美を見ず、中大兄皇子は蘇我氏を誅滅し給ひ、大化改新を御斷行更に韓半島の回復戦を御企圖遊ばされたが、白村江に於ける我軍の失敗に依り、御目的を達し給はず、遂に三韓を放棄し、専ら内を整へ給ふこととなつたことは今茲に詳説する迄もないが、履中朝以降約二百餘年間の内治外交史と、近世の黨略的内政史、軟弱外交史とを較ぶると考へさせられることが甚だ多い。繰返す歴史を繰返さぬやうにする努力は何時の時代の國民にも課せらるる重大使命である。要するに、上古の我が對韓策の失敗史は全く後世吾人の戒訓史である。滿洲建國に引

續き今日大東亞の共榮圏の建設を爲すにも二百年三百年は愚か、永遠の搖ぎなき方途を立てねばならぬ、三韓領有約五百年にして之を放棄し、爾來千餘年の後、再び完全に我が領土となつた歴史を偲ぶと、上述したやうな遺憾なこともあるが、我が皇運の天壤無窮と國家の悠久性の絶對的であると云ふ信念が益々強くなる。

それについても考へねばならぬことは、如何なる大業を成すにも所詮は人である點である。

史を按ずれば、國に朋黨派閥あり、人の登用に好き嫌ひがあり、或は縁故や知、不知で人の登用を決する時代は決して國勢の盛んな時代ではない。假令一黨一派により或は一人の傑物により國勢が榮えても決して永續するものではないことは歴史が雄辯に物語つてゐる、英傑により率ゐられてゐる外國の姿に憧れを持つたり、羨む必要は毫もない我國史中にも凡庸なる重臣や大逆不逞の權臣の爲國家の動亂を招き國威を失墜した例はあるが、吾等は萬世一系、現人神と仰ぎ奉る至尊を奉戴することは何れの國も企及し得ざる所である。何人も國體觀念を益々明徴にし、大御心を奉體し、承詔必謹の精神に燃え之を實行に現はせば之れ程強い力はない。吾等は國史を讀む場合に於て、國內のごたごたは承詔必謹精神の不振時代であることを見落してはなるまい。

異民族同化の長期性

第五章 蝦夷の同化戦

既に述べたやうに、蝦夷の同化戦は、景行天皇の御代から初まつて、桓武天皇の御代に於て完成したと云つて宜しからうと思ふが、此の間約七百餘年で、主たる征戦は約十回ある。七百餘年間に約十回で、一回の征戦は何れかと云へば短期の方である。故に之を長期戦として見ることも當を得ないが、異民族を同化して、完全なる建設を爲すには實に長年月を要し、此の間屢々征戦を必要とすると思ふ。

此の七百餘年間の、對蝦夷同化策を見ると、所謂恩威並行策で、武力と宣撫とを併用し、武力の行使でも單なる撃攘、撃滅策ではなく歸順すれば之を同化し、従はねば鐵槌を下し、然も要點に築城して之を根據として統治と作戰とを行つて居る。此の點は坂上田村麻呂將軍の征戦に於て最も顯著である。

蝦夷の同化戦と、三韓の經略戦と比較すると、其の將帥の凡、非凡は成敗の岐るる所であると思ふ。三韓の最初の征伐は御英邁なる、仲哀天皇の皇謨に基き、一世に御傑出ましました神功皇后の御統帥の下、武内宿禰の如き文武兩道の賢臣が輔弼申上げて居つたから、赫々たる大成果を挙げ得たのである。所が、其の後の三韓經略戦に於ては、葛城襲津彦、大伴金村以外は何れも凡將であると云つて宜しからう、反之蝦夷の同化征

三韓と蝦夷との征戦比較

戦に於ては日本武尊を始め奉り坂上田村麻呂の如き古今稀な大名將がある。阿倍比羅夫や大野東人の如きも相當の武將であつたやうに思ふ。東夷同化征戦には、將軍に其の人を得、施策又適切であつた。尤も、三韓と蝦夷とを比較すれば、蝦夷は文化も低く、精悍ではあるが、新羅のやうな詐謀術策等はなく、單純であつた點は同化經略に容易であり、當時の大陸強國との關係も、三韓に於けるが如く施策に困難がなかつたとは思ふが何れにしても矢張り人を得ねばならぬ。桓武天皇の御代に於ける、第一の征東使たる紀ノ古佐美は大敗し、田村麻呂將軍の起用に依り初めて、徹底したる建設同化の基礎が確立した譯であるから兎に角、人を得ねばならぬ。

筆者は三韓の經略や東夷の同化の迹を顧み、之を明治の御代以後の外戦に思ひ及ぼすと、明治の始めから結局大陸建設に終始して居るのである。後世史家は、今日吾等が、上古五百年の三韓經略や、七百年の東夷同化史を見ると同様に居るであらう。明治の御代に、始めて大陸建設に乗出してから、まだ僅かに七十餘年の歲月しか経過して居らぬ然も對手は皆異民族である。文化は進み國交關係は複雑である。上古、中古に互る三韓や蝦夷の經略同化史を考へると一朝の成果に酔ふことも亦一時の難局を憂ふるが如きことも嚴禁である。常に人材を登用して其の局に當らしめ、施策に萬全を期し、蝦夷同化の如き永久の成果を收むべく、上古の對韓策の如き結果にならぬことを考へねばなる

蝦夷の同化期を顧みよ

はら。

第六章 前九年の役

本役の年月考

前九年の役は我が國史上有名な國內長期戦である。此の役は、紀元一七二一年（永承六年）八月、陸奥の俘囚長、安倍頼時が陸奥六郡を併せ、勢力強盛貢賦を收めず、兵を出して恣に近隣を劫掠したことに端を發する。俘囚長と云へば蝦夷族の管理統督者とも云ふべきものである。此の役の終つたのは、紀年一七二三年（康平六年）であるから頼時叛逆の年から平定迄は約十三年である。併し源頼義が赴任、一旦宣撫したが其の後頼時の長子貞任の亂行が原因で、頼時が再叛し頼義は再任を奏請して留任することとなり、且つ勅を奉じて頼時を討伐することとなつた年から、頼義が京師に凱旋する年迄を數ふると、丁度九年となるから、或は之れで前九年の役と云ふかも知れぬと筆者は常識で考へて居る。何れにしても長期戦である。

頼義起用と戦斗開始

頼時が謀叛した當時の陸奥の國司は、藤原登任と云ふ者であつたが、頼時の行爲が眼に餘るので、之を討伐した、所が散々に敗北し、賊勢が益々募るので朝廷は當代第一の武將たる源頼義を起用して、陸奥の國司としたのであつた。

頼義は當代東國に於ては衆望双び無き名將であつたから、頼時も勿論、可成り怖れを

爲したのであらうが、頼義は、頭から武力を用ひず、克く宣撫し、偶々大赦令も下り、頼時も従順に頼義の命を奉ずるので、頼義は武力を用ひずして、治平の實を擧げることが出来た。頼義は戦はずして善く勝つた譯である。

頼義は戦はずして、克く治績を擧げたが、愈々四年の任期も満了したので、京師に歸任することとなつた。所が、此の間に問題が起つた。夫れは、頼時の長子貞任が、頼義の部下たる藤原貞光の妹を貰はふとして刎ね付けられた私憤から、或る夜貞光を襲つて、狼藉を働いたことである。そこで頼義は怒つて貞任を召喚して處罰しようとした。之を聞いた頼時は、貞任は必ず斬罪に處せらるるだらうと思ひ、我が子の可愛さに遂に頼義に對し叛旗を翻へした。此の事は周知の通りである。是に於て頼義も武力を用ひねばならぬこととなり、朝廷に對して再任を奏請し、留任することとなり、且つ勅を奉じて頼時を討伐することとなつた。

以上の史實を見て今日吾人が何を教へらるるか。凡そ、古今東西の戦史を按ずると、戦争の原因には複雑なものが潜在してゐるが、戦争勃發の動機と云ふものは、何れの時代に於ても、單純なものである。戦争の原因も煎じ詰むれば、正邪の争ひか、政策の衝突で戦争は其最後の解決手段となる譯であるが、時代は進むに従つて國內及び國際の環境も、複雑になるから、戦争原因も錯雜した觀を呈するに過ぎず、苟めにも一國に戦争意

戦争勃發動機
の単純性

外交は國の實
力が根柢

茲にも長期戦
の結末の短期
なるを見る

思があらば戦争は極めて單純な動機から起ることは古今變りない。吾人は常に相手に戦争の意思ありや否やを洞察看破することが緊要である。對手が戦争に訴へる意思があらば、名外交も平和的奏功は覺束ない。對手に戦争意思がないと拙なき外交も一時的には奏功する。對手の戦争意思を封ずることは外交手段も、勿論萬全でなければならぬ。けれど我方に強大なる實力を有して居ることは對手の戦争意思を封ずる最高の要諦である。頼義が當代第一流の名將で、實力もあつた所に第一任期には兵力を用ひずして宣撫功を奏したのであらう、頼時の再叛は、動機は單純であるが、元々陸奥に蟠踞し、中央政界の墮落に乘じ、覇を唱へようとする意思のあつたことは掩ふべくもあるまい。此の野心が、頼義の歸任時に於ける單純なる動機から再び燃え出したものと見ることも強ち妄斷でもあるまい。要するに強大無比の軍備を整へ、之を自由自在に維持運用し得る經濟力を具有することは、對手の戦争意思を封じて、戦はずして勝ち、縦し戦つても必ず勝つるの要諦であることは、古今東西を通ずる眞理である。

前九年の役を見ると、頼義が、兵を動かしてから約八年間は、只惡戦苦闘の繰返しと云つて宜しからう。そして最後に清原武則の増援に依り、清原軍の参戦後約五十日にして、賊軍が殲滅せられた。茲にも長期戦は最後の二ヶ月足らずで勝敗が決すると云ふ實證を遺して居る。清原軍の参戦を見れば、恰も第一次歐洲大戰に於ける米國の参戦の縮

頼義の努力と責任觀念

圖的な史觀が浮ぶ。長期戦に於て、交戦者が疲勞し切つた所に、一方に新手が加はると大勢が定まつてしまふ。再任より、三任に亙る約八年間の官軍の悲況に堪へ克ち、然も此の間百方手段を繰らして、遂に、清原氏を參戦せしめたと云ふ頼義の努力は長期戦に處すべき吾人の心構への龜鑑とするに足らう。

流言蜚語の危

頼義は頼時の再叛を討つ爲、衣川の柵に向ひ出動の初頭、先づ失敗した、夫れは歸順した新附の將、藤原經清、平永衡から起つた問題で、頼義は部下の言に依り、永衡が二心ありと認定し之を斬首した爲め、經清は害又我が身に及ぶことを虞れ頼義の麾下に脱しようと思ひ、流言を放つた。此の流言は、頼時は間道より輕騎を放つて頼義の根據地たる國府を襲はうとして居ると云ふのである。當時頼義は衣川の柵を攻めんとして進軍中で、部將の妻子は皆、國府に残してあつたから、部將も非常に憂慮し、軍中動搖を始めた。頼義は重臣の意見に従ひ、やむを得ず一部を残して賊軍に對せしめ、主力を率ゐて、一旦國府に引返した。處が残置した一部は却て賊軍から反撃せられ大敗してしまつた。そして此の流言の張本人たる藤原經清も、此のどさくさ紛れに再び賊軍へ走つてしまつた。

頼義が、部下の言を信じ永衡を斬つたことは、或は輕卒であつたか、夫れとも、其の

降將の取扱を考へよ

必要を痛感した爲かは詮議立てする必要もないが、歸順した新附の將をうまく用ひて行くことは、武將としては大切なことで長くも神武天皇が、降將を御登用遊ばされたことに照らすと頼義は思尙慮すべきものがあつたのではなからうか。

藤原經清を成

藤原經清の謀略にすつかり引つ掛かつた官軍の淺慮は講評の限にあらずといふべしだが軍中は云ふに及ばず、戦時下の流言蜚語の取締の必要は今も昔も變りはない、頼義はこの蹉跌の爲、第二の任期間、遂に平定の功を奏せず、依つて朝廷でもやむを得ず、更に頼義を三任せしむる事とした。

頼義の苦境の克服と政治工作

處でその頃陸奥やその隣接諸國は饑饉で、官軍は糧食の缺乏を來たし、軍を去る者が續出し頼義の苦境は更に増加した、然し頼義は屈せず、百方手段を盡して政治工作を行つた。就中俘囚の歸順工作に力を用ひた。其の結果、阿倍富忠と云ふ者が、頼時に叛いた。頼時は之を讒意せしめようと思ひ、自から兵を率ゐて出向いたが、富忠は途中の險要に伏を設けて頼時を掩撃し、頼時は、流れ矢に當つて戦傷死してしまつた。併し其の子、貞任は之に依り屈服せざるのみか、益々其の戦意が旺盛となり、平定難は加はるのみであつた。

呆れ果てた頼義政治

頼義は、爾後の作戰の爲、中央政府に對し、兵員の補充及び糧食の補給並に當時迄に於ける部下の恩賞を要請したが、何れも中央政府の容るゝ所とならず依然として頼義獨

長瀬に於ては適時の恩賞が必要

力で討伐を繼續せねばならぬ状況であつた。藤原氏を首班とする門閥内閣の墮落政治の程、窮ひ知るべしである。彼のカンネの會戦後、ハンニバルが大勝をカルタゴ政府に報告し、分捕つた金銀を送り兵員補充を要請したが、政府は之に應ぜず、只夥しき金銀のみを受取つて、喜んだと云ふことと、東西一對の悪例だらう。作戦は片付かないのに、恩賞を要請するなどは早過ぎるとは、當時の藤原内閣の主張であつた。併し長期戦に於ては、適時恩賞を詮議することの必要であることは、今日目のあたり行はれてゐる所で明らかである。

頼義の苦言四年

頼義は、其の後、苦心の後、多少戦力が準備が出来たので、攻勢に出たが、黄の海川畔の戦ひで又大敗し、長子義家の奮戦に依り、身を以て虎口を逃れたと云ふ悲況となつてしまつた。黄の海川畔の戦以降約四年の間は、頼義は苦難のどん底に陥つたと云ふ有様で、中央政府は一向構つて呉れぬ。叛軍は所在に横行、掠奪を恣にするが、手の付方はなく、見す見す其の跳梁に委せねばならなかつた。頼義の苦心と無念は察するに餘りがある。

幕府政治の遺因

頼義の第三の任期が康平四年十二月で終るので、政府では、高階經重と云ふ者を陸奥の國司に任じ、彼は著任したが、國人は頼義を慕つて、經重の命を奉じない。經重も是非なく、京都へ歸り、政府に此の由を報告したが、廟議は區々で、其の措置を決せず、

頼義の政治上の素質

頼義は自然留任と云ふやうな型となつた。藤原内閣の迂濶さと、頼義の衆望共に離くの外はない。斯様な、藤原門閥政治の弊が重積して兵政兩權が武門に歸してしまふ遠因となつたことは、今更説明する迄もあるまいが、藤原氏が榮華を貪り武事を放棄し、武家が攝關家藤原氏に取入つて、武威を振ふたのは、幕府政治の素因である。

頼義の旺盛なる責任觀念

頼義は、斯かる苦難に處しても平定の念が熄まず、心肝を碎いて工作した揚句、遂に出羽の俘囚長清原氏を動かし、其の來援を受くることとなり、康平五年七月、清原武則は兵一萬餘人を率ゐて來援し、是に於て爾來約五十日連戦連勝の後九月十七日遂に賊の一黨を厨川柵に殲滅した。頼義は、永承六年、任を陸奥守に拜してから、康平七年京都に凱旋する迄、數へて十三年である。頼義は凱旋の時は七十歳の高齢であり、貞任討滅の作戦期は、六十八歳である、六十九歳の時は尙戦後の處理をして居た譯である。

清原武則の増援を得てから、賊軍殲滅迄の戦史を見ると、純兵學觀からは頗る貴重な教訓が多々あるが、事、餘りに純兵學専門に屬するし、必ずしも、本稿の目的でないから、茲に之を省略するが、兎に角、頼義が、寄る年波にも屈せず、殆ど、獨力で此の長期戦を完遂した努力と堅忍力及責任觀念は今日吾人が學ばねばならぬ所である。夫れに付けても、頼義に對する地方軍民の信頼心を見落してはなるまい。此の信頼は、頼義の人格手腕技術の卓越からである。眞の信頼は其の言に依るものではなく、必ずしも其

頼朝が軍民の信頼を集めた

武則の執事心

の徳に依るものでもない。危急の場合とか、戦亂の巷で其の指導者の技倆手腕と其の實行力や成果に信頼するのである。頼朝も徳望のあつた武將であつたことは明瞭だが、永衡を斬つたり、貞任を處刑しようとしたり、或は厨川柵で捕へた經清を鈍刀（一説には鋸）で斬首したり、又假令清原武則の進言とは云へ、貞任の子の僅か十三の千世童子を斬つたと云ふやうな所を見ると、必ずしも寛容の人でもない。頼朝の傳記類を見ると、頼朝は作戰上の著眼、機略も十分あつたことは勿論だが、財を惜まらず部下を勞はり、苦樂を共にし部下を使ふことが非常に上手で、又政治工作などは極めて巧であつたと思はれる點が、段段ある。彼に對する地方軍民の信頼は茲に發して居るやうに思ふが、財を以て人を釣ることは見上げたことではない。だが兎に角國史上では一流の武將の列に入るべき人である。

清原武則も却々の名將で、頼朝は武則を尊重し、武則をして喜んで作戰を爲さしめて居る。武則は來援し頼朝と會見、爾後の作戰方策を定め、前進部署を終はると、彼れは遙に皇居を拜し、

臣は將軍の命を受け、子弟を率ゐて貞任征討の軍に従ひました、之れより一身を顧みず、死生を眼中に置かず、忠節を勵みます。八幡大神、臣が誠心を照覽し給へ、若し臣が身命を惜み、死力を盡さぬときは、神罰を蒙つて潔く死に就きます。

と云ふ意味の誓ひを天地に向つて立てて居る。斯様な誓ひは當代武人間に行はれたので

頼朝の執事心

源賴朝の

あるか否やは別として、武則が、此の誓ひに先ち遙に皇居を伏拜んだと云ふこと、當時藤原一族の文臣が、至尊を蔑にし奉つたことを比較すれば感慨禁ぜざるものがある。清原氏は一地方の豪族で實力があるが、身分地位低く謂はば國民大衆の巨頭に過ぎぬ。然も斯の如く尊皇心が篤いのである。之を藤原氏の專横と比較し、遡れば蘇我氏の不逞降ては北條義時、同高時や足利尊氏の大逆を見ると、我が歴史を汚瀆した者は文武の權臣である。尤も平將門とか、阿倍頼時貞任のごとき、遡れば、平忠常の如き叛徒もあるが、其の因つて來る所は、權臣の失政からである。我が國民大衆の血脈には武則の如く固有に尊皇心は漲つてゐることは、此の役にも其の片鱗が見えて居ると思ふ。又頼朝の苦心功勞もさること乍ら大御稜威に依るにあらずしては出來ないことである。武則の如き尊皇心篤き人を得たと云ふことも、全く大御稜威の賜であると申すべきである。

第七章 源賴朝の覇業確立戰

源賴朝が以仁玉の平氏打倒の令旨を拜し擧兵したのは治承四年（紀元一八四〇年）の八月下旬で、平氏を滅したのは文治元年（紀元一八四五年）の三月下旬であるから、先づ四年半で、長期戰の部類である。其の後文治五年（紀元一八四九年）奥州征伐により頼朝の覇業が完成したと見て宜しいが、平家打倒から奥州征伐迄の中間四年半を奥州征伐

反國體建設

の準備工作期間とすれば頼朝の覇業は約十年の歳月を費して完成したと見て宜しからう。此の覇業戦の長期建設史観に入るに先ち、申し度いことは、此の長期建設戦は特別の観方をせねばならぬと云ふことである。蓋し頼朝の覇業確立戦は之を正當なる國內長期建設戦と見ることが出来ず、極めて變態、否、反國體的建設であり、他の國史上の長期戦と同一に取扱ひ得ないと思ふからである。依つて先づ覇業批判から初めよう。

古來、頼朝と義經との抗爭史を見る人は、多くは義經に同情し、頼朝を惡評する。併し英雄は英雄を知り、覇者は覇者を思ふ爲か、秀吉や家康は頼朝を賞し、家康の如きは所謂判官びゐきなどは婦女子的な感情論だと云つて居る。近時の史家の評論中には頼朝を賞め、頼朝の政治、軍事又は經濟的手腕の非凡性を讃へ、頼朝が幕府を開いたのは時代の動向上やむを得ざるのみならず、之が寧ろ却て、國家の爲であつたかの如く論じ且つ頼朝は尊皇心も厚く、家康の如く表面朝廷を敬ひ、裏面では御拘束申すと云ふが如きことはなかつたと觀る人は尠くない。北畠親房の神皇正統記などでも、頼朝の建幕を必ずしも咎めて居らぬ。

けれども、筆者は義經びゐき論にも亦、頼朝禮讃論にも、可成り異論がある。成る程義經は作戦は上手で、其の用兵の果敢神速、不退轉且つ、作戦上の機眼機略の卓拔な戦例を見れば、後世の範とするに足るものが多い。其の末路も氣の毒に思ふ。併し平家討

頼朝の禮讃批判

滅に急にして、遂に神器の一つたる寶劍を失ひ奉りしのみならず安徳天皇を恐懼窮りなき崩御に導き奉つた責任は、斷じて許すべからざる大逆的失態である。二位尼の無分別も論外だが義經としては假令作戦の一部を犠牲としても他に思慮をめぐらさねばならぬ所である。頼朝は此事あるを豫め憂へて二弟に注意して居る。併し此の注意を與へたことを以て、頼朝の責任解除とはならぬ。頼朝は後日義經を勘當した有力なる原因の一つも茲にあるのは可なりとするも、自分で涼しい顔が出来ない所である。筆者は頼朝の尊皇心も甚だ不徹底であると評せざるを得ない。一部の論者の云ふ如く、頼朝の朝廷に對し奉る態度は、家康とは違ふ點は筆者も首肯する、頼朝の政治、軍事等に關する手腕や武將としての人物をば、我が國體を離れて觀察するならば、夫は偉傑であらう。併し我が國體に立ちて論ずるならば、建幕は大義名分に反し體よき大權の篡奪者と謂はざるを得ない。尤も、朝廷では、頼朝の建幕を御認容遊ばされたのだから、よいではないかと云ふ人もあるかも知れないが、朝廷では、時の勢ひ上、是非に及ばず、頼朝の爲すが儘に御認容遊ばし給はざるのやむを得ざるに至つたと觀る方は正しいと思ふ。

由來、日本の識者の中には尊皇心を單に宗教的な尊崇のみに考へ、唯精神的に敬ひ奉ることを以て、尊皇心の全部なるかの如く考へてゐる人もある。

天皇が政治の如き俗事に御拘り遊ばされぬ方がよいなど、途方もないことを論じた學

者すらあることは、讀者各位も知らるゝ所であらう。筆者は、斯かる尊皇論には根本から反對する。

天皇歸一と云ふことは、日本の根本體制であり、天皇即國家である。日本國は天皇の御物であり國家統治の大權は、天皇の固有し給ふ所である。國家統治大權の御施行を忠誠に輔弼、翼賛し奉るにあらざれば完全なる尊皇ではない。賴朝禮讚論者の思想は、宗教的尊崇を爲せば、國家統治大權の御委任を願ふても宜しいと云はん計りの思想が潜在するのではなからうかとの疑ひを抱かざるを得なくなる。賴朝論を爲す場合には建幕は許すべからざる行爲であることを基礎として論じなければ、臣民の大義名心を蝕む虞がある。

尙一つ特に申して置きたいことは、賴朝の建幕に至る迄の政治史である。此の政治史に就ては長くも 明治天皇が明治十五年軍人に賜はりたる 勅諭の御中に

中世に至りて文武の制度皆唐國風に倣はせ給ひ六衛府を置き左右馬寮を建て防人など設けられしかは兵制は整ひたれども打續ける具平に狃れて朝廷の政務も漸文弱に流れければ兵農のづから二つに分れ古の徴兵はいつとなく壯兵の姿に變り遂に武士となり兵馬の權は一向に其武士どもの棟梁たる者に歸し世の亂と共に政治の大權も亦其手に落ち凡七百年の間武家の政治とはなりぬ世の様の移り換りて斯くなれるは人力もて

挽回すべきにはあらずとはいひながら且は我國體に戻り且は我祖宗の御制に背き奉り淺間しき次第なりき

と仰給はつてゐる、世の賴朝禮讚論者はこの 勅諭を今一度拜讀ありたい、論者若し、明治天皇に於かせられても「世の様の移り變りてかくなれるは人力もて挽回すべきにあらずとはいひながら」と宜はせられたと申し此の 聖旨に甘えて賴朝の兵馬の大權奪奪を時の勢ひとし己むなしと論ずるならばそれは臣子としての論ではあるまい、臣下としては何處迄も武家政治排撃思想を有してこそ政治上の勤皇精神を産むのである。

更に右謹抄の 勅諭の御中にも「國體に戻り」と聖斷あらせられ又續いて 勅諭を拜讀すれば「再中世以降の如き失態なからむことを望むなり」と仰せ給はつて居る。賴朝の建幕などは史家として辯護の餘地はない筈ではないか。此の 聖旨に副ひ奉るには臣下としては何處迄も武家政治を排撃すると云ふ意識に燃えねばならぬ、明治天皇は過去を許し給ふたことは、御仁恕の大御心からであると拜察し奉るが、臣下として此の御寛大なる大御心に甘え申してはなるまい。宜しく祖先臣下の爲した所に恐懼縮して、苟くも武家政治の如きことあらば斷乎として排撃せねばならぬ。

更に史を按ずれば、藤原氏は權を恣にし、榮華の一切を盡し、政權を襲斷して不臣の限りを爲したことは武家政治の原由である。武臣は藤原攝關家に取り入り、その爪牙と

なり、この間武力を養ひ、地方的勢力を得たことは、藤原氏の悪政を生んだ必然の結果であると共に亦藤原政權を功利的に利用した武臣の野心からでもある。

平清盛は藤原氏の勢力を完全に封壓し、源氏を打倒して政權を掌握し、所謂平氏の天下としたが、藤原氏の末期をめぐる平氏及源氏の歴史は謂はゞ國內朋黨の武力闘争史である。立憲治下の政黨が相争ふたのと較ぶれば手段こそ異れ、心理は一つである。

二十年に亘る平氏の天下も、最後には又頼朝に依り打倒されてしまつた。此の源平兩氏の抗争を見て居つた在京の野心ある文臣は、又頼朝に取り入つて野心を逞うした、そして頼朝を助けて遂に幕府と云ふ全く國體に戻り國體を無視した政治體制をでち上げたと云ふことになる。要するに國體觀念の不明微なる文武の權臣の功利的野心に基く苟合が、遂に斯かる反國體且つ不臣な政治體制を作つたのである。斯かる歴史は斷じて繰返してはならぬ。之が爲には國體觀念と之に基く政治意識を明微にするを基礎要件とする。抑も武家政治と云ふことは、武人が政治の局に當ると云ふ形式を云ふのではない。昔七百年間武家が兵政兩大權を兼奪したから武家政治と云ふのである。文臣と雖も政權を兼奪すれば、其の本質に於ては所謂武家政治と同様である。一國一黨で政治を行ふは、幕府に等しいとの論は尤もである。絶對多數黨が政權を獲得して横暴を爲すことも亦、反國體政治で準幕府政治である。

心なき言論

軍部大臣の政治上の立場

曾て巷間に於て、軍は政治の推進力であると書き立て、謂ひ觸らしたことがあつた。

甚だ奇怪な心なき言論と云はねばならぬ。軍部大臣が政治の推進力であると云ふことは必要なる場合もあり別段不思議ではないが、軍は政治の推進力であるなどと云ふことは勅諭に照して許されざる所である。又政治に關する軍の總意と云ふやうな言論を見聞したこともある。是れ亦軍の自分を無視したる言論である。萬一にも軍が、政治や政府を左右するが如きことがあらば夫れこそ、幕府政治への初歩であるが、過去軍部大臣の辭職に依り内閣が總辭職したのは、斷じて夫れとは意味が違ふことは勿論である。元々軍部大臣の任用に特別資格を定められた所以は軍令と軍政との間に、密接不可分の關係があり軍部大臣が、統帥權の或る部分には參畫し、又は奉行せねばならぬ事項もあり、又軍人軍屬の統督の爲には現役に在る大中將を以てするを事實上必要と認めらる爲であり、軍部大臣の任用資格の制限を楯として内閣の性格や政治をして軍部大臣の意の如く爲さしむる爲ではない。併し若し時の内閣にして國防を無視するが如きことがあり、軍部大臣の意見が容れられずと云ふやうな場合には決然として辭職することあるは、軍部大臣の政治責任上當然有り得ることである。過去の政治史にも、見る所であるが之は己むを得ざる最後の施策であり、傳家の寶刀を抜くが如き意味ではあるまいと想ふ。

要するに、軍部大臣に其の人を得、軍部大臣任用の資格制限を正しく運用すれば、他

の政治のことも國防目的と馳背しないやうになるであらうし、時には誤れる政見をも匡正し得る副効果もあるであらう。之に反し、軍部大臣の任用資格の制限ある制度を亂用すれば、全く武家政治と同然となり、明治天皇の 聖諭に反し、果ては國體にも戻る結果となるであらうと考へる。

所論は聊か横道へ、それたやうに讀まれる向もあらうが、筆者の意ある所は、武家政治の創始者たる頼朝の覇業確立戦は、之を正當なる國內長期建設戦と見ることが出来る。極めて變態、否、反國體的なる建設であるから、先づ此の根本を批判清算し、殘餘に付單なる長期建設批判を試みんが爲であり、尙ほ一つには、滿洲事變以來今日迄軍部の權威と軍部大臣の特別任用資格に目を付け、軍部に阿諛し、軍部に取入り、私心を遂げんとすること猶、大江廣元、三善康信の如き類なきにあらざるやを疑ひ且つ憂ふる爲である。

さて以上の批判を以て、頼朝の建幕と云ふ點を清算して、彼れの覇業確立を観るならば、長期建設戦として考へさせらるゝ若干點があると思ふ。

頼朝は、以仁王の令旨を拜してから約四ヶ月の後に擧兵したが、石橋山の戦に敗れ危く虎口を逃がれて、海路房州に走り、該地方に於て再擧を圖り、源氏恩顧の將士の來會に依り強大なる勢力を得、東下の平軍に先ち函嶺を越えて富士川河孟に進出し、平軍

恐るべきは又

國民として度
胸を据へしめ

政敵兩略の一

と對峙したが、平軍が源軍の優勢なるを聞き、士氣動搖してゐる處へ、源軍の一部が平軍の側背に向ふ夜間行動により、水鳥の大群が飛立つ羽音を聞いて平軍は、敵襲と誤認して戦ひを交へず、先を争つて敗走したことは殊に有名で嘘のやうな戦史であるが、兎に角文弱に流れるとこんなことになること云ふ古來の良き戒めである。關東大震災時の朝鮮人騒ぎのことを想ふと古今一對の惡例である、度胸が据らぬとこんなことは得てあることである。國民防空の強化を提唱せられると、避難の用意をするなどと云ふに至つては話にならぬ。長期戦となると艱苦も加重して來る。そこへ色々の雜音が混ざつて飛ぶ國民が敏感と爲り易い。此の間に處して、國民に油断せしめず且つ度胸を据えしむることは、戦争指導上大切な一要目であることを重ねて強調する。

斯くて源軍は殆ど戦はずして平軍を追落した。當時頼朝は平軍を追撃西上しようとしたが、麾下の部將等は「奥羽常陸地方は未だ從屬せず、我が背後を窺つて居るから、該地方を平定從屬せしめたる後、西上するも尙遲しとしない」旨を意見具申したので、頼朝は之に従ひ、兵を返して、常陸の佐竹氏を撃ち、愈々本據を鎌倉に設け關八州を治めなほ駿遠地方の一部を派遣して平軍の再東下に備へしめた。

是に至る迄作戦経過を見ると頼朝敗死の偽報のことや、頼朝が平軍に先ち函嶺を越えた事など、純兵學的には種々教訓となることがあるが、此のことは暫らく措き頼朝は平

軍敗走後之を追撃せず、先づ關東に根據を定めると云ふ策に出たことは、政戦兩略の調和としての一例であり、此の決心が、頼朝の覇業達成の重要基礎となつたことは見落すことの出来ない史實であらう。當時若し頼朝が平軍を追撃して西上したならば、義仲よりも遙に先きに平氏を京都から追落したか、それとも、清盛と云ふ怪物が尙生きて居るから果してどうなつたかも知れぬ。縱し、平家を追落しても、對宮中及び公卿とのことも義仲のやうではあるまいが、可成り勞苦が伴ひ、其の結果がどうであつたであらう。頼朝の追撃中止、根據固めの決心は、彼の覇業確立の基礎となつたことは争へないと思ふ。

内を整へて力を外に伸ばせ

此の事は後世吾人に對し、長期建設に於ては、國內を安定して力を外に伸ばすの必要を教ふると共に、建設地方に一石を打たば、之を基礎として先づ其の地方を堅め、次いで、次の地方に及ぶの堅實なるを教ふるものである。圍碁に於て、四方に打つた石をうまく連ねて、大勝を博することは強者のやる所であるが、弱者は隅を堅めて中央に進出する。頼朝は舉兵時は勿論富士川進出頃も、清盛との對局では必ずしも未だ強者とは云へない。先づ鎌倉に根據を据ゑ、關八州領有を確實にしたことは堅實である。然も此の根據地堅めの間には約二年を經過して居る此の間、木曾義仲の西上となつた。尤も、義仲は頼朝に諒解を求めて西上して居るが頼朝は強ひて之と先を争はふとはせず泰然と構

長期戦間の不慮の暴變と皇國必勝の要因

へて居た所に頼朝の偉い點がある。急いで事を仕損ずるものである。

清盛が平軍の富士川から敗走後間もなく死んだと云ふことは、頼朝には幸運であつた。同時に平氏の爲めには、最大の痛手であつた。凡そ如何なる偉傑も人たる以上定命がある。今日世界の偉傑も目せられ、角逐する人々も百年の長壽は得られまい。傑物亡き後の其の國はどうなるか、歴史は之を雄辯に證明してゐる。ルーズヴェルトやチャーチルや蔣が降参しないのならば、彼れの死ぬる迄、武力戦、思想戦、政治戦、經濟戦を交へつゝ根氣較べをやることだ。吾等は萬世一系の神格皇統を奉戴し、萬邦無比、天壤無窮の國體中に生きる民族である。至尊を中心に仰ぎ奉り、國體觀念を益々明徴にし、國體の精華を極度に發揮するならば最後の勝利が我に在ることは火を賭るより明らかである。反樞軸連合など恐るるに足らぬ。日本の臣民中に世界的英傑なく、内閣は毎年更迭しやうとも、至尊を中心に仰ぎまつりて國民が一致團結すべき途に最善を盡さば、一人の偉人に依り率ゐらるゝ何國を對手としても恐るゝことはない。焦慮には及ばぬ。悲觀も樂觀も共に禁物であるが、更に禁物なのは舉國一體を破壊するが如き行爲である。就中「舉國一體共存共榮ヲ之レ圖リ」及び「私ヲ忘レ公ニ奉シ」との 聖勅に奉副せざる行爲、或は欽定國是を無視するが如き現状維持や革新の思想や言動は最も慎むべきである。況んや時局を喰物にしたり、或は時局の波に乗つて、私心を逞うせんとするが如

長期戦に於ける政治

き者は、斷乎として之を排撃せねばならぬ。

次に頼朝の御業確立の迹を見て心に浮ぶことは、長期戦に於ける政治工作の必要性と云ふことである。

當時に於ける、後白河法皇の御企圖は、皇權御回復、御恢弘であつた。之が爲、義仲の力を御利用遊ばされて、平氏を京都から除かれたが、さて義仲を御利用になつても、御意に適はぬ行爲が甚だ多いので、今度は頼朝の力を御利用し給はんと御思召であつたやうに拜察する。

此の御企圖に對して頼朝はどうしたか。頼朝は西上に關する院宣を齎した御使に對し「平氏が京師を棄て、逃走し、義仲や行家が其の虚に乗じ、京都へ入り、功を矜り、賞を貪り、領地をおねだりするさうであります、誠にけしからぬことであります、私は之を討伐することは、容易なことでありますが、奥州の藤原秀衡が、常に私の背後を狙つて居ますので、今直に詔を奉ずることが出来ませぬ。加之、大軍を率ゐて輦下に參りますと徒らに騷擾を増す計りで御座りませう」と御答へし、即座に院宣を奉じない。御使者が歸つて復奏すると、公卿達が、頼朝の様子などを問ふた。すると御使者は「頼朝は小がらで顔の大きい人ですが、舉止詳雅で、言葉は明晰、逆ても義仲など比べ者にはなりません」と答へたので公卿等の感じも宜かつた。次で頼朝は使者を遣はし、法皇に

對し奉り「平氏の侵した諸邑は宜しく悉く其の舊主に返してやるべきであらうと存じます。臣等は決して之を利得してはならぬと思つて居ます。又平氏の降る者は宜しく赦すべきでありませう、臣も亦以前に宥されました爲、今日があるので御座ります、源平が並んで同じく皇家を護り奉ることは古來の制度であり、朝廷から御覽遊ばせば、源平の差別待遇などもあり遊ばさう筈は御座りますまい」といふ意味の奏上をしたので、法皇も御意を益々頼朝に屬せられ、その後屢々頼朝の西上を促された。是に於て、頼朝は二弟を遣はして義仲を除くこととした。

當時、法皇の御側近には、平知康とか、源行家などと云ふ小人輩が居り、法皇の聖明を掩ひ奉ることが多く、法皇と義仲との君臣が益々疎隔したのも、此の小人輩の宮中に於ける策動が餘程手傳つて居たやうである。頼朝は宮中や京都政界に於ける公卿の事情にも通じ、勿論平知康の如き小人の策動は十分知り抜いて居つた。又叔父行家の功利的策動家であることも萬々承知である。頼朝に對し義仲追討の最後の御内命があつたのを聞いた平知康は、法住寺殿燒討事件に付、頼朝に釋明する爲め鎌倉に出向いたが此の際頼朝は内外を戒め、彼れと取合はせなかつた。又義仲追討の院使に對しても頼朝は「知康のやうな輩が、色々なことを申上げて、君を惱まし奉るから法住寺殿燒討の如き不祥事や其の他の事件も起るのであります。今後とても仙洞御所で、斯様な輩を御召使にな

賴朝の不臣的
掛引

れば、騷擾か絶えないでありませう」と云ふ意を述べて居る。

以上の如き史話は、賴朝の對宮中政治對策の周到を物語る一例で、覇業成功の重要政治的基礎を爲したものである。乍然、叙上の奏上は果して至誠に發する奏上であつたであらうか、甚だ疑はしいものがある。觀方に依つては、中央の政治に容喙と云つたやうな點も見え、又可成り掛引もあるやうにも見える。之が臣下相互の交渉ならば、賴朝は用意周到又外交が巧だといふ處だが君臣の間柄としては成敗利鈍を顧みず、君命に應じ奉るべきで掛引などあるべきではない、君に對し奉り、御諫言申上げることが忠臣の爲す處であるが、掛引のことはあるべからざるものであり、賴朝の君側の小人輩を除く意見奏上は宜しいが、掛引のことは宜しくない、又賴朝は穩健な對平氏政策を奏上してゐるが、之は義仲と平氏との和睦握手防止の手段としての辭柄に過ぎぬことは平氏討滅後に於ける賴朝の峻嚴さからでも明かである、又賴朝が秀衡が窺背の爲と稱して、躬から關東に留まり、二弟を派遣したのも、皆軍事上の要求もさること乍ら、京都中央政界に對する考慮も大にあつたと謂はざるを得ない。

要するに、賴朝の政治工作は地方的には關東中心に其の地方諸將に對し、中央に對しては、宮中を初め、平氏及義仲を其の對象として復雜なる關係裡に行はれたことは云ふ迄もない。其の手腕技術は大なるものと云ひ得るが、夫れは臣子の道を度外視しての觀

賴朝の政治的
尊皇心の缺除

方であり臣子の道を考へれば、賴朝の政治的尊皇心は初めから缺けて居る。併し單に建設戰に於ける武力と政治の關係と云ふ點から見れば政治工作の必要性を知るに足るべき史實の一つであらうとも考へられる。

賴朝が、義經及範賴をして、平氏を討滅せしめ、自分は、鎌倉に在りて之を統帥した其の後義經を追討する爲、全國に守護地頭を置き、自から總追捕使と爲り、之が幕府建設の基礎の完成であつたことは今茲に説明する迄もあるまい。そして其の建設策は、京都中央政界に於て志を得なかつた大江廣元や、三善康信であつたことも明瞭であり、北條時政や梶原景時とかと云ふ策士も、陰に陽に入智慧をして居ることは云ふ迄もない。

事茲に至る迄の間に於ける、法皇と賴朝 法皇と義經及義經と賴朝との關係は叙説する迄もあるまいが、是を見ても賴朝は 法皇に對し奉つては臣子の道を盡して居らぬ。唯總ては宮中に對して政治的には對等たる態度である。要するに宗教的に尊皇にして政治的に不臣を敢てして居るのである。

義仲の覇業と賴朝の覇業とを比較すると、義仲は田舎育ちの野人的武將で、政治的手腕はとて、賴朝と比べ物にはならぬが、それでも、西上前には賴朝に對し愛子を入質として諒解を求め、其の末期に苦しくなつて平氏と和睦を策し、又廟堂の改造をも斷行した波瀾の間の建設戰には政治工作は極めて必要である。武力だけでは建設は出来ぬ。

義仲と賴朝の
政治手腕

反之頼朝は不斷に政治的建設を行ひつゝ、武力を行使して居る點は長期建設戦上の一教訓であらう。

併し臣子の道を離れて、彼れの長期建設戦の迹を温ねると、政治建設には達人である彼頼朝は、石橋山の敗戦、富士川への出動、常陸の佐竹氏討伐以外には自から軍陣に臨まず、義經の巧妙輕快且つ果敢なる作戦の成果を利用するのみで、後は著々たる政治建設である。長期戦に於ける政治建設の必要を證して餘りがある。義經の威望と、法皇の義經御信任が高まると、義經の缺點失態を數へて之を打倒した。義經の打倒は許し得るとしても、義經の打倒即大權の態よき篡奪である。此の點は許すことは出来まい。

頼朝は、兵政兩權の實を掌握したが、それでも兵を動かす場合には允許を受けて居つた。然る所、彼れは奥州征伐を企圖し、允裁を奏請したが、御裁可にならぬ。そこで大庭景能の屁理窟的献言を容れて専斷、奥州に向ひ出動した。之で完全に統帥大權迄も干犯してしまつたのである。

第八章 元寇撃滅戰

元寇と我國内

元寇は、文永十一年十月（紀元一九三四年）及び、弘安四年（紀元一九四一年）六月

上下の緊張

五日から閏七月一日迄の兩回であり兩回共に、交戦期間は短期間であるが、元が我が國に初めて使節を送つたのは、文永五年（紀元一九二八年）で、弘安四年（紀元一九四一年）閏七月一日元軍が博多灣で覆滅するまでは實に十四年の永きに互つて居る。そして此の間、元の來寇に備へる爲め、當時我が國上下の緊張と努力とは、後世國民の範とするものがある。

本戦役の教訓

元寇は建設戦ではないが、戦争準備と國民の氣分とを見れば長期戦たる性格は十分に在る。以下、本役に關する教訓を温ねよう。

元が、成吉思汗より、忽必烈に至る迄の間に於て、西は、東歐から、東は、朝鮮半島迄、南は印度南洋に互る地域を征服して、世界有史以來の大帝國を建設し、其の大勢力を以て前後二回、我國に來寇したのを、二回とも撃滅して、遂に元をして、其の志を遂げ得ざらしめた我が國土防衛戦は、世界史上の驚異であり、我が國實の戦史である。古代の希臘が波斯の大軍の來寇を撃滅したことは、西洋史上特筆大書せられて居るが、之に遙に優るとも劣ることなき偉績である。

元寇の經過は周知のことであるから、茲に之を省略し、主として、彼我勝敗の原因を考察し併せて御互の心構へを述べやう。

我が國の勝利の原因を考察すると、第一に、國民の士氣が剛健質實で、然も舉國一致

國民魂の剛

健・舉國一致

國難に當つた點である。

北條氏は謀略を以て源氏を滅ぼし、態よく大權を篡奪し、朝廷の皇權御回復の御企圖に對し義時は之を破摧して、三上皇及二親王を遠國僻障の地に遷し奉り、剩さへ皇位の御繼承干渉と云ふが如き、古來稀なる大逆不臣を敢てしたが、泰時及時頼は其の罪滅しとでも云はうか、克く士氣を作興し、剛健質實の國風を馴致し善政を施して民意を察いだ。そして時宗の時代には其の最良域に達してゐる。元寇が若し刀夷の賊の來寇時の如き、藤原氏の文弱驕奢の時代であつたとすればどんな結果を招來したであらう。回顧するに戰慄を覺ゆる次第である。

國民精神作興に關する詔書に「國家興隆ノ本ハ國民精神ノ剛健ニ在リ」と仰せ給はつたが、元寇時の吾等祖先の士風と意氣とを回想しつつ國內の様相を眺むれば、右躰抄の聖旨に對し奉り恐懼に堪へない點を發見することもある。國民精神を剛健に導き、國民生活を質實に爲さしむることは、戦時下國民指導の一大重點であることは敢て論ずる迄もないが、元寇時代迄に於て我が國風が剛健質實となつた主因は、北條泰時及時頼が、身を以て範を國民に示し之を率ゐたからである。夫れから見れば今日の大官も大に考へて貰はねばならぬ。金廻りの良い人も大に猛省して貰はねばならぬ點がある。指導者は國民に要望するに先ち、身を以て範を示さねばならぬ。個々の實例を列記すれば多々あ

上下の眞劍味

強硬外交と國民士氣

るが、本稿の主目的でないから敢て差控へる。

第二には、元寇當時の我が舉國一體の眞劍味である。此の眞劍味のあつた所に、神風の天佑を與へられたのである。此の史實は周知のことであるから茲に省略する。

第三には、強硬外交である。當時の状況では、我が國が強硬に出ようが軟弱妥協に出ようが、蠻夷に犯され虐げらるることは一つである。朝廷及鎌倉幕府の強硬外交は、却て剛健質實なる國民の士氣を更に作興したものと思ふ。又考へ方に依つては國民の士氣が剛健質實、國民精神が作興して居るが故に、斷乎たる強硬策に出ることが出来たとも思ふ。國民精神を銷沈せしめては斷乎毅然たる態度を以て外に臨むことは出来ないものである時宗が斷乎たる態度に出たことは、佛光國師から莫妄想の一喝を喰はされて初めて決意が定まつたと傳へられるが、國民の士氣に恃む所があつたことは想像するに難くない。苟くも爲政者は、心眼を開いて國民の士氣を洞察せねばならぬ。そして萬一懸念があるならば、過去の施政や指導及現在の對内諸策に就て再考を加へねばならぬ。現下我が國民の士氣は施策如何に依り、どうでもなる。只外國模倣や、右や左や、右左見境のないやうな偏した思想に基く指導では、大部の國民は附いて來るものではない。惟神の大道を以て日本固有の宗教視するやうな觀方や考へ方をして居つては、是亦國民に對し神國日本の眞髓を知らしむることが出来ぬ。我國民指導には國體の觀念を明徴にし、

國防施設

國家統治の凡百の部門に於て國體の精華を發揮し、此の精華の中に國民を活かして行く指導が日本國民指導の原理であることを知らねばならぬ。

第四には國防施設の徹底である。文永の役には未だ其の施設が、完備しなかつたが、弘安の役迄に於ては前役の試練と體驗とに依り、兵船も整へ、殊に北九州沿岸や長門海岸に敵の上陸防止と防戦の爲、長城的石壘を設けた。此のことは非常な卓見であつたと思ふ。今日の上陸戦でも、上陸沿岸に厚さ二、三米高さ五、六米もある、ベトンの石壁を一連に築かれ、射撃設備されては、舟艇の著岸が出来ても登攀は出来ず、水際戦闘に於て不成功に終はつてしまふだらう。況んや當時に於てをやである。元軍の第一集團が博多灣に進入しても上陸が出来ない。長門沿岸や其の他、北九州沿岸何處にも上陸が出来ぬ、灣内で碇泊して居る間に日本軍から奇襲せられる。水薪の補給は出来ぬ。船内では疫病が流行し出す。斯様にして、ふら／＼して居る間に、第二集團が到着したが、數日を出でずして、神風來襲して遂に潰滅したのである。

時宗の攻守兩様の企圖

第五には時宗の攻守兩様の作戦準備である。文永の役前も戒嚴を令したが、同役後、時宗は元に向ふ進攻を準備すると共に前述の如く、海岸防備を一層至嚴にし、更に四國及西國の武將をして、寸毫も油断せしめず、特に攻勢意氣を以て士氣の緊張を圖つたのである。

編制、裝備及戦法

兎に角その使節が始めて來朝した文永五年から同十一年の來寇迄は約七年、その後弘安四年迄も約七年、この間國內は緊張の仕續け努力休む時なしといふ有様である。然も單なる防禦意圖ではなく、攻勢意氣を以てしてゐる。吾人は現下の時局に於ても常に祖先の此の緊張と努力とを想起し、積極的に施策し困難を増すに従ひ更に努力を拂はねばならぬ。

第六には彼我の編制、裝備及び戦法と地形である。戦法を較べると、彼れは集團統一戦法で騎戦を主とし、編制裝備も之に適するやうに作り、裝備の如きも、輕い革製の甲冑で、當時既に火薬を用ひて居たと云ふことである。反之我軍は所謂一騎討戦で重い甲冑を纏ひ、名乗も擧げて戦ひを挑むと云ふスポーツ式戦法だから、一見、到底問題にはならぬ。文永の役にも、可成り戰場ナンセンスが傳へられて居るが、弘安の役には戦法も餘程改善せられ、又文永の役の陸上戦の苦難から、後世戦法にも改革を加へられたと見るべき所も段々ある。夫れは別として此の日本軍の一騎討戦も、奇襲には誠に宜しかつた。一方、我が北九州の地形は、大陸平原とは異り、大集團の騎戦には適せぬ。夫れで元軍でも、大分勝手が違ひ、思ふやうに戦力を發揮することが出来なかつたと傳へられて居る。

之を思ふと、軍の編成裝備の如きは劃一主義ではいかぬ。相手國軍と豫想作戦地に適

元寇の戦役

應ずる編成裝備を定めねばならぬ。此の點に付ては筆者は多々申したいことがあるが、純専門事項に屬すると軍機にふれる虞もあるから、是以上論ずることは止める。

次に蒙古軍の戦敗の原因が何處にあつたかと云ふに、第一には、文永の役は眞剣味ある日本攻略企圖はなく、寧ろ日本を恫喝せんとするにあつたらしい。従つて其の作戦準備も不十分であつたと思はれる。彼は先づ對馬を、次で壹岐を侵し鬼畜の如き慘酷を敢てし、更に松浦灣、博多灣に來寇して、上陸の上、壹岐、對馬同様の酷虐を行ひ初めた。我が軍は防戦したが、つひに防ぎ切れずして、退いて水城に據り、大宰府を防衛した。幸に、當時、敵の首將、忽敦が、進攻を中止した。其の理由は、日本軍は、意外に勇敢にして、他の既征服民族とは大に違ふ點があり、地形も大陸とは大分違ふ。其の上、九州の奥地には尙後續の強大なる日本軍が控へて居ると誤認した爲であつた。元々敵は長期戦の準備がないのであるから、一旦撤退と決心し、解纜したが、其の夜暴風雨に遭ひ難破する船も甚だ多く、唯我が西邊の一角を荒し廻はつただけで、何の戦果をも收めず、徒らに日本軍民の敵愾心を増す計りの結果となつた。尙、當時高麗の將金方慶が、進攻繼續を主張したが、首將忽敦が聽き入れなかつたことは、我軍には幸運であつた。神風と共に天佑であつた。恫喝とか威嚇とかと云ふやうなことは、相手によりけりであることは此の戦史でも良く分る。

次に、弘安の役を見ると、之れ亦其の準備は甚だ杜撰なものであつた。彼は日本攻略後の經營のことなどを考へて農具を準備して居たとのことであるが、まるで取らぬ狸の皮算用で、肝腎の攻略の爲の諸準備は出來て居らぬ。就中、日本に關する作戦資料の調査蒐集などは全く出來て居らぬ。尤も文永の役後、彼は使節を送つて來たことは、或は我が國內の調査の爲でもあつたらうが、日本は遂に其の使者を斬つてしまつたので日本の狀況は分らない。反之、日本では宋の亡命僧などに依り元の狀況や企圖なども比較的分つて居たのではなからうかと思はれるやうな點もある。要するに元軍は上陸地や氣象其の他要兵地誌的のことや防備狀態なども調査せず、只盲目的でも武力さへ用ふれば日本攻略が出來ると思つた所に大失敗を演じたのである。

次の失敗原因は、元軍は高麗軍と江南軍の二集團とし、約五十日を閲して來寇したところであるが、之が若し同時に上陸地點を異にして來寇したならば、日本軍としては更に痛かつたであらう。

元軍の船は粗製であつたと云ふことである。之は元が高麗を強要して造らせたり、又造船者の不正行爲からであつたと謂はれて居る。無理なことを押付けると、得てこんなことになるもので、これが神風に對し脆かつた原因であつた。

元軍が被征服の將士を用ひたことも亦失敗の一因であらう。

元軍の第一集團たる高麗軍が五十日間博多灣上に浮遊して居る間に、水薪の不足、疫病が流行したと云ふことは、船内給與衛生不備の結果では又敗因の一つであらう。斯様に彼我の勝敗の因を考察すると後世吾人に種々の教訓を貽して居る。筆者は其の都度必要なことを述べて置いたが、尙此の他餘り専門に互らない通俗的若干の所見を述べよう。

日本民族の戦争

元軍のやうに、何に日本は生意氣だ、やつつけろと云つたやうな氣分で兵を用ふるとんでもないことになる。孫子の卷頭に兵者國之大事死生之地存亡之道也不可不察也と云つて居る。殊に日本はその國體に鑑みればクラウゼウキッツの云つたやうな、戦争は政策の延長だと云つたやうな氣分で、兵を用ふることは出来ない、古來日本の對外戦は戦略は攻撃だが、戦争目的は自衛戦で國家生存上己むに止まれず干戈に訴ふ、戦争は平和を求むる爲の最後の己むなき手段と觀られて居ることは、歴史を見れば明らかで、殊に日清、日露の兩役における宣戰の詔勅を拜誦すれば最も明瞭に此の點を意識することが出来やう。日本は正義に立つて終始して來た國で今後も亦然りであるから、義戦と云ふことは、日本の戦争觀とは反せざることは勿論である。要するに戦争は、日本においては國家道義觀に發して居り、政治、經濟に立脚する外國人の戦争觀と著しく異なる點がある。戦争中には、豫期せざる意外のことが起るものである。元軍ではまさか二回共神風が

不慮の異變と

對策

起るとは考へなかつたであらう。長期戦となると殊に色々な異變も起る。國際關係が複雑となると殊に然りである。此の間に處して蹉跌なく戦争を遂行するの用意が極めて大切である之と同時に亦、常に戦争の目的に稽へ、御都合主義を排し、確固不動の目的と堅忍不拔の信念との下に、右顧左眈せず攻戦兩略を調和し武力戦、思想戦、經濟戦等をうまく配して戦争目的の貫徹に邁進することが緊要である。

何れの場合に於ても舉國一致眞劍の努力の重要にして必勝の爲の絶對的要件であることは本戦役を見て殊の外感を深くする。

古來上陸戦は多くの場合に成功し、少くとも上陸だけは出来るものであるが、全く上陸が出来ずして覆滅してしまつたやうな戦例は、弘安役以外には見當らない程、此の戦例は特質を以て居る。上陸戦史觀に付ては種々申したいことがあるが、事餘りに専門に屬すると筆者は既に軍部關係の雜誌にも寄稿し掲載せられて居るから、茲に之れ以上論じない。

元寇撃滅戦は、我が國としては完全に防衛の目的を達した。只、交戦は極めて短期であつたと云ふに過ぎぬ。國民の氣分と準備から見れば全く大長期戦であるが、之を仕遂げた吾人祖先の偉大性を景仰せねばならぬことを、重ねて強調する。時宗の決断は古來外交上稀なる英断である。彼れの人物は今茲に説明する迄もないが

珍奇な上陸失敗戦例

吾祖先の偉大を見よ

彼は弘安七年七月（元寇後三年）三十四歳で卒した。従つて弘安四年には三十一歳であり、文永の役には二十四歳の青年執權で、恰も奈翁戦争當時の英國首相ピットと似た年輩である。初めて元の恫喝に會つた文永五年には僅か十八歳の青年であつた勘定になる。實に天才的大人物であつたと云つて宜しからう。併し、時宗の背後には佛光國師も居たであらうが、特に北條政村の居たことを見落してはなるまい。政村は、泰時の異母弟で匿れたる大人物であつたやうに思ふ。此の人が天才的青年執權時宗を蔭で輔佐した功は没することは出来まい。

老者の結合

近時、時代を擔當する者は壯年者であらねばならぬかの如く囁し立てる。筆者も壯年が陣頭に立つ必要を否定する者ではないが老功有爲の老年を排斥することが出来ぬ。時宗の背後に政村のあつたことを忘れてはならぬ。老巧なる宿將の諫言を用ひずして血氣に早やり身も家も滅ぼした武田勝頼や尼子晴久と時宗と政村との關係を見るがよい。看板の老人を昇いで仕事をしようとする私心の若者や若者の機嫌を取つて重位を占めようとする野心老人は共に語るに足る人ではない。大業は時宗と政村との如き偉大なる老若の結合に依り遂げらるるものであることを知らねばならぬ。

戦後の整理

元寇は之を完全に撃滅し、長期戦も段落に達した。之は我が國內の建設にはならなかつた。元寇戦後の建設は時宗の早世に依り出来ず、北條氏としては財政が窮屈になり、

敵の氣魄を奪

參加將士の恩賞にも満足と與へ得ず將士の心を離れ得なかつたやうな觀がある。之が後年北條氏の失政と相俟つて北條氏滅亡の遠因の一つと爲したのも皮肉である。長期戦後の整理整頓其の他建設には特に意を用ふるの必要がある。忽必烈も却々の大人物であつたやうで、更に第三回の來寇を企圖したが、志を達せず時宗の歿後十年にして歿した。時宗も戦後の進攻復讐を考へたらしい。又忽必烈も日本の復讐を恐れて、沿岸防衛を爲したと云ふやうなことも傳へられて居る。強敵を呑むの氣魄がなければ、強敵を屈することが出来ない。時宗の氣魄は遂に忽必烈として守勢氣分に立たしめた。横著、横暴な相手に諒解を求むるやうなことのみが外交ではない。最後の正義の一戦を覺悟し、其の準備を萬全にし、必勝の信念を以て敵の氣を呑むの氣魄あつてこそ、大業を遂げらるるものである。今や未曾有の大戦に従事してゐる。元寇當時の外交や作戦準備中より、不動の眞理を求めて之を現代化する必要も認めらるるではないか。

第九章 建武中興を繞る内戦

建武中興を繞る内戦を正中の變（紀元一九八四年、正中元年）より、吉野朝末（紀元

二〇五二年元中九年）迄と見るときは實に六十八年の永きに互り、又元弘元年（紀元一九九一年）の討幕戦開始より算するときは六十二年の永きに互つてゐる譯で、後醍醐天皇の討幕御準備は正中の變前後に互り約十年である。

建武中興は遂に完成するに至らず、大逆賊尊氏の爲大權が再び篡奪せられたことは痛恨に堪へず、後醍醐天皇の聖慮に對し奉り、恐懼措く能はざる所である。

乍併、此の間大楠公を初め、幾多の忠臣義士が輩出し、永年類れたる皇國精神が蘇り假令再び之が發芽を摘まれたとは云へ、楠公精神を始め、當代の忠臣の精神は根基に健在し、之が明治維新の原動力となつたと思ふと、廣大無邊の大御稜威に對し奉る感激を一層深く且つ新にする次第である。

建武中興を纏る大楠公の戦史を繕けば、後世兵家に夥しき貴重なる範例を貽し、之を現代化したならば、實に有益なる事項も尠なしとしないが、本稿の目的は必ずしも此に存しない故、暫らく之を他の機會に譲ることとする。

建武中興を纏る内戦は一大長期戦ではあるが、長期戦としてよりも、寧ろ建設戦として觀察する方は得る所が多いやうに思ふから、主として此の觀點から概考することとしよう。

第一には局に當つた人の問題である。

後醍醐天皇の允文允武、御英邁に渡らせ給ふたことは、申すも畏きこと乍ら、天皇が此の大聖業を御企圖遊ばさるる爲には門地門閥に拘らず少壯有爲の文武の賢臣を御登用遊ばされた點である。其の一例を申せば、北畠親房卿を檢非違使別當に補せられたが、當時卿は三十歳であつた。俊基、資朝兩卿も、門地の低い少壯有爲の公卿であつた。大楠公も戦死のとき四十三歳であるから聖鑿に適なつたのは恐らくは三十三、四歳の頃で然も門地の低い武臣であつた。さりとて老功の賢相は之を捨て給はず、所謂三房の一人宣房は六十五歳であつたと云ふことである。

此の人材御登庸は討幕の御企圖達成の重要な一因があつたと思ふ。茲にも亦大業を遂げるには偉大なる老若の結合でなければならぬとの史實を見るのである。更に戦國時代の武將を見ても、將又降つて明治の維新を見ても、此の感を深くする。重て申述べるが、近頃昭和維新も亦少壯者の手と云ふ。けれども、明治維新や、戦國時代や建武中興時代の大業に従事した人達の年齢ばかり見てはならぬ。其の質を見ねばならぬ。一口に青壯年だと云ふ譯には行かぬ。大業に、たづさはる少壯者は何れも天才的の偉人と云つて宜しい。又時代は人を早熟せしむるものがあつたことを見落してはならぬ。併し現代の壯年を作つた時代と教育は、天才の驥足を伸ばし得ずして、之を埋没せしむるものがなかつたであらうか、頭の良い小さい人物を作つたやうな嫌ひがなかつたか等を願み

て、現代青壯年を見る必要がある。又一方では現代の五十前後以上の人を見るがよい。之も現代の青壯年と大差なき時代と教育とを經てゐる。自由主義の世の中に生れた人であるから、天才的驥足を伸ばし得ねばならぬ譯だが、一面功利主義の時代で、功利主義の達人は駄足を伸ばしたが、眞個の憂國の偉人は埋没してしまつたと云ふやうな痕跡もなうではない。

斯様な史實を考へず、只、血氣無思慮な青壯年を煽てるやうな指導をしたり、功利主義達人たる老人を昇いだ所で、所詮は大業を遂げ得らるゝものではない。

凡そ人は、少と云ひ壯と云ひ老と云ふが年齢の問題ではなく質の問題である。而して何時の時代でも人を得ねば大業が仕遂げらるゝものではない。

中興挫折の原因

第二には建武中興の聖業が遂に有終の美を收め得なかつた原因である。

此の原因に付ては古來史家が論じ盡して居るから、筆者は茲に専新しく詳論しようとは思はぬが、只、今人の常に心せねばならぬ點に付き若干述べよう。

建武中興の挫折と功利主義

建武中興を挫折に導いた主因は當代の文武の臣の功利主義思想である。此の惡思想は當代國內の文武の大小の臣の間に漲つて居つた。只大楠公や、親房卿を始め今日當代の忠臣と謂はれる少數の人と、此等の人々の部下のみが、此の時代の惡潮に對し毅然として、皇國精神に燃えて居つたのみである。そして斯様な功利思想を馴致した原因は、廻

功利主義は逆賊主義

れば平安朝以來藤原氏が權を恣にし、大義名分を蹂躪し次で、平氏は藤原氏を學び、更に、源氏は大權を篡奪し、北條氏は、大逆を敢てして、遂に此の篡奪を相續した結果である。

而して此の功利主義を建武中興前後に最も發揮した所の、功利主義の權化は大逆賊尊氏であり、此の權化に従つた大小の惡徒は、皆之れ功利主義の滿々たる如輩である。

大逆賊尊氏は、當時漲る公家や武家の功利思想を、うまく捉へて之を籠絡した。之が彼れの野心を遂げる爲の根本的著想であつた。

要するに大義名分なき所に功利思想が大流行するのである。

國史を按ずれば、大義名分が凡有部門を通じて立つて居るとき、換言すれば、國體意識が明徴である時代は、必ず國勢の隆昌なる時代であるが、之に反するとき、國家が必ず衰へて居るのである。

功利主義の如きは結局我國に於ては尊氏思想と云ふか、吉野朝時代の賊徒思想である現代に於て一日も早く清算せねばならぬ。

大義名分が頼れ功利主義たる所に、必ず下剋上精神が生じ、行ひの上にも之が現れて来る。足利時代は全く其の代表時代であるが、夫も尊氏の極惡精神が其の源を爲したのである。

北條氏を滅し得たのは、偏へに、後醍醐天皇の大御稜威であり、又大塔宮を始め奉り大楠公及其他の大忠臣の力でもあることは、勿論だが、尊氏を始め當代の武家が旗色の善い方へ付くと云ふ功利思想をば、純正日本主義の如く擬装して官軍に付いた所に討幕力を増加し、そして後に此の擬装者等は遂に中興の大業を破壊した力となつたことを見落してはなるまい。義貞公が尊氏討伐に東下し、連戦連勝して箱根山系に迫る間は、日に／＼官軍が優勢であるが、一度竹の下で官軍が敗れると、皆賊方へ寝返りしてしまふ。斯様な次第で、官軍が最後の五分時と云ふ所に於て作戦が失敗して居る所も多い。北條氏討滅に際する擬装轉向者の大巨頭は尊氏である、赤松なども巨頭の一人であり、大友など亦然り、數へ來らば、斯る擬装且つ功利主義者は建武中興を挫折せしめたのである。今日の世局に於ても思想轉向者や純正日本主義擬装者に付ては非常に警戒し、要すれば速かに之を彈壓するを必要とする。そして斯かる輩を用ひる者は又尊氏の類と云はざるを得ない。

當代の功利主義は武家計りではない。公卿にも多分に之を認める。其の巨魁は西園寺公宗である。元來當代迄の西園寺家は北條氏と通じ、常に朝廷を不利に導いた極悪史を後世に貽して居る。承久の亂に於て朝廷の謀を北條氏に内報したのは西園寺公經であり其の後裔は公宗である。彼は畏れ多くも後醍醐天皇を害し奉らんと陰謀を企て又北條氏

の殘黨たる時興をして叛亂を起させようと企らんで、露顯して斬殺せられたことは讀者の御承知の通りである。

其の他尊氏と通じて志を遂げようとする野心を有した公卿も少なしとしない。彼等は皆功利主義、武家依存主義者で遂に尊氏に利用、籠絡せられ、聖明を掩ひ奉つたのである。斯く建武中興時代に於ける思潮を見ると、今日の大東亞共榮圏の建設に於ても、最も排撃せねばならぬことは功利主義である。功利主義が自由主義の一部面か、副産物か、親類筋か、夫れとも功利主義が却て自由主義を欲求する本であるかなどとの哲學觀などは、どうでもよいが筆者は今日更に一層功利主義思想打倒を強調せねばならぬと思ふ。

國史を按ずれば、我が民族の功利主義は既に千數百平以前の權臣跋扈時代に胚胎して居る。そして權臣の功利主義歴史は何れの時代にも存在して居ることを見るであらう。悪權臣の功利主義は我が國史上の最大汚點を貽した根本思想である。然るに今日迄の修身や歴史教育は史上の功利主義人物を排撃せざるのみならず、中には之を賞むるやうな語調のものさへある。其の赴く所、遂に大逆賊尊氏迄も辯護する松梅論著者のやうな徒輩も飛び出したことさへあつた。儀禮上や宗教的の尊皇心があらば、夫れで臣道が立つかの如く思ひ、統治大權翼賛奉行の真心の有無などを顧みず、袞龍の御袖にかくれて野心を遂げようとし又は遂げた徒輩に逆臣と烙印を捺さないやうな史論を見ることさへある

權臣と其の功利主義

史上の人物は勿論、現在の人物を見る上に於ても、功利主義観を一掃し、功利主義人物を排撃せねば、永年馴致せられ民心に植ふ付られたる功利主義は改まらないであらう人往々、現在の功利思想は、自由主義思想に伴つて輸入せられ、之に現代人が犯かされたと考へて居るが、筆者は、功利主義思想は、古來我が権力階級に漲つて居り、之が洋學に依つて更に悪く培養せられたのだと思ふ。我が功利主義思想は根抵する所は誠に遠く深いものがある。之を打破することは昭和に於ける心の維新の大なる一つである。

建武中興の挫折原因として擧ぐべき一つは公卿が時代思潮を解せざりしこと、具體的に申せば、當代に於ける武士の心理を看破し得ざりしことである。彼等は楠、新田、菊地、名和等の諸公などが挺身、身を賭して死生の間に大賊を引受け、健闘遂に之を倒したことを顧みず、武家政治倒れて、吾等の天下となつたと云ふ誤れる歡喜と遊供とが基で、時の思潮に合せざる諸制を立てたり、施政を爲したことが、建武中興挫折の基の一つである。此の時代錯誤の樹策や施策の史實は、之を顧みて後世吾人が深く戒めねばならぬ所である。

さればとて筆者は建武中興の建設諸策に於て、當時の武家の功利主義思想に迎合するやうな樹策を主張する者では斷してない。斯かる迎合政策を採つた所で、所詮は強慾で大義名分を解せざる武家を、のさばらすばかりである。逆賊尊氏が當代の武家に迎合す

時代思潮に實
目たて公卿

建武中興を論ずる内閣

る施策を爲したが其の結果は天下は實に紊亂するばかりであつたのを見ても明かである。凡そ日本の政治は何れの時代に於いても國體の精華に副ふて益々之を發揮するやうにせねばならぬ。例令大義名分を解せざる時代でも、施政當局の國體觀念が明徹で、常に國體の精華を認識し、日本精神に生き益々之を發揮するやうの政策を樹て之を施行すれば、民心は自然に大義名分を解する様になるのである。建武中興に於ても天皇親政と云ふ點は國體觀念として明徹であつたが、天皇親政とは何ぞやと云ふ本質を解せず、君側や臺閣の權臣が我儘政治を行ひ、聖明を掩ひ奉つたから、遂に遺憾な結果と爲つたのである。

天皇政治は我が國體の精華を益々發揮するのが其の主眼と拜察する。國體の精華に副はず、之を發揮し得ないやうな輔弼の臣は、輔弼の重職を盡さず、聖明を掩ひ奉る臣である。建武中興時の君側輔弼の臣の中には不臣の輩が甚だ多かつた。

公卿は自家優越觀を忘れ得ず功利慾武家が、此の公卿と抱き合つた所に中興に於ける聖明を掩つてしまつた重因が潜在して居ると考へらるる。

現代諸般の革新政策を實施し今後も幾多革新せねばならぬものがあらうが、國體の精華の中に生き、國體の精華に歡喜してゐる純心忠誠なる國民に對し、其の心を闇とするやうな外國模擬の政策を押付けてはならぬ。建武中興の時代の功利主義公卿や武家の如

き徒輩は今日存在するとは思はないが、功利主義が何れの層からも未だ完全に拂拭せられて居らぬと見るのが、許され得る観方であらう。斷乎之を拂拭せねば、如何なる革新も建武中興の二つの舞とならぬと保證の出来ないものがありはしまいかと憂慮する。建武中興の挫折原因として、誰しも云ふことは恩賞の不公平である。今之を論ずるのが主目的ではないが、只若干申して置くことは建武中興の恩賞は要地占領重視主義で、作戦の巧拙、是非、戦果が餘り觀られて居らぬ點である。京都を回復した尊氏輩の行賞が、中興の根基となり諸國義舉の原動力となつた楠公を遙かに凌駕し、北條氏の本據を屠り、其の宗族を滅した新田公にも優つて居ることは、要地占領重視觀念から發して居る。

中興の偉績

今日の戦争は要地占領で終局となり得ないことは、今次事變が明らかに證明して居る武人に對する恩賞は其の作戦の巧拙戦果を見ることが主眼であらねばならぬと思ふ。以上は建武中興挫折の原因中後世吾人の誠めとなる事項に付てであるが、更に善き教訓となるべき事項に付申述べやう。第一に申したいことは、後醍醐天皇を始め奉り、吉野朝の列聖及護長親王其他各皇子方の御偉績である。此の御偉績及之を爲し給ふ御軫念と御辛苦とは萬人悉く千古に仰ぎ奉る所、筆舌を以

て讚へ奉ることを得ざる偉大なる史實である。

逆賊尊氏の叛と功利主義思想に満ちた公武家の爲、遂に聖業に實を結ばなかつたことは顧みて恐懼に堪へない所であるが、中興の大御精神の後世國民に垂れさせ給ひし感化の偉大なることは、中興の大御精神が明治維新となつたことに依り明らかであるのみならず、何れの御代の維新の根基的精神を爲すものと拜察し奉るのである。

大楠公外、吉野朝の忠臣の忠烈は芳を千載に遺し國民に與へたる感化の偉大なることも亦茲に多くを語る必要もあるまいが、大楠公精神こそ、眞個の日本精神であり、大楠公こそ、完全無缺に日本精神を體現せられた人と申すべきである。公は亦武將としては大名將中の大名將と評して宜しからう。

吉野朝の柱石、親房卿の國體を明徴にせられたる偉業と、競はざる南風の威烈發揚の努力に就ても是亦周知のことでも多く語るまでもあるまい。其の他の忠臣の功業も敢て更めて讚へずとも皆人の知る通りである。

筆者は吉野朝時代官賊兩軍の戦争の跡を見ると吉野朝側は親房卿を柱石として、何處迄も精神主義を以て進み、逆徒の方では尊氏が旗頭となつて何處迄も物質主義で進んでゐる。建武中興挫折の跡を見ると何んだか精神主義が物質主義に負けたやうに見える、然し之は近眼的觀察である、建武中興の精神が遂に明治維新となり、國體に照して順逆

精神主義と物質主義との抗

は明徴にせられたことは、正は遂に邪に勝ち、精神主義は最後の勝利であることを如實に證明するものである。

夫れに就けても、後醍醐天皇を始め奉り、吉野朝列聖各皇族方、及び忠臣の約六十年に亘る逆賊克服の御努力こそ、後世吾人特に現戦時下の國民の肝に銘して學ばねばならぬ所である。

大東亞戦争も、日本の精神主義と蔣や米英の物質主義との抗争と見ることも出来る。吾人は必ずや精神主義を以て物質主義を克服し昭和に於ける東亞の維新を完遂するの決意を必要とする。

第十章 戦國時代の争覇戦

建武中興を挫折破壊し、大權を篡奪して、室町幕府を開いた我が國史上筆頭の逆賊尊氏は建武中興後、國內を六十餘年の長期戦亂に導き、尊氏の遺徳と餘殃は益々國內に浸潤し、加ふるに三代將軍義満は古今に絶する僧上の行爲を敢てし、自己榮華の資を求むる爲には稀代の國辱を顧みざるが如き、國史上神人共に許さざる大不逞を働いたことは周知の通りである。

應仁の亂の一
觀察

そして爾後足利氏累代の弊政に、國內は一步々と無秩序、紊亂へと進み、遂に應仁の大亂となつた。

應仁の亂は十一年の長きに亘り、東西兩將の死歿に依り、やつと梟が付いたが、之が爲め京師は燒野原となり、所在に群盜が横行し、地方には北條早雲を魁として群雄割據の戦國時代となつた。此事も敢て事新らしく説述する迄もあるまい。

應仁の亂は長期建設戦でなく全く長期破壊戦である。併し永年の積弊は来る所まで来たのである。陰の極は陽へ、陽の極は陰への第一歩で、破壊の極は又建設への初歩である。應仁の大亂が、破壊のどん底であり、群雄割據の時代は建設を産み出す爲の陣痛時代とも見ることが出来る。

應仁の大亂は之を見る視角次第で種々の史論も立たうが、筆者は此の長期破壊戦に長く筆を執るよりも、群雄割據時代の建設觀に力を用ひるを賢明と考へ此の亂に付ては、多くを論じないが、兎に角、善惡を抜きにして見るならば、十一年戦つたと云ふ其の根氣だけは、認めねばならぬ。そして、兩軍共に根氣がよいときは結局首將の死が戦局の結びとなると云ふ面白い例である。長期戦に於ける根氣くらへを研究するの資料とはならぬ。

應仁の亂より、豊太閤の天下統一迄約百廿五年間は内戦とは云へ我が國史上に於ける

味ふべき戦國

時代の意義

最長期戦で、然も、第一流の英雄は天下統一即建設を志したのであるから、戦國とは云ふものの、觀方に依つては長期建設戦とも云へよう。

戦國時代は、皇室が御式微の極に達し、回顧するだに恐懼に堪へない所である。世の中は、所謂、腕づくの世の中で、下剋上などは朝飯前、人倫道德も地を拂ひ、極悪非道の謀略なども所在に用ひられたことは周知の通りである。故に、筆者は斷じて戦國時代を禮讚しない。只單に時代の動きとして見るならば此の戦亂は舊勢力を一掃して、新勢力が之に代り、謂はゞ國內舊秩序を打破して新秩序の建設となつた。即ち、當代の群雄は家柄から謂へば二流以下否無名の家柄に生れた者が多く、極めて卑賤に身を起した豊太閤が遂に天下を統一した。考へれば千餘年の舊套は此の戦亂により打破せられ、新時代への巨歩を運ぶ出發點となつたかの如くにも見られるのである。夫れは兎に角として筆者は戦國史を讀み常に感を深くすることが二つある。

其の一つは皇室と國民との關係である。

前申した如く、戦國時代に於ては皇室は御式微の御極に達し其の御様子は史を讀む者の等しく恐懼に堪へない所であり、世の中は無秩序、京都も無警察状態であり京童は紫宸殿前に於て砂いぢりをして遊んだなどとさへ傳へられるが、誰一人皇居に侵入御寶物を掠めたとか、其他大逆不逞を働いたと云ふやうな史話を聞かぬ。地方の武將でも御

戦國時代に於ける皇室と國民との關係

下命とあらば、直に御料を献上する、毛利元就、北條氏綱等皆其の例である。

筆者は前九年役に於て、身分地位低き武將の勤皇心が、遙に君側の重臣に優る旨を記した。今茲に戦國史を考察すると、以上の如くで、積極的には織田信長の勤皇以外には著しく見るべきものはないにせよ、假令消極觀とは云へ戦國以前に於けるが如き大逆事件とか、大不敬事件とか云ふものがなく、皇室に對し奉り弓を引くと云ふが如き大叛逆者はないのである。

國史を按ずれば、大逆大不逞事件などは、門閥が跋扈し、世襲的に權臣が權を恣にする時代に於てその事があり、戦國時代の如き世の中には寧ろ夫れがないのである。夫れと申すも、神聖なる御稜威からであることは申す迄もないが、國民大衆が、皇室を絶對に、尊崇し奉ると云ふ民族精神が、天性且つ固有であり、戦國時代の如き紊れたる世に於ても、不逞や逆徒が出ないのも、此の精神の現れであると解する事が出来る。

他の一つは、戦争史としての價值である。

戦國百二十五年間を大觀すると、此の時代は我が戦争史學上有益且つ豊富なる戦争及作戰指導哲理を後世に貽すものと考へる。若し吾人が、温故知新に志すならば、此の時代の史料に待つべきものは、頗る多いやうに思ふ。

先づ人物から見ると、此の時代は實に大小名將の輩出した時代で、故岡谷繁實先生が

戦争史としての戦國史の價値

その名著、名將言行録に蒐録せられただけでも、百數十名の多さに達し、然も何れも、今人が果して肩を比べ得るや否やと思ふやうな名將計りである。實に史上の偉觀と評すべきである。而してこれら名將の言行を見れば、獨り作戦上の機略機眼が非凡であるのみならず、部下の統率や、領内政治、對隣國武將外交は勿論、私的生活に至る迄、後世吾人が教へられる所が頗る多い。

名將言行録は賜天覽と銘誌せられ、又漏れ承はる所に依れば、畏くも 明治天皇に於かせられても、御愛讀遊ばされたとのことである。以て戰國名將の眞價を卜するに足ることが出来ようと思ふ。

戰國時代の名將の用兵を見ると、今日の戰略の原則は此の時代に於て悉く之を實施せられて居る。否、今日の原則を超越した戰略もある。規模こそ小さいが、其の戰略や戰爭哲理に至つては、西洋の近代名將に先立つ二、三百年以前に於て、奈翁やフリードリヒ大王等に優るとも劣らざる立派な作戦をやつて居る。就中、巧妙なる内線作戦は戰國特有のものと評すべく、殊に二正面、三正面、甚だしきは四面に敵を擁して實に正奇の全智を盡して、局面を打開して成功して居る所などは、正に戰國戰史の偉觀である。近代兵學や、近世戰史學に心酔する人は我が古戰史の如きは、小規模な甲冑時代の一騎打刀槍、種ヶ島戰術だと捨て、顧みないが、之が抑も、兵學に於てすら歐洲就中獨佛模擬

の精神を産む原因である。我が兵學界の第一次世界大戰後に於ける佛國心醉振りを見よ、今日の兵學界は又獨逸に心酔するが如きことが無ければ幸である。他山の石を取り込むことは進歩の基でもあるが、之を以て自山の寶玉を捨てる理由とはならぬ。國寶は單に有形の物計りではない。萬邦無比の麗しき國體を造つた歴史の精華は勿論、世界の戰史界へ出しても光輝燦たる戰國戰史も澤山あり夫れ以前の優良戰史と共に、何れも皆無形の國寶であることを意識せねばならぬ。

戰國史は之を小規模の國內戰として研究するから、無價値のやうに思ふのである。戰國の群雄は假令、小なりと雖も、其の領國を一つの國家と考へて居つた。隣邦諸將との交戦は全く、國際戰爭と同様に考へて居つた。從て戰國史を研究する場合には之を擴大して戰爭指導の哲理を求むることが、緊要である。すれば一入貴さを感じずと思ふ。

筆者は我が戰國時代と、歐洲の當代とに於ける兵學や作戦を比較すると、火器などのことは姑らく措き、用兵略術は我が國の方は遙に卓越して居ると思ふ。然るに日本では徳川時代約三百年の泰平の夢を食つて居る間に歐洲に於ては三十年戰爭を初めルイ十四世の侵略戰、北歐戰爭、七年戰爭、奈翁戰爭と夫れから夫れへと大戰争が頻發した。之が歐洲兵學や兵術を飛躍的に進歩せしめたのみならず、總ての物的文化をも飛躍的に進歩向上せしめた。そして我が國は遂に彼に學ばねばならぬと云ふ有様となつた基である。

戦争は文化を破壊して、又建設向上すると云ふ觀方もあるが、三百年間我徳川時代と同時代の歐洲とを比較すれば轉た其の感を深くするものがある。

我が戦國戦史を戦争史として觀察するならば、戦争哲理的には教へられる所が甚だ多い。以下其の主たる點を述べよう。

終生の長期戦

凡て、戦國時代の武將は一生を戦争に終始した。否、父の時代から、子、孫の時代迄も戦ひ抜いて居るのである。實に徹底せる長期戦である。然も此の長期戦は少なくとも其の領土の建設戦で、信長、秀吉、家康の如き天下の建設戦もある。試みに戦國第一流の名將の行つた長期建設戦を概考すると、武田信玄が上杉謙信との抗争を除き、他の信濃の諸豪を完全に征服するだけでも十數年の長日月を費して居る。信玄と謙信との川中島の抗争は約十七年に亘つて居る。

後北條氏が關東の大部を領有する爲には、早雲から其の孫の氏康の代までかかつて居る。そして氏康と謙信とが覇を關東に争つた期間も亦十六、七年の長期である。

織田信長が永祿五年十月西上すべき密勅を拜してから、美濃一國を平定するだけでも約六年の歳月を費して居る。信長が織田家の嗣となり、内訌を治め今川義元を桶狭間に屠り、次で美濃を平定して西上し、畿内及其の周邊の諸國を平げ、武田信玄の逝去後武田氏を滅ばし、上杉謙信の逝去後北陸の大半を領有し、秀吉を遣はして中國征伐が開始

し陰陽五ヶ國を從屬せしめ、天正十年本能寺に於て悲壯なる最後を遂げる迄は、三十三年の長期に亘つて居る。

毛利元就の陰陽兩道の平定には、其の終生を費して居る。然も、尼子氏の遺族や遺臣を完全に滅ぼしたのは、元就逝去後、其の子元春である。

上杉謙信は越後一國の平定の外は、多くは義戦に終始し必ずしも建設的とは云ふことが出来ないが、愈々織田信長との最後の決戦を豫期して西上の爲の閱兵式を行ひ、其の夜發病、病むこと僅か二日にして雄圖空しく世を去る迄三十數年は戦争に終始した。

長期戦となつた所以

以上は主なる若干例であるがこれ等の長期建設の迹を温ねて、思ひ浮ぶことは(1)吾等祖先の長期戦力の偉大性(2)斯の如き長期を要した所以である。(1)のことは敢て説明する迄もないが(2)については少しく考察する必要がある。これには色々の理由もあらうが察する所、當代の人は剛健質實で、堅忍持久の力が強く、又一面當代の名將は徒らに功をあせらず、且つ戦ひ且つ建設し、不用意や早急的な氣分で無理をして、戦力を消耗するやうなことを避け、謀略を以て敵に虚を作らしめて、疾風の如く之に乗じ或は敵の實は之を避け、虚は之を電撃するといふやうな、幾多の施策を爲し、謀略などでも其の成果を收むる爲には一年や兩三年の歳月を惜しまぬ、何處迄も戦力を養ひ兵力を愛惜しつゝ戦ひを続ける。其の遣方は長期戦争觀としては極めて堅實な遣り方である。戦場

に於ける行動も種々の觀方もあるが、所謂正奇宜しきに適ふと云ふ點が實に立派なものである。故に自然に隣國武將との抗争も永引くが、結果は誠に宜しいものが多い。加之當代の戦法上、軍隊の編制裝備及び兵員補充は簡單であつたことや地形が嶮難、交通は不便であるから隔々迄の平定には長時日を要する。殘敵などでも一度嶮難に楯籠ると一年や二年の命脈を保ち得ると云ふやうなことは長期戦となつた理由かと思はれる。之を、支那事變と比較すると、支那事變の永引く理由も種々あるが、其一つには、蔣軍幹部の抗日思想は根強く、敵の戦區に依つては其の地形は嶮難、その交通路に至つては全く原始的の歩小徑、偶々ある主要道は、それこそ寸断せられて居る。彼等は極めて單純な輕裝備で輕重機關銃、小銃、輕迫撃砲が主要兵器であるから、編成裝備も極めて容易、人員補充も容易であり、是等の輕兵器を援蔣國からも購入せらるゝ。故に過去四年半に互り皇軍は毎戦大戦果を收めて居るのであるが、田舎の農家の蠅の如く却々絶滅しないのである。之を歐洲特に中、西歐の如く交通至便で、近代裝備を以て自由自在に作戦が出来るならば、既に早く片付くのであるが裝備は全く、我が戦國時代の種々島銃や、大銃を現代化したやうなものであるから、戦國時代のことを思ふと、永引くのは當然だと思ふ筆者は在支間戦地の地形や交通或は彼我の態勢を見て全く戦國時代から、甲冑を脱いだと同じで、唯對手は弱いだだけだと部下に冗談を云つたこともあつた。併し弱いと云つて

も聊かも馬鹿にはならず又、行軍力が強く、輕裝を以て嶮難を駆け廻るの速いこと、粗食粗衣で持久力のあることは敵乍ら賞めてよいやうな場面もあつた。假りに、歐洲の精銳を誇る部隊をして中南支地方の山奥で蔣軍と戦はせて見たら、初めて皇軍の偉大なる眞價が分ると思ふ。讀者諸君は戦國時代を想起しつゝ、長期戦を覺悟し、且つ戦國時代に、大山地帯で戦つた上杉軍、武田軍、毛利軍等に劣らない奮戦を爲し、或は現に爲しつゝ、ある皇軍將兵の後援に一人の力を注いで頂きたいと念願する。

戦國時代の名將の領國と云ふものは、今日の所謂完全なる小國防國家である。併し我が戦國時代に於ける名將がその領國を國防國家體制に導く上に於て、一番意を用ひて居ることは、士を愛し民を慈むと云ふことであつたことを見落してはならぬ。戦國とは云ふものの、名將の領國は住民は必ずしも戦苦に惱まず、領主の爲めに働くこと云ふに過ぎなかつた。殊に後述するが如く、織田信長の如きは、自分の如何を問はず人材を登用したから民何れも志を得た。國民を驅使し奴隸として自己の覇業を爲し遂げようとしたやうな戦國名將は一人も居ない。士民を愛しつゝ、富國強兵に精進した。北條早雲、尼子經久、毛利元就、北條氏康、武田信玄、上杉謙信、織田信長、長曾我部元親、豊臣秀吉、徳川家康、島津義久等、當代第一流の名將は何れも皆民力を養ひ、之を以て戦力の根基として居ることは、其の家訓と實績とを見れば明らかである。戦國時代の名將は、常に

群雄の領國は
小國防國家

先づ内を治め、内を以て、皇道主義的な、小國防國家と爲し然る後外に力を伸ばした。換言すれば、内は戦亂の間にも仁政を以て民に臨み、國力を培養し、民をして喜んで領主の用を勤むる如く仕向けて、然る後外に力を用ひた。假令夫は一つの術策であつたと悪く見るも、決して悪い術策ではない、謂はゞ王道の謀略だ。

連合及同盟の價値

戦國時代の武將が外に力を用ふる場合には、屢々同盟又は連合を行つて居るが、織田信長と徳川家康との同盟以外には極めて薄弱である。北條氏康と武田信玄との連合、毛利氏と浮田氏との連合、柴田勝家、瀧川一益、織田信孝との連合、家康と織田信雄との同盟等數へ来らば他にもあらうが、一つとして終りを完うし効を奏したものは無い。只信長と家康との同盟だけは最後迄節を變ぜず、兩將大成の爲めになつて居る。

思ふに多くの同盟も連合も皆利害關係とか、感情とかからであるから、利害關係や、感情に變調を來たさば、昨友今敵となるのは何の不思議もない。唯相互に信頼し合ふと云ふ氣持が盟約を繋ぐのである。北條氏康が武田信玄と提携して、上杉謙信に當つたが信玄が功利的で頼むに足らず、寧ろ、義に堅き謙信と結ぶを子孫の爲なりとして抗争十數年の後、遂に謙信と和し、又、信長と家康とは本能寺の變に至る迄、約を枉げず、其の後、家康は、信雄の爲、秀吉とも抗争した如き、勿論兩將の心裡には、多少の利害關係を考へ、政策的必要も織込んでの同盟であらうが、兩將信頼し合ふにあらざれば、斯

くの如くなるものでないことは勿論である。假令共倒れになつたとは云へ、淺井朝倉の連合の如きも互に信頼し合ふと云ふ心理が濃厚である。

戦國時代の同盟や連合と、近世及び現代の國際上に於ける夫れとを比較すれば、民族の異なるだけ、更に考へさせられることあるは勿論、史實、現實、か何を物語るかを正視せねばならぬ。本能寺の變を伴はざる信長流か夫れとも家康流か、將又、謙信の徹底せる義心か、何は兎もあれ、盟邦から信頼を受け、敵國から手出しが出来ぬと云ふ強味を持つやうにすることが肝要だ。

名將の私生活の儉素

戦國時代の名將の私生活は極めて剛健質實であり、儉素そのものであつた。之等の史話は頗る澤山あるが其の若干例を掲ぐると、上杉謙信は酒が好きであつたらしいが、其の肴は梅干であつたと云ふ。謙信に登用せられた後上杉の重臣となつた直江兼續は或る朝早く同僚の某を訪問すると同僚は朝食中とのことで暫らく待つて居つた、すると同僚の某が朝食を濟ませ、應接し、待たせたことを詫びると、兼續は「尊公は朝食に何を御召し上りか」と尋ねるので、某は「粥と鹽と蓼で御座る」と答へた。すると兼續は「蓼だけは餘計で御座る。粥と鹽とで十分で御座らう」と云つたとの話もある。加藤清正は其の家訓中に玄米を食することを強要して居る。そして違令者は之を追放すると云つて居る。

日本に於ける三食主義は戦國時代に始まり、其の以前は二食主義であつたと云はれて居るが北條氏康が其の子氏政を試めた訓話を見ると、尙二食主義であつたと思はれる點がある。徳川家康は其の身を持するに實に儉素であつたことは有名であるがまた三河國に居た小身時代に終始麥飯を食べて居つた。或る日食事の際、近侍が椀に米飯を入れ其の上に僅か計りの麥を乗せて差出すと、家康は「其方は不心得者である。今は戦國で民は衣食住に苦しんで居る。予一人のみ贅澤が出来るか」と叱つたとのことである。

天王山の争奪戦に於て有名な堀秀政は北ノ庄に封ぜられ城の修繕工事の監督を弟の秀種に命じたが、まづいことがあつたので、叱り付けた所、秀種が憤慨して其の翌朝家出した。之を聞いて秀政は「可哀想なことをした、途中で路用も盡きたら餓死してしまふだらう」と思ひ、早速小判十枚を取り出し其の包紙を取り除き、之を使者に持たせて弟を追及して渡せと命じた。使者は追及して秀種に金を渡して其の旨、復命すると、秀政はせつせと包紙を熨して居る。そして使者に對し、其の勞を謝し且つ、近侍等を顧みつゝ「俺がかうして紙を熨して居ると、其方等は、各ちだと笑ふだらうが、必要の十金は惜しむべからず、無用の紙一葉は之を惜しむべしである」と訓戒したとのことだ。

加藤嘉明の陣羽織は粗末な白木綿で、其の紋は之を墨で書いてあり、鎧も亦粗末なものであつた。所が兜は非常な立派なものであつた。臣下の者が其の譯を尋ねると、武人

は戦場に出れば、戦死は覺悟の前である。そして戦死すれば、胴體は鎧と共に戦場に捨てられるが、首は兜と共に敵將の前に持つて行かれる此の際兜が見すばらしいことは武人の死後の大恥辱であると答へたさうである。

島津義久の家臣が、城門が茅葺であるから、小板葺に改造しようと思ひ、義久に進言すると義久は、城門が茅葺でも、領民さへ富んで居れば夫れで宜しい。領民の富むことは何よりの強味である。餘計な所に金を用ひ、民力を勞してはならぬと戒めて改造を許さなかつたと云ふことである。

以上のやうな史話は他に多々あるが戦國名將が、其の衣食住に亘り、率先して剛健質實儉素の範を示し、然も夫れは、宣傳的な偽善ではなく、終生私生活を質素にした。之が生涯を通ずる長期建設戦に堪へ得た重因の一つである。

現下の長期建設戦中の國民各界層の生活振りを見れば、まだ、衣食住に亘り猛省を要するものがある。兎に角衣食住萬般に亘り、インチキ生活を一掃せねばならぬ。

筆者は現下、衣食住に關し、書きたいことは山々あるが、他日の機會に譲り、茲には戦國名將の私生活の儉素なりし若干例を擧ぐると共に、今人に對し戦國名將の私生活に學べと強烈に呼號するに止める。

謀略と用間

戦國名將の謀略用間と云ふ方面を見ると實に秘術を盡し極めて巧妙なものがある。一

中には極悪非道のものもあるが。敵の戦力を弱める爲、其の主従を離間し重臣を斥け、敵の戦意を破損したり、或は戦の名分を立てる爲の謀略を始め、賈恩利益提供を以て誘引し、或は毒を以て毒を制し良薬を過度に用ひて敵を殺し、美味を以て敵を弱らせたり、敵の剣を奪つて敵を倒すと云ふやうな謀略もある。我方の油断、隙、弱點を故らに暴露させて、敵を油断せしめて之に乗ずるやうな謀略もあれば、偽講和と云ふ手を用ひた例もある。親和を求めて敵を油断せしめて、之に乗じた者もある。善を標榜して惡を爲し、柔を以て剛を制することや、王道を行ひ霸道を行ふとか、或は相手を迷信に陥らしめ、迷信を利用するやうな謀略もある。其の他擧げて數へ来らば實に多種多様である。詳細は拙著「我が戦國時代に於ける名將の謀略」に蒐録して置いたから茲に之を略すが、兎に角現下世界戦國時代に於ては所謂秘密戦が所在に行はれる。外交謀略、思想謀略、經濟謀略、其他對手國の戰意消磨破摧の策は益々巧妙となるであらう。我が戦國武將の行つた謀略を現代化して、之を行ふの是非は別として、戦國武將の行つた謀略を見て、自己警戒に資することは極めて必要であると思ふ。例へば戦國名將は敵の主従を離間して、其の戦力を弱らせたやうなことは、今日其の國の國論を不統一に導くことに相通ずるものである、すれば、斯様な戦國史話を見ても直に現下世界戦國時代に於ける自己警戒の資とせねばならぬことの如き之れである。筆者は、防諜と共に、更に敵の謀略

戦國時代の國
實的彫例

に乗らぬやう國民を指導するの必要を痛感する。

戦國名將の貽したる國實的作戦は多々ある。毛利元就の吉田守城戦、嚴島の戦、富田城の攻略戦、謙信、信玄の川中島の最後の決戦や茲に至る迄の虚々實々の作戦、謙信の尖銳且つ機動力旺盛な作戦振り、信玄の堅實なる作戦振り、三方ヶ原に於ける信玄と家康との戦闘、北條氏康の川越の夜戦、鴻臺の夜戦、北條氏規の韭山守城戦、織田信長の桶狭間の急襲戦、姉川戦、朝倉軍の隨意退却に對する追撃戦長篠の戦、豊臣秀吉の山崎の合戦、賤ヶ岳の戦、徳川家康の小牧長手戦、島津家久の有馬原の戦、吉川元春の馬野山に於ける秀吉との對陣等を見れば他の歐洲古名將の戦史には類例なき巧妙な點が多々ある。殊に名將と名將との取組に至つては、實に我が古戦史の外、見ることの出来ない偉觀で、我が古戦史の矜持であると思ふ。戦國戦史を讀めば今日の兵學の原則は勿論、寡を以て衆を撃破し或は九死一生死中活を求める作戦の眞諦を克く看取會得することが出来る。戦國名將の作戦を、現代化して現代の編制裝備を以てする軍隊の運用に資したならば、世界何れの國も追従し得ざる用兵の妙術を創意することが出来やう。併し、事は筆者の専門事項ではあるが、多くの讀者各位には専門ではないと存ずる故に此の程度に止めて置く。

次に戦國時代の武人精神を一閱しやう。

武人精神

戦國時代は所謂腕づくの世の中で、人倫道德も紊亂した時代であり、下剋上氣分も濃厚で、家老が主家を横領したり、主人を殺して其の領地を私有したり、主家を押し除けて實權を握ると云ふやうな例はザラにあるが、一面又武士道精神も大に見るべきものもあり、後世の人の真似の出来ないやうな立派なものもある。戦國時代の不倫悖德史話を紹介する必要が毫もなく、其の武士道的美談殊に名將の言行は大いに之を紹介したいが、是亦紙面が許さぬ。そこで筆者は、戦國時代に現れた功利心と節義心との二つに付若干所見を申述べやう。

筆者は、前に建武中興史を概考して、中興を挫折破壊した根本は當代の武家と公家との功利心が其の重因だと申したが、此の功利心と云ふものは戦國時代に於ても亦、甚だ盛んなものがある。そして此の功利主義者が却て大成し、其の子孫が今日迄榮えて居るものも尠なしとしない。例へば信長に仕へ、次で秀吉、次いで家康へと鞍替して身を完了した武將の如きは其の顯者なる一例である。尤も仕へる主將を見る明があり、仕へた首將に對し、最善の忠勤を擧げたのだと云へば取柄もあるが當代に於ては、忠臣は二君に仕へずと云ふ道德觀を持つて居たのであるから、當代の道德から見れば節義心が無い功利主義者だと評することは出来よう。信長に仕へ、次で秀吉に臣事し、次で家康に従屬した武將は、三人の主君に仕へたことになる。要するに當代をうまく游泳したと評

しても強ち不當とも云へまい。併し乍ら、若し是等世渡り術の名人は、一日も早く皇國の平安になるやうにしたいが、自分で天下統一は出来ぬ、夫れ故其の力量ある首將に仕へて、皇國の一日も早く、安定するやうにと念願して信長から秀吉、秀吉から家康へと遊ぎ渡つたのだと云ふのならば、別段非難する必要はないのみならず、至當の事であり、功利心はないと云へるが、皇國安定の爲、三主に仕へたのだと云ふ確證なきのみか、多くは否悉く、子孫の爲美田を買つた類に屬すると云はざるを得ない確證の方が多し。そして斯様な人は終りを完うし子孫も榮え、又今日も小名將と云はれてゐるのだから、功利心の根ざす所は甚だ深い。

第二次近衛内閣の政綱中に功利心打破に付ての一項があつたことは、至極同感だが、功利心の芟除には歴史觀、歴史教育から改めてかゝらねばならぬと思ふ。

戦國時代に於て義將の鑑と謂はれる人も可成りある。大友氏の二大柱石とも云ふべき立花道雪、高橋紹運の如き、殊に高橋紹運の岩屋城に於る奮戦と其の最後及島津家久との交渉などを見れば、實に武人の鑑である。太田道灌及其の子孫の上杉氏の爲に盡して最後迄孤忠を盡したことや、長野業正も當代上杉の部將として上州箕輪に於て、傾く上杉の支柱となり、其の子に至る迄節を枉げず、又、長篠の戦に於ける馬場信房、山縣昌景、内藤昌豊の三宿將の如き、實に功利の徒をして慚死せしむるやうなものも甚だ多い

然も是等の義臣の子孫は今はどうなつて居るか。之れを思ふと時代の罪とは云へ、功利の徒は勝を制し、義に生きた人は多くは跡方もないと云ふものが尠しとしない。唯高橋紹運の子、宗茂は立花家を嗣ぎ、宗茂も亦義心の厚い人であつた。そして其の手腕技倆も戦國末期稀に見る青年武将であり、其の子孫は餘慶あるだけだと云つても宜しい。之を思ふと筆者は功利主義的な歴史觀を改める必要を切感する。

今日の文武官は 陛下の文武の臣である。其の上官は何代變るとも斷して二主以上に仕へる古武士とは違ふから、上官を介して 陛下に仕へ奉るとの堅き且つ明徴なる意識を絶對に必要とする。然るに若し事ふる人は、信長から秀吉、秀吉から家康に仕へた武將の氣分で、上官を見て節を左右し、事へられる上官は自分の子分の如く思ふて好嫌ひに依り、部下を左右するが如きことあらば、功利思想は到底拂拭せられない。今日巷間では、あの人は誰の子分だとかと云ふやうなことが平氣で唱へられ、その親分が榮職に就くと、其の人も亦出世するといふやうなことを耳にしがちである。斯様な状態と心理とが存續する限り、功利心は絶滅しない、兎に角功利主義の徒を用ひないやうにし、一誠職責に最善の努力を盡し、その成果の常に擧がる人を重用せねばならぬ。好嫌ひで採否を定め、自己本位で毛嫌ひし、第三者の評判など聞いて人事を左右して居つては功利主義の徒はのさばるばかりである。曾て政黨が華かなりし頃、地方長官以下一巡査の地

位迄左右したやうな人事は論外だが、功利心を排除せんとせば先づ人事を以て功利主義の徒を除くことが肝要である。

筆者は戦國武將の榮落の迹を観察する毎に斯様な感を深くする。

以上は戦國時代各名將の長期建設戰を通觀して、現代建設戰にも參考とならうと思ふ主たる若干點を述べたのであるが、各名將の行つた所を一々紹介することは紙面も之を許さぬと思ふから、以下亂麻の戦國に統一のメスを入れ、且つ其の大半の目的を達した織田信長の建設戰に付概考しやう、蓋し戦國を統一したのは秀吉で、之を固成したのは家康であるが、織田信長あつての秀吉であり、家康である。信長無かりせば、後の兩雄果して志を得たか否かも疑問であるとも云へないこともなく、又秀吉も家康も苦勞はして居るが信長程苦勞はしないと謂へる、殊に筆者は信長の建設戰を概考せんとする所以のものは、公の勤皇心、殊に政治的にも幕府再建とか武家政治の意思が無く、精神的には當代筆頭の勤皇の將である。そして今日は信長型の人を要望せられる時代であるからである。

第十一章 織田信長の建設戦

筆者は敢て茲に織田信長の建設戦と云ふ。夫れは、永祿五年以後は、信長は西上の密勅を奉じ、又永祿十年更に西上の優詔を拜して、上京したのであり、信長も王師の將を以て自認し爾後に於ける作戦も政治工作も、共に此の優詔に基く國內建設と考察するこゝとが出来来るからである。従つて、他の群雄の如く、争覇的私戦を交へたものでないと思ふのが至當と思ふからである。

信長の戦歴

織田信長は十六歳にして、家を相續してから本能寺の變に殞る迄約三十三年の間、奮戦力闘、亂麻の戦國に統一の基礎を築き、此間特に勤皇の大義を闡明した功業は、實に不滅の偉業であると共に、後世に對し長期建設指導上にも將又一般の作戦指導上にも幾多の得難き好範例を胎して居ることは今茲に事新らしく説く迄もないことであるが、試みに其の主たる戦歴を列記すると

- (1) 天文二十年より永祿元年迄織田家内訌の鎮定。
- (2) 永祿二年知多郡を除く尾張國一圓の平定。
- (3) 永祿三年五月桶狭間に今川義元を急襲して之を倒す。

(4) 永祿四年より同十年に互り美濃を平定し岐阜に移る。此間、永祿四年、徳川家康との同盟成り、武田信玄とも修好し、背後の憂を除く、又永祿五年上洛すべき密勅を拜す

(5) 永祿十年十月、西上すべき優詔を拜し、六角氏を湖東に撃破して京都に入り、近畿を概定す。

西上前、近江の浅井氏と婚を結び提携す。

(6) 永祿十二年、但馬、伊勢地方を平定す。此の間皇居の御修繕に著手し御料を設定す

(7) 元祿元年、朝倉氏を越前に攻めたが、金ヶ崎城の攻城半にして浅井氏が違約擧兵朝倉氏に應ずるに會し、將に挾撃せられんとしたが、其の危険より脱して歸京、次で一旦岐阜に歸る。

(8) 同年六月浅井、朝倉の連合軍に對する作戦を開始し、六月二十八日姉川に戦ひ大に連合軍を破る。

(9) 同年八月より、近畿地方の再肅正戦を開始す。

(10) 同二年、長島一向宗徒を討伐し、浅井朝倉氏と尙抗争を續ける、一方叡山を焼討して近畿の一掃を除く。

(11) 同三年、尙浅井氏と抗争を續け三好、松永を討滅す。武田信玄との平和破れて戦端を開く、將軍義昭との間、漸く不和となる。

- (12) 天正元年、義昭の舉兵に會し、之と戦端を開き、遂に義昭を屈服す。(義昭の策動と信玄の霸心とに依り、信長と信玄との間は益々不和となり、信長と上杉謙信及び毛利氏との間亦隙を生ず)
- (13) 天正元年七月義昭再舉して敗走し、足利幕府茲に倒れ、信長始めて名實共に朝臣として中央政權を握る。
- (14) 此の年十一月迄に淺井、朝倉、六角及三好の四氏を完全に討滅す。
- (15) 同二年武田勝頼と戦端を開く(天正元年四月信玄卒す) 同年八月長島の一向宗徒を殲滅す。
- (16) 同三年、長篠に於て武田勝頼と戦ひ、武田軍に致命的打撃を與ふ。
- (17) 同年八月より、上杉謙信の西上に對する北條作戰を開始す。
- (18) 同四年安土に築城して、之を本據とすると共に、謙信の西上に備ふ。
- (19) 同五年、松永久秀を討滅し紀伊地方を肅正す。
- (20) 同年十一月、秀吉を將とし中國征伐を開始す。
- (21) 同六年荒木村重反す。依て之を討伐、伊丹城を長圍す。
- (22) 同八年、秀吉の中國征戰漸次進展す。
- (23) 信長上洛以來、永年抗爭したる大坂本願寺は天正八年遂に降る。

死中求活

(24) 天正九年、上杉景勝と戦端を開く。(謙信は天正六年三月卒す)
 (25) 同年伊賀國を平定す。
 (26) 同十年三月、武田勝頼を滅す。
 (27) 同年六月、遂に本能寺の變に殞る(享年四十九)
 以上列記したゞけでも、一生涯を建設戰に終始したと云つて宜しからう。尤も戰國の武將は何人でも同様であるが、信長の如く廣地域に互り活動し、且つ辛苦をした者は尠ないと思ふ。

信長は十六歳で家を嗣いだとき、既に弟の信行との間に内訌が起り、柴田勝家や、林通勝などの宿將が反信長陣營に加はつて居る。之を治めて内を齊へ、次で親讓りの領地を固めるにも既に可成りの苦勞をして居る。今川義元の西上に對する反擊戰は、織田家の興亡の岐るゝ所であつた。然も信長は老臣宿將の諫を排して、九死一生、死中活を求むべく、十倍に垂んとする敵に對し之を桶狭間に急襲を斷行し、見事に義元の首を擧げた。其の出動征行は外観痛快其のものゝやうであるが、内心深く決する所があつたに相違ない。如何なる場合でも九死一生、死中活を求むる決意なくて大業は成し難い。

今川氏の出鼻は見事、へし折つたが、東には軍は精強にして當代第一流の名將武田信玄が覇を唱へ北方美濃には齋藤氏が威を揮ひ、伊勢には北畠氏が居る。四周皆敵と云つ

重圍の内線より局面打開へ

た状態である。斯様な状態は戦国時代の通有状態で、別に當代としては不思議でもないが、之を擴大すれば、前大戦間の獨逸、現大戦初期の獨逸であり、大東亞戦争前の日本亦同様である。規模こそは小さいが、此の難局を切り抜ける爲めの努力の比率は同様であり、哲理も亦同じである。

作事と外交との調和

信長は此の難局に處して、如何に施策を施したか。第一には徳川家康との同盟である。夫れは今川氏の隸下にあつた徳川氏を自己の陣營に引き入れ、却て今川氏に對する押へとすると共に又武田氏に對する戰略的背後掩護とした譯である。併し、家康は天才的名將とは云へ、未だ小身であり之を以て十分安心して居る譯には行かぬ。そこで武田信玄に對しても、辭を低くし、禮を厚くして好を修めて居る。時恰も信玄は謙信と抗争の最中であつたから、尾張地方に手を出せないと云ふ點もあつたに相違ないが、兎に角、却々其の手に乗らぬ信玄も、信長の餘りにも、鄭重にして用心深い修好振りには、聊か致された觀があることは文箱の史話でも分る。其の上尙、謙信と信玄との抗争を益々長期化するやうな工作をしたのではないかと思はれるふしもある。

美濃攻略

斯様に東方の憂を無くする爲め、萬全の施策を爲し、永祿四年後半期頃から、美濃攻略の直接作戦準備に著手し、五年本據を清洲から小牧に移した。美濃の攻略には、作戦謀略と政治謀略とを併用し、其の手段は實に巧妙であつたことは、周知の通である。そ

伊勢及關東地方の工作と作戦

して約六年の歳月を費して美濃の攻略を終り、永祿五年に拜した密勅に基く西上の下準備が完成したのである。

永祿十年十月、西上の優詔を拜すると、淺井氏と婚を結んで自己の陣營に引入れ、北部伊勢を討つて左側背の憂を除き、六角氏に對しても、大義を説いて西上の途を藉すべく外交々渉を行つたが其の妥結せざるや、敢然として湖東に進攻を開始し、一擧六角氏の本據觀音寺城と其の鎖鑰たる箕作城を衝き、茲に湖東地方の戰略突破を行ひ、直に京都に進入したのである。

模範的戰爭指導

これ迄の信長の建設戦を、兵學史的に見るも將又政治、外交史的に見るも、全く模範的である。ヒ總統が今次歐洲大戦直前や、波蘭の攻略、北歐進攻、西歐進攻と、信長の此の西上戦とを比較すると、相似形的の點が甚だ多いことは讀者各位も感知せらるることと思ふ。古今東西英傑の爲す所、軌を一つにしてゐるのも面白い。更にその歳月を較べても信長が永祿五年に、上洛の密勅を拜してから約七年にして入京し、ヒ總統が政權を握つてから略同年月を経て、歐洲の舞臺に活躍を初めた。大建設は四年や五年で出来るものではない。必ずや長年月を以て周到なる用意と執拗なる努力を要することはよく分ると思ふ。

信長の統率

織田軍の入洛後の軍紀風紀の嚴正であつたことは、有名であるが、之れは歸する所、

信長の統率其の宜しきを得た結果である。信長が違令の軍兵に對し、峻嚴其のものの如く臨んだことは、色々の史話に依り推想することが出来る。

信長は入洛後近畿の降將を寛大に遇したことは勿論、將軍義輝を殺した松永久秀などをも之を許し、彼をして大和平定に従事せしめて居る。信長は期せずして神武天皇の建國聖戰史の御聖訓を奉行して居るやうな感じがする。降將を寛大に取扱ひ、其の有爲なる者を登用すると云ふやうな精神は日本民族の血脈中に流れて居ると申すべきだ。狹量で、人を毛嫌して、用ひないと云ふやうな量見では、所詮大業は遂げられないと云ふべしだ。

信長の勳皇

信長は京都の秩序を完全に肅正し、永祿十二年から皇居の御造營に著手し、御料を設定し、御式微の極に達したる皇室を御安泰に爲し奉つたことは、信長の建設史中特筆大書すべき勳皇の美譽である。永年大義名分地を拂ひたる亂世に於て、然も永祿十一年末近畿を略定し、十二年より直に皇居の御造營を爲し奉つたと云ふことは詰り、皇室の御安泰を第一著にした譯で、後世に誠に良範を胎すものである。

信長が入洛し、上宸襟を安んじ奉り下將軍義昭の復職を援け京師の住民を安堵せしめたが、信長自身は之れより、更に一大難關を突破せねばならぬこととなつた。

漸く迫れる難

信長は元龜元年春、朝倉氏討伐の爲、越前に進入、金ヶ崎城を攻圍中、近江の淺井氏

關と其の打開

姉川戰

の寢返りに會し、將に腹背に敵を受けんとしたので急遽兵を反し、危地を脱して京都に入り、次で湖東に於ける六角氏の殘黨を一蹴して、岐阜に歸り、淺井、朝倉の連合軍に對する作戰を準備した、そして六月二十八日姉川に於て淺井朝倉の連合軍を撃破した。併し、信長は秀吉等の具申したる淺井氏の本城小谷攻略の進言を用ひず、連合軍を蛇の生殺しの状態の儘、一旦作戰を中止し戰況戰果を朝廷に奏上して岐阜に歸つた。之は淺井軍の捕虜安養寺某の言に依り小谷城に尙千八百の精強があることを知つた爲めだと傳へられて居るが、恐らくは近畿地方には反信長黨の策動あり一面又信長の妹婿淺井長政の反省工作と云ふことを考へたであらうし、大局から見ても、小谷攻城に時を費すの不利を看取した結果とも考察することが出来る。

近畿の再肅正戰

果せる哉、近畿附近では三好の殘黨、大坂本願寺、叡山の僧兵等が策動を始めたので信長は姉川戰後二ヶ月の後、近畿地方の再肅正戰を開始した。信長が野田、福島(今の大阪西部)に據る敵を攻撃の爲天滿方面に出陣すると、大坂本願寺の僧兵が出撃する、之を撃退して野田福島の敵の攻撃を開始したが、其の半に淺井朝倉の連合軍約三萬が、湖西から京都に進撃するとの報に接した。そこで信長は一部を残して當面の敵に對せしめ、主力を率ゐて反轉して連合軍に向つた。信長が反轉して來ると連合軍は叡山に據つた。依つて信長は、坂本方面に兵力を集結して敵の退路を遮斷し、毎夜小企圖の夜襲を

淺井朝倉連合

軍に對する再

行ふと共に、一方僧徒に對し「聯合軍と絶縁せよ、然らざれば中立を守れ、此の何れかの要求を容るれば寺領は之を安堵しよう。併し、若し此の兩要求を拒むならば、他日焼拂つて汝等を塵殺してしまふ」と、すかしたり、脅かしたりしたが、僧徒は聽き入れない。(之が其の翌年の叡山の焼討ちとなつた譯である) 又、信長が使を遣はし連合軍に對し決戦を申込んだが、返事をしない。其のうち、初冬となつて來たので、朝倉軍は本據越前との連絡は雪のため、杜絶することが心配となつて來た。かうなると、連合軍も和平を提議せざるを得なくなつたので、講和を申込んだが、今度は信長は承知しない。そこで連合軍は、將軍義昭に斡旋を依頼し、朝廷からも講和を勧められたので、信長もこれに従ひ、十二月講和が成立した。信長は、勅命に對しては勿論、上司の命令に對しても、従順であつたことを見落してはならぬ。

あせらぬ輕妙なる内線作戰張り

以上の経過を兵學觀を以て研究すると、實に有益で、殊に姉川の戦は得難き遭遇戰例であり全般の経過から見ても内線作戰としては研究價値も大である。純兵學的のことは本稿の目的上深く且細かくは述べないが、元來内線作戰の本領は、相手を各個に撃破するに在る。之が爲、何れかの一敵に對し、速かに再舉不能の大打撃を與へるのが、よいのであるが、信長四周の敵の如く、五月蠅く、却々根絶し難いやうな敵に對しては、或る戰機を捉へる迄は弾力性なき消耗戰に陥らぬやうにすべきである、内線に立つての建

用兵の秘教を具現

設戰は水面に投したる一石の波が擴がり行くやうに、作戰し且つ建設して行くのが宜しいと思ふ。之が爲には常に作戰に弾力性を有せしむることが緊要である。戰國時代の名將は何れも此の點は、よく考へて居るが、信長は此の點を殊によく考へて居るやうに思ふ。元々、内線に立つことは、戰略態勢としては、賞揚する所ではない。信長は内線に立つと、うまく外線に出て來る。越前からの反轉は聊か苦しまざれと言へないこともない又、狭撃を受ける危地を脱して、岐阜に還り、作戰準備の後著しく不利ならざる戰略態勢を以て、連合軍と戰つてゐる。其の後、大坂方面に出動し又腹背敵を受けたときでも反撃して、連合軍に對しては外線に出て、其の退路遮斷の態勢を採つて居る。桶狭間に於ける猪突的急襲と比較すれば、動、靜、奇、正、實に宜しきを得て居る。後年の長篠戰を加へると、更に用兵の妙諦を得て居ると思ふ。

政略略の調和

信長は、小局面に於ても、大局面に於ても、常に戰略と政略とを調和して運用し、唯單に武力萬能主義にならぬやう、考へて居る點は見落し難い所である。

決斷力

元龜二年には信長は叡山の焼討を敢行した、此の焼討に付ては、後世信長を非難する人が多いが、筆者は多少所見を異にして居る。信長の叡山焼討には十分の理由がある。結果から見ても是に依り、平安朝以來の京都の一癩か切開手術せられた譯である。唯信長の遣り方が、徹底し過ぎた爲め非難があらうが、數百年の積悪は、思ひ切つた荒療治

困難更に加はる

が必要でないとは云へまい。筆者は信長の此の決断力が戦國統一始業の底力であつたと思ふ。

元龜三年には信長の爲、情勢は刻一刻と困難を増して來た。即ち、近畿に於ては、叡山の肅正は完全に行ふことが出來たが淺井朝倉の戦力は尙侮り難いものがあるのみならず、彼等の謙信及信玄との策應が奏功して來た。殊に武田信玄は近畿の反信長等と策謀して、西上の鋒を向けかけた。事實、近畿の絶え間なき動搖も將又淺井朝倉の動靜も皆信玄の策動に因る點も多い。將軍足利義昭は虚器を擁するやうな立場に在る爲を、不平を起し、権力回復の爲信玄、謙信、大坂本願寺、毛利氏等との聯合を策すると云つたやうな状況で、信長から見れば所謂緊迫其のものゝやうな状況である。

此の信長の環境は恰も大東亞戦争前の日本のやうな姿である。即ち淺井朝倉の聯合軍は將軍、近畿の反信長黨は英や蘭印の類、信玄は米國のやうな關係に似て居る。

此の間に處して信長は如何に局面を打開せんとしたかと云ふに、外交的には、謙信に對し禮を厚くし、辭を低くして好を修め、以て、信玄を牽制しようとしたが、之は餘り功を奏しなかつた。作戦的には信玄の西上に先だち淺井朝倉の聯合軍を撃滅し得る見込は立たない。依つて信長は近江地方に部將を止め、自ら岐阜に歸還して信玄の西上に備へることゝした。

凡の如くにして非凡の策

信長の此の決心は極めて平凡のやうであるが、觀方に依つては果斷なる方策である。即ち事に依ると、京都は再び將軍義昭を繞る反信長黨の跳梁に委せねばならなくなるが京都の中央政權に戀々として居つては自滅の外なく、自滅すれば奉勅西上した甲斐もなくなる。此の所は信玄と決戦するより外に策はない。併し信長は心中必ず期する所あつたに相違ない。此の際に於ける信長の決心は妥當であると評すべきである。

危懼去る

元龜三年十月、信玄は大軍を率ゐて西上し、徳川家康は、信長より一部の増援を得て之を三方ヶ原に迎撃して、惨敗し、信玄は西上を續けたが、途中、野田城の攻圍中發病し、一旦甲府に歸陣するの止むなきに至り信長も一時、小康を得たが、天正元年に至り信玄は信長の五逆を擧げて軍の名とし、信長亦信玄の七惡を並べて之に應酬し兩雄の決戦益々近迫するを思はしめたが、天は信長に幸ひし、信玄は天正元年四月十二日遂に卒去した。是に於て、信長の最大危機は一先づ解消した。

長期戦下の不慮の事態

後述するが謙信も信玄の歿後天正二年から同五年に互り、北陸に於て信長と抗争し、愈々天正六年三月、大舉西上を前にして急逝した。信長の爲には實に天佑であつた。長期戦となると斯様な不慮のことは、得て有り勝ちのことである。さりとて、敵側に生ずる不慮の災厄を胸算する譯には行かぬ。筆者は建國聖戰に於て述べた如く天佑は最善の努力を拂ふた者に與へられる。皇師の將を以て自認した信長の努力を推想せば、蓋し信

足利幕府の
亡

長に天佑があつたのも至當とも思はれる。

信長は將軍義昭を奉じ、之を敬つて居るが、實權は信長が有して居る。之は當然の歸趨である。將軍義昭は失行が多かつたが、信長は之を諫め、少しも他意なきを示した。けれども、義昭は謙信、信玄及び毛利氏と通謀して、信長を除かんとし、種々と策動して止む時がない。信長は義昭との關係を調整すべく努力したが、天正元年二月、義昭は愈々舉兵した。蓋し同年春の信玄の西上に策應したのかとも思ふ。信長は一部を以て石山堅田の兩城に據る義昭方を撃破し、自から主力を率ゐて、義昭に迫ると共に、兵威の下、和議を申込んだ。けれども、義昭は之を承知しないので、遂に義昭の據れる二條城を攻圍した。茲に於て、義昭も力屈して和議に應じた。信長は義昭の講和承知は一時の方便であることは、萬々看破して居つたが、表面、義昭の態度に感謝の意を表し、兵を率ゐて岐阜に歸つた。然るに、義昭は此の年七月、更に舉兵したので、信長も遂に義昭を攻め之を追放し、茲に足利幕府は倒れてしまつて、中央の實權は名實共に信長に歸したが、信長は幕府の再建などは少しも意圖せず、一朝臣として何處迄も、當初の優詔奉行の大義實踐に精進した。

信長の政治的
大義

信長の義昭に對する態度は、足利幕府打倒の名を得る爲の手段であつたか、それとも誠意を以て義昭に臨んだのかは、詮索するの必要もあるまい。蓋し反國體政治體制たる

幕府を倒すことは當然のことであるからである。

強者信長が、弱者義昭に對し、兵威を示しつゝ講和を申込みと云ふことは面白い手である。現下歐洲大戰に於ても、時々總統が、ソ軍を撃破せば、英國に和議を提出し、英國若し應ぜずんば、最後の止めを刺すと云ふやうな説が傳へらるることがある。其の眞偽は別として此の種の手は既に、今より四百年も前に信長が義昭に對して打つて居るのである。

足利氏打倒後
の主作戦

信長は義昭を逐つた後、次いで、宿敵とも云ふべき、淺井朝倉の連合軍を完全に撃滅し天正三年には長篠に於て徳川家康を援けて、武田軍に致命的打撃を與へた。

淺井朝倉軍の
撃滅と長篠戰

長篠の戦は之を兵學的に見ると信長の作戦に錦上華を添へるものである。信長は武田軍殊にその騎兵が精銳なるを知つて居り、整々堂々と運動戦を交ふれば、假令兵力量に於て優勢でも、質を比較すれば、餘り、勝目がないと見て、今日の所謂攻勢防禦を爲し火器を以て武田軍騎兵の襲撃を破摧し其の攻撃力の萎靡するを見て敢然起つて攻勢を採り武田軍に致命的打撃を與へたのである。

我國に於て攻勢防禦の戦法を以て敵を撃破したのは、赤坂城に於ける大楠公を初めとするやうである。戦國時代に於ても名將は屢々攻勢防禦を以て敵を撃破して居るが、多くは城を據點として居る。野戰陣地を築設し之に柵等の障礙物を繞らし敵の攻撃を火力を

巧妙自在なる
用兵名將中の
名將

以て破挫したる後、攻勢に轉ずると云ふ現代と同様の戰術思想を以て敵を破挫したのは信長の長篠戰を以て初めとする。尤も大楠公は野戰築城に代ふるに楯を繋合せ、敵が懸れば散々弓を以て射すくめ、其のひるむを待つて攻勢に轉じた戰例を貽されて居るが、信長が長篠の戰術に於て約三千挺の小銃を準備し、之を三交代に發射せしめ、三連發銃の効果を擧げて居る點など、技術的創意にも長じて居る。

現代の兵學に於ては攻勢防禦は好んで採るべき戰策ではなく又理論としては宜しいにしても其の奏功は極めて難かしいものとせられ、我が作戰要務命令などは攻勢防禦を排して居るのである。然るに信長は此兵學上の難事とする攻勢防禦に創始的に成功して居るのである。筆者の知る範圍に於ては、攻勢防禦の成功した戰例は相當あるが、何れも屈指の大名將に依り、成功して居る。凡將には攻勢防禦で成功は覺えない。信長は桶狭間に於ては、十分一の兵力を以て大敵を急襲して敵の首將を殲し、姉川に於ては巧妙に淺井軍を堅城より、誘ひ出して遭遇戰に依り之を擊破し、朝倉軍に對しては、其の隨意退却に乗じて果敢なる追撃を斷行して遂に之を殲滅し、長篠に於ては兵力量に於ては敵に三倍する優勢を擁し乍ら、其の質に鑑みて、火力利用の攻勢防禦を行つて大成功して居るのである。多くの名將は何處となく作戰に一つの流儀があるが信長の作戰は實に孫子の言ふ如く、兵無常勢水無常形と云つた遺方で一定の原則や、流儀などに捉はれず、敵

謙信との抗争

次第で、之に優る妙手を打ち敵を制して居る。此の點は他の名將に見られぬ一大特長を持つて居る。實に名將中の名將と評しても過言ではない。

以上の外、長篠戰は勿論、桶狭間、姉川、其の他信長の行つた大小の作戰を兵學的に見れば得難く貴き幾多の教訓があるが、事専門に屬するから之を省き、筆者は以上、統帥上の偉大性の一端を紹介するに止める。

信長は淺井朝倉兩氏を討滅した後は、近畿及び其の周邊では大坂本願寺と伊賀の一國を除くの外、頑敵と云ふやうなものはなく、之れとても信長に向つて攻勢を取ると云つたやうな有力なものではない。近畿及其の周邊は先づ大體平定した。併し之れより、精強上杉謙信と抗争せねばならなくなつた。

謙信は天正二年夏頃から西上を開始した。そして同五年迄本據越後と加賀越前地方との間をピストンの往復一步一步と西南へ侵入し、天正五年には越前迄進攻した。信長は謙信の銳鋒は常に軽く之を受け流し、一方謀略を以て北陸筋に於ける謙信派を操縦したやうである。信長の作戰考案は北陸筋で謙信と決戰を交へず、安土に築城し、湖東地方に於て決戰を交へんとするにあつたらしい。

所が、謙信は天正六年、愈々最後の決戰を企圖し西上の爲、大軍を集め、三月三日閏兵を行つたが、其の夜發病し、病むこと二日にして西上の雄圖も空しく、西方淨土へ旅

中國征討 武田氏討滅

長篠戦後の對武田氏策

立つてしまつた。前に信玄、今、謙信、共に西上の雄圖を前にして病歿したことは、信長の爲めには天佑であつた。

信長は天正五年末から、秀吉を中國に遣はして、毛利氏の征服に著手せしめ、近畿及其の周辺の殘敵を一掃し、天正十年を以て大舉甲州に進攻一舉に易々として武田氏を滅ぼしてしまつた。

天正三年長篠の戦に於て、武田軍に對し致命的大打撃を與へた際、家康や秀吉や前田利家は一舉、甲府に向ひ大追撃を敢行しようと言言したが、信長は、之に同意せず、兵を還へした。そして爾後七年の後樂々と武田氏を滅ぼしてしまつた。

此の邊のことは信長の偉い所である。單純に戰略眼からのみ觀れば、家康、秀吉、利家あたりの言ふ所も尤もであるが、當時の近畿及其の周邊のことを考へ、且つ作戦準備と從軍將士の氣分とは大隘路の山地帯の長驅追撃を敢行するを許さずと信長は看取したのである。信長は戦勝に驕つて深入せず、時節の來る迄武田氏を蛇の生殺的に放置し、時節がよしと見て一舉大軍を以て、殆ど一瀉千里に武田氏を片付けてしまつたのである。斯様なことは一寸凡將には出來ない所である。

斯くて武田氏も滅んだ。信長は更に四國の平定を志し、三男信孝を將とし、丹羽長秀

獅子身中の蟲に轉る

信長の建設の振り

信長の人物觀

今日迄の觀れ

を輔として大坂に於て作戦準備を進むると共に秀吉の要請に依り、自から大軍を率ゐ、中國に出動を企圖して入京、本能寺に宿營中、逆臣光秀の叛に會し統一建設の大業、半にして遂に本能寺に悲壯の最期を遂げたのであつた。惜みても尙餘りありと云ふべしである。

以上信長の建設をば主として戦史觀から温ねて其の梗概と、所見の一端とを述べた次第であるが、之を通觀して特に感ずるのは、信長は凡有、辛苦を克服し乍ら、且つ戦ひ、且つ建設し然も決して功をあせらず、無理をせず、作戦と政略とを、うまく調和し、四周の頑敵や強敵を早急に一舉打倒しようと思はず、じわりと戦力を衰耗せしめ最後にぐわんとやつしけると云ふ遣り方である。確に長期建設の有力なる方策である。信玄謙信の死と云ふ天佑があつたとは云へ、若し戦つても、信長に勝星はあつたとも考へられないことはない。

茲で筆者は、更に信長の人物觀を附け加へたいと思ふ。夫れは信長の人物觀を叙すれば、自然に其の建設振りも更に肯定が出來るし、且つは、近時、難局打開の爲めには、信長型の人物が要望せられる傾向があり、筆者も亦之に全然同感で、紙上には初めて發表するのであるが夙に提唱して來た所であるからである。

今日迄の信長觀、殊に其の人物觀の中には甚だしき見當はづれのものや、或は小乗觀

る信長観

的のものもあり、又功利主義観としか、受取れない批判が多いやうに思ふ。就中、徳川時代の學者は殆んど悉く、信長を惡將視して居る。夫れは腐儒の凡眼を以てする功利主義観からで、徳川氏に阿諛し、少くも氣兼し、家康を偉くせんとする底意からだと評せざるを得ない。明治時代でも將又今日でも尙徳川時代の信長観が消えぬ。併し、果して信長は斯かる腐儒や凡夫の惡評するやうな人であつたであらうか、筆者は大乘觀に立ちて少しく信長を觀察しよう。

性格

多くの人は、信長は、無軌道な人で、殘忍性強く、疑心深く、短氣で、偏愛偏憎、如何にも不徳な言行が多く、爲に遂に明智光秀から弑せられて、終を完うすることが出来なかつたと評するのである。乍併、之は功利主義観、小乗觀乃至は皮相觀で、惡く云へば、腐儒偽君子、凡夫の類の我觀に過ぎぬと評せざるを得ない。

信長はその傳、平手政秀から死を以て諫めらるゝ迄は成程、ならず者的な所もあるが、斯様な行爲や性格は天才的英傑の幼時には得て付きもので、信長のみ問題とすべきではない。又信長の幼時の言行を見ると決して、ならず者的な言行許りではない。成る程英傑の卵であると肯定出来る言行もある、幼時信長が小蛇を捕へて、侍臣を顧み「斯の如きを勇と爲すか」と問ふと侍臣は「小蛇など捕へる位なことは何んでもないことで御座ります」と答へた。すると信長は、「蛇の毒は形の大小ではない。蛇が小さいからとて

弟信行との抗
争観

恐れないのならば、其方達は主君幼ければ悔るか」ときめ付けたと云ふ史話の如き其の一例である。

信長は平手の死に感奮して大成を期し、平手の恩義を終生忘れず、平手の爲に政秀寺を建立し、大成後も事毎に政秀のことを述懐したと云ふが如き善き方面を見る方は正しき觀方であると思ふ。或は信長は弟信行を謀殺したこの不徳を非難する者もあるが、斯様なことは、戦國時代の道德観では餘り問題とせず、他に數へ切れない程、其の例がある、信玄は父を逐ひ、嫡子を殺し、家康も實子を切腹せしめ、秀吉も秀次に死を賜ふと云ふやうに他の名將にも、あり勝のことで、獨り、信長のみを責る理由としては當を得ぬ。—現代道德観では悪行に相違ないが—現代道德観を以て戦國時代の道德を批判することは公平な觀方ではあるまい、信長から見れば、父なき後、遺臣が弟、信行を嗣としようとする策動があり、信行も其の氣になつて居る以上、裁判なき亂世に於ては、弟と雖も之を除かねばならぬ立場にあつた。戦國時代に於ては勿論、徳川時代に於ては、御家騒動があり、血の雨を降らせて居る。信長は織田家の正嗣と生れた以上、之を廢嫡せんとする一味に對しては、斷乎成敗することは當代としては是非はない。

信長は叡山を焼き拂ひ、僧侶以下全山の男女を壓殺し、長島で三萬の一向宗徒を焼殺したことや、到る處で、神社佛閣を焼拂つたことは、後世の非難の大的である。併し信

叡山の燒燬批
判

長の此の行爲に付ては、大に辯護の餘地がある。

抑も叡山の僧兵は王朝以來の大癌であつたことは、史上匿れなき事實である。戰國時代叡山僧侶の頽廢も推して知るべしであり、神聖なる道場などと云ふ資格は聊かもなかつたと見るのは、必ずしも見當違ひではない。所詮、近畿の平定にも此の大癌の切解は當然、爲さねばならぬ破目にあつたと思ふ。信長の叡山燒討には其の前年既に條理を立てて豫告してある。又信長は、燒討を斷行する際、老臣の諫めに對し「吾れ國賊を除かんと欲するのみ、吾れ四海を定め、王道の衰ふるを興さんと欲し筋骨を勞し、身命を輕んじ、未だ一日として安居せず、去歲攝津を略し、兩城將に陥らんとす、長政義景兵を擧げて、我が後を窺ふ。吾れ兩城を捨てて返る、(中略)人を遣はして僧徒に諭すに禍福を陳説す而れども、彼竟に服せず、務て兇徒を右けて以て王帥を棟く、此れ國賊に非ずや、今にして芟除を行はずば、乃患を天下に貽さん、且聞く、彼其の律を犯し、葦を茹ひ妾を畜へ、誦咒を東關す、安ぞ其王城を鎮むるに在らんや」と答へたことは山陽が日本外史に漢譯して廣く紹介した處である。實に堂々たる理由がある。結果は徹底し過ぎたとの非難は免れまいが、當代の惡僧退治には荒療治の必要があつたと思ふ。長鳥の一向宗徒に對しても、第一回及第二回の攻撃に於ては、左程、殘酷なことはして居ない。所が、彼等は太坂石山の本願寺と通じ、近畿の反信長派に組みし、叛服不常であつたから

長鳥の一向宗徒對批判

最後の太鐵槌を加へたのである。俗に佛の顔も三度との譬がある。信長としては成る堪忍はして居る。只成らぬ堪忍をしなかつたに過ぎぬ。道歌に「勘忍のなる勘忍は誰もする、ならぬ勘忍するが勘忍」と云ふことがある。修養を積めば、そこ迄行けるのであるが、成る勘忍をするのが常識である。此の點から云へば信長は成る勘忍はして居るのである。戰國時代は内戰とは云へ國際抗爭的に考へて居つたのである。國際争闘に於て成らぬ勘忍など出来るものではない。遣り過ぎた結果を非難するより英斷と、斷行の必要を見るべきである。

殘酷性云々も當らず

武田勝頼を亡ぼして、其の首を得て、侮辱したと云ふやうなこともあるが、信長が信玄の死後、勝頼が、身の程を知らざる西方侵略に對し、不快一方ならずであつたに相違ない。私的言行に無頓著な信長としてはありさうなことだが、非難すべく餘りに事柄が小さい。事によると當時の家康の勝頼の首に對する態度と比較して、家康を偉くする爲に信長のことを故意に誇張非難したと見られないことはない。

信長が朝倉氏を討つ爲、南部越前に進入し、淺井氏の寢返りに會ひ、身を以て免れ、次で岐阜に歸る途中、千草越で、信長を狙撃し損じた杉谷善住坊を捕へ、之を七日間、地中に立埋めにし、頭だけ出して置き、竹鋸を以て七日間に斬殺させたと云ふことは、如何にも殘酷なやり方だが、古來武人の典型かの如く云はれる源義家が、金澤の柵を攻

園中、城中から義家を罵詈した千住なる者を、城柵陥落後生捕にし、其の舌を抜いた話や源頼義が前九年の役、厨川柵を陥れ、此役間、官軍内に流言を放ち或は官軍の糧道を絶ち官軍を苦しめた藤原経清の首を鈍刀で斬つたと云ふ話に比し大同小異であり、獨り信長のみ非難することは公平な評論でない。

寛容性もある

信長は寛容の徳がないと云ふ人もある。成る程、左様に見える點もないではないが、最初の信長が入洛した際でも、美濃の齋藤家歿落後或は朝倉氏を討滅した際でも、降將は之を殺さず、寛大なる處置を施し、松井久秀の如きも一旦は登用した。久秀の叛は、信長の無頓著な言に疑心暗鬼を生じ、恐怖し殺されるものと早合點してやつたことだからである。信長の降將登用は政策であつたとするも、眞に肚の小さい男ならば、斯様な策を取り得ないであらう。信長から觀れば、随分手こずらされた大坂石山本願寺に對しても、最後には叡山や、長島のやうな残酷なことはして居らぬ。筋が立てば敵と雖も決して許さぬ人ではない。信長が家を嗣いだ直後、柴田勝家は反信長派の巨頭で、弟信行に加擔し、兵を擧げて失敗し、僧服で信長に降つた時も信長は寛大に取扱ひ勝家も最後迄忠實に信長に事へた。老臣、佐久間信盛のだらしなき行爲も許せる限り、大目に見て居つたが、其の非武將的行爲が益々募るに従ひ己むを得ず高野山に追放したが其の子は之を用ひた。

明智光秀の叛逆は信長が、餘りにも光秀が虐待したからだと云ふが、之れも小乗的な感情觀である。一介の浪人を一國の城主に迄、取立てた信長の人の登用を見ねばならぬ何れの時代に於ても獅子身中の蟲的の人間が居る。獅子身中の蟲に斃れたと同様の最期を遂げた人は、獨り信長許りではない。古今其の例は少なしとしない。殊に戰國時代には下剋上の風が盛んで、主人を殺したり、主家を横領した者は多々ある。然るに主人殺しと云へば光秀を其の代表者と目するのが常である。夫れは信長を惜しみ、信長の偉大性を裏書きし、問ふに落ちず、語るに落ちた世道人心の表現であるとも云へよう。

信長は淺井朝倉を滅した後の戰勝祝賀の宴席上其の首を取り出し之を肴にして大に飲めと云つたことを、ひどく非難する人があるが殺伐な時代のことであり、今日の人の心持ちで批判することも出来まい。

信長の私的言行を見ると、小人輩には如何にも仁者でないやうに見える點があるだらう。信玄や、家康が部下の失策を咎めず、秀吉は大度量を以て瀾達明朗に部將を傘下に入れたのに比しては信長は辛辣な所がある、だが謙信が松山城を失つた責任者を多數斬首し、成田長泰を痛烈に侮辱したことなどと、比較すれば、信長許り疍癩持の代表視するのは當るまい。信長が、洲股占領に失敗した柴田、佐久間等を責めないのみならず、其の勞を憐つたことなどを見れば、信長も、決して單なる感情的我儘の疍癩持でない。

信長の公私

光秀が信長を弑した後、信長の譜代の臣や外様の部將で、光秀に志を通じた人は殆どない。是を以つて觀ても、信長は部下から見放された人ではない。

信長、は大名將として、智の湧出する所、作戰上に於ても、將又隣國諸將との外交に於ても巧妙な謀略が多いので、私的言行上に於ても夫れがあるかの如く誤解された點はあつたであらう。信長は作戰上でも外交上でも、極めて細心周到であるが、私的言行に於ては無頓著であつたやうに思ふ。降將松永久秀の再叛、荒木村重の叛、明智光秀の謀叛も、多くは信長の私的言行の無頓著性が禍因の一つで、信長の缺點と云へば云へようが信長の私的言行などを云爲する様なことは、小人輩の小乗觀であり、信長の眞價を左右する問題ではない。

統御に術策なし

元來信長の部下統率方を見ると、信玄の如く籠絡的、術策的、論理的でなく、秀吉のやうに物的重賞籠絡主義でもなく、又家康の如く術策を厚く仁を以て鍍金したと云ふやうな感じがしない。何れかと云へば、信長は下に臨むには赤裸々的であり、非常識のやうで常識を失はぬ、叱るべきは叱り、賞すべきは賞し何等術策的統御はない叱るべき所を暫らく休へ、賞すべき點を多少、見合はすと云つたやうな點はないではないが、大體に於て常識的である。さう統御術に巧妙性がないが、此の統御に術を用ひない所に信長の偉い所がある。人を籠絡したり其の部下統御に術策を弄するなどと云ふことは、殊に

部下の長所を取り断して部下を捨てぬ

今日に於ては排斥せねばならぬ所である。信長の言行を見れば王事に粉骨碎身するを以て、其の使命と考へ、部下統御の術策などに頭を勞しないと云ふやうに見える點が多々ある。此點は戰國時代の武將中、信長以外には見られぬ所、現代に於ても亦、信長型の人には少ないやうに思ふ。

信長は部下を彌次るやうなことはあり、秀吉の如きも信長から猿と云はれたり、小身時代に、勝手に旗印を拵へて、信長に見付けられ、叱り飛ばされた揚句旗竿を、へし折られたやうなこともあつたが、信長は決して秀吉を捨てなかつた。秀吉は、柴田勝家を援ける爲越前に向ひ、戦はずして勝手に歸つた。信長は怒つて接見しなかつたが、その後中國征伐の先遣兵團長を命じた、叱り飛ばしてもその人の特長を用ひ、決して人を捨てない。茲に信長の偉い處がある、明智光秀は信長を怨んで叛したと云ふが、信長は光秀を捨てると云ふやうな點はない、森蘭丸の光秀に關する内申もさう信じたと思はれない點も多々ある。信長は部下に對しては誠意を失はず、大乘的愛護の念は十分にあつた只誠意の表現が小人には通じなかつたやうに思ふ。例へば、自分が朝廷から官位を授けられたとき、夫れでは部下に對しても濟まぬとして部下の爲にもそれを官位を奏上して居るが、斯かる大乘愛は小人輩には正解せられず只、信長から痛烈に彌次られる所だけを恨んだのであらう。兎角、信長の誠意も部下からは曲解せらるることがあつたやう

に思ふ。併し夫れは、部下が盲目だからだ。信長を咎めることは必ずしも當らない。斯様な小人輩の言に耳を藉すと、信長の如き偉才は埋れてしまふ。

以上は古來、信長の悪評に對する筆者の辯護であるが、古來の悪評は、何れも小人輩の小乗觀乃至は功利主義からの評論で取るに足らぬものである。筆者等も幼少時教へられた信長觀は多くは徳川時代傳來の腐儒小人の評の受賣的な歴史教育であつたと思ふ。今日、織田信長と云ふ映畫が出来て居るさうだが、内容は未だ見ないが、信長觀が改まつて行けば幸ひである。信長を悪評するやうな時代は小人のはびこる心細い時代である左様な時代は人物が野に埋れ、人材は世に出ないと思ふ。

筆者は、斯く信長を辯護し、ユツ口を極めて信長を賞する者であるが、夫れは何故であるか。

第一には信長の尊皇心の篤いことである。信長は敵や、第三者に對しては、義心がないやうに見えるが、天朝に對し奉つては忠と義に於て當代無比である。當代、大義名分は地を拂ひ皇室は御式微の極に達して居たことは史實の示す通りであるが信長は皇居を造營し奉り、御料を献上申上げ、皇室の御不自由御困難を除き奉つたことは、第一の偉功であり、忠誠の發露である。又伊勢の皇大神宮の御遷宮に献金したことも、信長の敬神思想の篤さを物語るものである。序作ら申すが信長は神社、佛閣を燒き拂つたと云ふ

信長の尊皇心と敬神心

のは、當時神佛混同し、加ふるに悪神官や不良僧侶が、非行多きを矯正せんが爲であつたことは叡山燒き討の理由を徴しても明らかである。信長は決して宗教心のない人ではない。現に平手政秀の菩提を弔ふ爲政秀寺を建立した一事でも分ると思ふ。

信長は勅を奉じて入洛したが軍紀至嚴、些の犯す所なからしめたのも、輦下に不祥事を無からしめ、以て宸襟を安んじ奉らんとする信長の忠誠心に出でゐる。

信長は官位を拜しても功に過ぐると思ふときは、之を拜辭し功績相當の官位を頂戴して居る。

信長の勤皇精神として特筆大書すべき點は、中央政權の執行の大命を拜しても幕府を再建するが如き私心や野心が聊かもなく、最後には、右大臣に任ぜられても、單に高級の一朝臣として中央の政務を著實に掌理し、家康の如く建幕大權を篡奪するが如きことはなかつた。平安朝以來の武臣の如く、攝關家に取入り、其の爪牙となつて野心を逞うせんとするが如き陋劣なる私心は信長には些かもない。吉野朝の忠臣以來、信長の如く大義名分を辨へ、尊皇心の厚い武臣はないと思ふ。

信長は自己の率ゐる軍を王師と考へたのは當然であり、諸國平定戰も、勅に基いて行つて居るので、争覇ではないと考へて居つたやうに思ふ點も、だんだんある。従て戰ふ毎に其の軍情戰果なども奏上し、決して私戰に墮さないやうに努めて居る。

信長の偉大な
る特長と他の
名將との比較

第二は信長の偉大性と其の人知の明である。筆者は國史を繙き戰國時代を讀む度に思ふことは、信長のやうな人が出てこそ、初めて難局が打開が出来るのだとの感想である。信長は世俗の所謂、徳の人とは云へぬかも知れないが、力の人、識見と實行力の非凡卓抜の人で、殊に進歩主義、獨創心の盛んな人である。此の偉大高邁なる識見と絶大な實行力、特に初めから無理をしないが、愈々とならば、何人も企及出来ない大果斷を以て事を決行する。盡すべきを盡して、最後に果敢猛烈に所信を斷行すると云ふ信長の氣魄と實行力とは、戰國統一の爲め、其の難症に切開のメスを入れ、治療回復の曙光否治療回復の見込を十分に付けたのである。或は信長の功業は、尾張に生れ地の利を占めたのだとか、謙信信玄の兩將が、互に争覇した爲、其の虚に漁夫的の利を占めたのだとか、謙信、信玄の死と云ふ天の時があつた爲めだとか、と論ずる人もあるやうだが筆者は信玄、謙信と信長との人物や手腕技倆を比較して、若し信玄や謙信を初めから、尾張に生れしめた所で、信長だけの仕事が出来たか否や疑はしい。禮を厚くし、辭を低くして、信玄に款を通じ、家康を見抜いて鄭量なる禮を以て同盟を結び、然も、謙信とも初めから難を構へず、側背の憂を除いて近畿に進出した外交上の手腕などは、實に立派なものである。信玄が家康を味方に引入れ得なかつた所に、既に信玄の方は外交的に負けである。

勅を奉じて上洛し、聖旨に副奉することを確固不動の大方針と決定した信長は、此の方針貫徹の爲めには區々たる面子などは考へない。斯様な點は尊大な信玄には出来ない藝當である。況んや家康の如き守成的の人には、信長の助手しか出来まい。義心鐵石の如き謙信も政治的手腕は遙に信長には及ばないと思ふ。信長は家康を見込み、秀吉を登用した所に、戰國統一の根本的原因がある。信長ありての秀吉であり、家康であつたことを見落してはなるまい。何れの時代に於ても所詮は人である。人を得ずして大功業を爲し遂げ得よう筈はない。

信長は内政上に於ても、殊の外意を用ひた。入洛後の京都の秩序肅正、近畿の交通改善や、其の他宣撫工作、民福の増進などに革新的施策を爲し、今日に範を貽すものもある。新附の地方の行政なども注意周到である。越前に柴田勝家を封じたときの訓令の一節にも「公租公課を重くしてはならぬ。士民を侮つてはならぬ。司法に偏頗あつてはならぬ。武備を怠つてはならぬ。皇室の御料を大切に護れ」と云ふやうなことがあり、尙「思案に餘ることがあらば、上京して相談せよ」と迄附言して居る。言は簡であるが意を盡し且つ用意が周到である。

第三には信長の作戦用兵の卓越なる點である。此の事は餘りに専門に互るのと又前にも一寸申して置いたから、委細しく申さぬが、信長の作戦は、謙信と信玄との特長を合

作戦用兵の第
一人者

成したやうな観がある。謙信の如く尖鋭的な所もあれば、疾風のな所もある。信玄の如く熟慮断行、堅實にしてあせらず、急がない所もある。謙信に比し、謀略は巧妙であり信玄に比し放膽な所もあり、兩將に比し遙に進歩的な所がある。

信長は當代稀れなる進歩主義の人であり、舊慣などは弊履の如く捨て、顧みない。殊に民兵などを徴用し、編制裝備に火力主義を重用し、常に軍隊の訓練補充、増強を怠らず、軍事技術なども、當代に卓越したと見るべき點もあり軍の威容なども織田軍を見て驚嘆する者が多かつたと言ふことである。物心双面の戦力充實は信長の目指す所であつたと思はれる。

筆者は今日ヒ總統の遺口を新聞などで讀んで居ると何處となく、信長の遺口に似て居ると思ふ點が尠なからぬやうに思はれる。

第四には信長の性格として特筆することは、信長は進歩主義、正しき革新主義の人でしかも全く功利主義心もなく況んや利己心など全然ないと云つて宜しい點で、此の點は大名將中では信長以外には見る事の出来ない點である。信玄、秀吉、家康は勿論、元就でも氏康でも皆悉く功利主義から脱却し得ない將である。信長の今日まで傳へらるゝ悪評は何れかと云へば功利心なき半面を物語るものである。思ふに當代、群雄に拔んで上洛し、中央政權を握つたことに伴ひ、反信長派から宣傳せられたるデマ的悪評は世

功利思想なき
強く正しき革
新主義の人

の中に随分ひろがつたことと思ふ。之が後世史話となつて誠しやかに傳へられて居るものもないではあるまい。信長に功利心があるならば、此の大智大勇の名將として人氣取策を考へたに相違なく、さすれば悪評のない筈だが、信長には左様な功利心はなく毀譽褒貶を顧みず、一途に王事に盡し、聖旨に副ひ奉らう、之が爲めに他の群雄や小人共が何を云はうとも勝手に云へ今に目に物を見せてやると云つたやうな氣魄を以て事に當つたことと思ふ。

信長が、本能寺の變に遭つたのも、觀方に依つては其の功利心なき半面とも考へられる。

凡そ亂麻を断ちて大業に邁進する者は、信長の如き大智、大勇、果斷で且少しも功利心なき人でないと出来ないものである。右顧左眄して己を考へて居つては、大難局の打開は出来まい。信長型で然も其の本質をも備へてるやうな人物が出れば幸ひだが、假り信長より一廻り小さくとも、出づれば現代の強味を増すであらう。

後年秀吉が、信長公は勇將なれども良將にあらずと評し、光秀の叛も當然なるかの如く話したとの文献もあるが、秀吉の人物に相應はしからぬ評論で、秀吉の言としては、男を下げる評論である。所詮は徳川時代の偽作物としか思へないが、筆者は史實詮索を能事とする専門史家ではないから、是れ以上論ずることは止める。

難局打開大業
を爲す人は信
長型

筆者は上述の如く特に信長觀を付加へたのは亂麻を断ちて長期建設の基礎を築くには信長型の人でないとならない、方策が色々あつても所詮は人である、信長の如く戦力を養ひ、平和的手段も盡すだけは盡し、夫でも愈々行かぬと思ふとき果敢断行徹底したことをやらねば、局面打開が出来ぬといふ點を力説するに代ふると共に、從來の如き小乘的功利的偽善的な信長觀を一掃せねば難局打開の大人物は出来ないと思ふからである、何とかして大人物の出る世の中には一般に人物觀から改めて掛からねばならぬとの微意を表現し且つ信長型の人物の速かに世に出でんことを念願する爲に外ならぬ。

第十一章 豊臣秀吉の統一戦及征鮮役

超長期戦と其の終末

信長が天正十年本能寺の變に殞れ、秀吉は中國から軍を返して光秀を山崎の一戦に打倒してから天正十八年最後の小田原攻城、北條氏撃滅迄は約八年餘りである。戦史から見れば可成の長期戦である。是だけを見れば、勿論長期戦ではあるが、戦國百廿五年遡れば吉野朝以來を大長期戦と見るならば、この大長期戦亂も最後の八年で片付いたもの

とも云へる。八年の歲月と云へば可成り長いやうであるが、永年亂れたる天下統一と云ふ點から見れば、假令荒削的にもせよ案外早く片付いたと云ふ觀方も出来る。信長以前の諸英雄が一代を通じ、一地方の數國多くて十二三國しか平定し得ざりしに比すれば頗る迅速と云つて宜しからう。

斯く比較的迅速に運んだ所以は勿論、秀吉の偉大性からであり、且つは天下亂に厭いたと云ふ點もあらうが、秀吉の遣り口には其の作戦、政略、諸將の統率等に於て他の先輩英傑に比し一大特異點があつた爲めであるやうに思ふ。秀吉の天下統一戦としては此の點を見るのが大切かとも思ひ、以下此の點に付て概考しよう。

秀吉の政略兩略の特長

秀吉の作戦及び政略を見ると(1)戦はずして勝つことを主眼とし(2)縦ひ戦つても易々樂々と大勝を得よう(3)敵を殲滅することも、さること乍ら、敵を完全に屈服せしめてしまへばそれでよい(4)時と場合に依つては縦ひ殲滅が出来ても之を滅ぼさず、太腹の中に呑み込んで、歸屬させてしまふと云つたやうな點に其の大特長があると思ふ。従つて、其の手段方法としては、常に敵に優る大軍を以て作戦し、中には倍も數倍もする大軍を以て敵に臨み、少なくとも幾割かの優勢を以て敵に對し、兵威を以て、先づ敵の度膽を抜き、謀略や政治工作を以て、敵の戦意を消磨せしめ、或は雄大なる戰略態勢を採り、双に血ぬらずして勝つか、或は兵を交へても牛刀を以つて鶏肉を裂く式にや

つてしまふ。慧眼を以て敵情を看破し敵に慮あらば、疾風の如く之を電撃し、慮がなければ、容易に手を出さず、其の慮を窺ふ。従つて對手は名将で、然も九死一生の決戦を企圖して居るやうなのに對しては、自重して容易に手出しをしないと云ふやうな場合もある。

秀吉の用いた兵勢

試みに、山崎合戦以後、秀吉の使用したる兵力を見ると

山崎合戦

二萬五千内外

柴田、瀧川、神戸の聯合軍に對する作戦(約七萬)

信雄及家康の聯合軍に對する作戦

(主作戦方面のみにて約六萬)

紀伊征伐

約十萬

四國征伐

主力方面のみにて約四萬

九州征伐

約十五萬

關東征伐

約十七萬

と云ふ兵力である。尤も書物に依り、多少異つて居るし、又誇張して居る處もないとは云へないが、兎に角敵に比し遙に優勢なものを用ひたと云ふ點は疑ふの餘地はない。従つて秀吉は獨立して作戦し始めてからは寡を以て衆を撃破したと云ふやうな戦例はなく、秀吉の氣分としては、寡を以て衆を撃つなどとは各ち臭いと云ふ位に考へて居つた

自己消耗を避ける

かも知れぬ。

攻城戦などでも、決して無理な力攻をやらす、兵糧攻め、水攻め等と兵力を損せずして之を降すことを考へる。小田原城の如きも當初は力攻したが、中途長圍策を採つて居る。

生かして用ふ

秀吉の行つた殲滅戦は、山崎合戦、柴田勝家の討滅、紀伊征伐、小田原征伐が其の最も顯著なものである。織田信孝を自殺せしめ、瀧川一益や佐々成政を屈服せしめ、一旦は丸裸的にして居るが、之を誅殺せず、毛利氏と和し、長曾我部元親、島津義久、伊達政宗等も皆之を寛大に取扱つて居る。然も大風呂敷で包むやうに是等の諸英雄を傘下に收めてしまふ。

此の様な遣り口は統一を迅速にした要因である。事實、統一にはかうして殺さず生かすだけは生じた方が効果は即効的である。

建幕せず

彼は中央政權を掌握した後に於ても、幕府を開かず、最高の朝臣として政務を見、最高の朝臣となつた後は出師には勅許を仰ぎ、節刀をも拜して出動したこともある。要するに信長に習つて統帥大權の奉行と云ふ大義名分を明らかにしたのである。秀吉は生れ性から、征夷大將軍を望んで得られなかつたとも傳へられるが、家康の如く幕府を開き大權を篡奪すると云ふやうな非望はなかつたやうに思ふ。秀吉は今日の伊國々首相の

加速度的勢力
擴大の因

やうなものであつたやうに思ふ一王師として立つた所に秀吉が統一を迅速にした重因の一つがある。

秀吉は右の如く加速度的に大軍を率ゐて作戦することが出来るやうになつた原因を研究すると種々あるやうであり、歸する所、連戦連勝領國の加速度的な擴大の結果に外ならぬが、一面前述のやうに秀吉の作戦用兵には無理がなく、苦しい困難な戦闘をやらぬ、易々として勝つやうな謀を立てる、そして濶達明朝に軍を統帥するから將士が從軍を厭はぬ所に兵力が増大する。一方恩賞は過分と云ふ程、施して少しも各まぬ。悪く云へば口でも賞め、過度の恩賞でも釣る。善く云へば財を各まず底知れぬ太腹を持ち豪快にして廣大なる氣宇と、明朗無邪氣な氣分とを以てするから、當代の如き功利主義否、利己的手合ひは、克く服し、自然に、兵力の集まり方が多くなる。兵力が大きくなれば敵を威壓し、敵の氣を吞むことも出来る。その結果作戦も易々樂々と進捗する。かう云ふ點は、秀吉の偉い所で、統一を迅速にした所以の一つである。

かう申せば、或は秀吉のやつた戦でも、賤ヶ岳の戦などは、随分無理な戦ひだと反駁する人もあるかも知れぬが、秀吉としては柴田軍の戦備が成つた後の戦闘の苦勞よりも拙速の度を越えたやうな機動の方は樂であると思へたに相異なる。品よく云ふならば機動は無理でも戦機を逸しない方は奏効し易いと考へたに相違ない。秀吉は五年間に中國

作戦評

五ヶ國を征服して居る。之も長期戦であるが、此の五年間に於ける秀吉の作戦は少しも無理をせず兵を損することを少くして、急がば廻れの方法で成果を擧げようとしてゐる點は十分窺はれる戦國時代では特に下拙な無理な戦ひをする武將には兵が付かないやうに思ふ。

秀吉は、戦機の看破も明敏、用兵も輕快神速であることは、山崎の合戦や、賤ヶ岳の合戦でも、よく分るが、何れかと云へば、戦略と政略或は謀略の併用は殊の外卓越してゐる。戦場の取組では、或ひは信玄、謙信、信長、家康にも及ばないかも知れぬが、上述したやうな、秀吉の偉大性と其の遺口は天下を比較的早く統一した主因であるまいかと思ふ。

然し信長の辛苦三十餘年の基礎がなく、この間秀吉が信長の部將としての體驗を積まざればこの大成は出来なかつたであらう。秀吉を假りに織田家の嗣として生れしめても信長だけのことは出来たか否や疑はしい、信長の起つた時代の困難性と秀吉が後を襲いだ時代とは群雄の質も小粒になり、時代も自然に動亂終熄へと動いて居つたやうにも思ふ、結局苦勞の仕續けて基礎を築いで死んだ信長の功業も秀吉により、仕上げが出来た譯であるが、信長が出なければ秀吉も大成しなかつたであらう、家康に至つては唯大體据膳を食ふたやうなものである。

征鮮役論考
悪評の是正

次に秀吉の征鮮役に就て概考しよう。

秀吉の征鮮役は、上古三韓放棄以來の我が大陸建設戦として意義の深いものがある。所が秀吉の征鮮役に付ては、徳川時代の學者は又悪評する者が甚だ多い。中には無名の師だとか、我が武を汚がしたものだとかと云ふ評もあるが、これも秀吉を悪評して徳川氏に阿諛する徒輩にあらざれば、支那崇拜で、大明をば祖國の如く考へてゐる腐儒の言論であると謂はざるを得ない。明治時代から今日でも尙且つ秀吉の征鮮役を悪評する人も尠なしとしない。

成る程、此の外征は堂々たる名の立つた出師とも云へないが斷して無名の師ではない朝鮮が快よく修好しない爲の膺懲である。

遡れば刀伊の賊、元寇等、大陸の強國の手先となつて、我に害した復讐でもあり、斯かる感情的な觀方を排しても、民族發展の道程には何れの國にもある出來事で別に無名師と自からさげしむ必要はない。秀吉の征鮮役を批難する歐米人や其の他の外國人が居れば、貴國の歴史は如何、多くは秀吉以上ぢやないかと逆捻ぢを喰はせばよろしい。何にも自から、我が祖先を、誹謗する必要もあるまい。只何分にも戰國の大動亂を統一した覇者のやつたことであるから、今日に於ては、日本民族傳統の戰爭觀の外に置いて考へたら宜しからう。

秀吉は學者ではないが、聞き傳へに可成り歴史常識のあつた人のやうに思ふ。彼れの歴史上の人物評論などでも如何にも秀吉らしい氣宇を見せた文献もある。従つて、昔朝鮮は日本に從屬して居つたことや、朝鮮が大陸強國の先導となり日本に來寇した位の史實は知つて居たと思ふ。従つて征明の道を藉せ修好せよと云ふ要求に對し誠意を示さざれば、何に、生意氣だ、然らば、兵威を以て臨むのみだと云ふ英雄心理が湧くのは當然で、明治の初の征韓論と比較し、又歐米英傑のやる所と比ぶれば別に不思議はない筈である。

又、我が武を汚がしたと云ふが、大體に於て朝鮮を席卷し、大明軍を屢々撃破し、大戦果を收めて日本軍の強さを示し、明の滅亡を早めたことは事實であり、武を汚したと云ふことはなく、寧ろ大に國威を宣揚して居るのである。

乍併、征鮮は結果から觀れば成功ではない。秀吉の征戰としては黒星であることは否むことは出來まい。

征鮮役の失敗
原因

その失敗の原因は何處にあつたか。この役は第一次、第二次の兩役を通じて約七年の長期戦であり、長期戦の失敗史として後世吾人の戒めとなるものが多い。研究に於ては失敗史をも見てその轍を踏まないやうにすべきである。

秀吉の征戦役失敗と原因として由來史家の掲ぐる所は、(1)水軍の不完備、(2)國論(諸侯の意見)の不統一、(3)外交關係者の不始末、(4)相手國情の調査の不備、(5)統帥組織及作戰計畫の杜撰等である。

筆者も勿論之に同意であるが、尙此の外に秀吉の天壽が無かつたこと及長期戦に伴ふ厭戦氣分と云ふこともあるやうに思ふ。

水軍の不完備と云ふ點は、我が海戰の戰果の甚だ香ばしからざるを見ても否むことが出来ないが、併し全く外征軍と本國とは遮断せられ、外征軍が大悲鳴を擧げた譯でもない。

相手國の調査の不準備であつたことは事實だが、却て盲蛇に怖ぢずであり、兎に角、作戰遂行が出来て居る。

秀吉は本營を名護屋に移したが、自から渡海せず、その派遣軍總司令部の組織も今日から見れば、甚だ奇怪なものであるが兎に角にも諸將の軍議で殆ど連戦連勝であり、作戰計畫も杜撰と云へば杜撰だが、一枚の地圖もなき時代にあれだけやつたのだから、時代相當に見れば深く咎むるのも酷で寧ろ偉いと云ふべきだ。

すれば先づ失敗の原因は國論の不統一と外交當局者のだらしなき態度とはその重因である。

國論不統一

國內に於ては、家康は外征反對論者の巨頭で、家康に私淑して居る諸侯は恐らくは家康と同心であつたと思ふ。尤も秀吉を憚つて、表面では反對する者はなかつたが、心の中では不同意で、家康の如きも前途の失敗を見越し、次の天下を目指す氣持であつたかも知れぬ。

兎に角、國內有力分子に斯様な心意の者があれば外に向ふ大業は遂げ得らるるものではない、此のことは深く考へねばならぬ點である。

外交の局に當つたのは、宗義智と其の家臣柳川調信、並に宗家と姻戚關係の小西行長である、そして義智と調信とは、私利私慾の爲めに、小策を弄し、嘘八百で秀吉をごまかし、不始末の一切を爲して居る。宗家は對馬に在りて、朝鮮貿易の利を獨占して居る爲秀吉の征戦で、此の利を失ふことを恐み、小西行長は之を援けて極力、秀吉の外征を止めさせようとす、初期の外交と秀吉の對鮮明認識を誤らせてしまつた。そして行長の厭戦氣分と調信や小西如安の腰拔とは遂に戦争期末に於ける外交を全然失敗に終らせてしまつた。兎に角自主主義的な利己本位の實業家出身の行長や、大名商人たる宗義智や、其の家臣の如き輩をして外交の局に當らせた秀吉も悪いが、是等當局者としては許すべからざる、下拙な外交をやつた譯である。

講和機運の動いたのは(1)日明兩軍共に糧秣の補給難(2)日明兩軍共に疫病に悩まされ

不始末外交

國論不統一

れたこと(3)石田、大谷、増田の三奉行の如き非戦論者の擡頭と、小西行長の如き賣國的講和論者の合作等であり。明軍に於ては殊の外士氣昂らず講和論は擡頭して居つた爲である。

此の講和を斡旋した無頼漢、沈惟敬のづら／＼しさにも呆れるが、夫れよりも之に瞞されたのか、丸められたのか、兎に角石田三成や小西行長の、だらしなさと、明に使用した小西如安の腰拔賣國奴の態度こそ、此の征鮮役の結末を、めぢや／＼にした、直接原因である。小西行長が明の講和使節が提出した國書を、僧承免が朗讀する直前迄、其の讀方を有の儘としないで呉れと頼んだ陋劣さは、如何に彼れが多少作戦上戦果のよい場面があつたとしても、所詮は軍装した奸商に外ならぬ。

何れの時代でも行長、如安、義智、調信のやうな非國民的代表人物や、三成の如き策士が居ると、何事もめぢや／＼に爲るのである。夫れにつけても、秀吉は勿論、其の側近には何れも偉ら物が居たに拘らず、事前に看破が出来なかつたと云ふことは、千載の不思議である。

秀吉が講和の不始末者、行長を許し忠實勇武なる加藤清正を勘當して閉門を命じたり秀秋を移封せんとしたが如き不公平なる處置は、結局寵臣三成等に丸められた爲であらう。秀吉も何處となく老ぼれた感じがする、雄心が變じて放漫となることは得てあり

秀吉の老衰

第二次役

勝ちな、英雄の頭腦の變化である。

第二次の征鮮に於ては諸將は一旦は進攻したものの越冬に名を藉りて、南部朝鮮沿岸にかじり付いた儘、爾後前進しようとはせず戦つて居つた、何れは厭戦氣分も生じて居つたであらう。斯様な埒の明かぬ、目鼻の付かぬことをやると厭戦氣分が起るものである。

斯くて七年の外征も秀吉の薨去と共に撤兵となつた。

國論の不統一も、外交の失敗も煎じ詰むれば矢張り人の問題である。秀吉が人的配置の當を得なかつたことは、征戦失敗の根本原因である。秀吉自身が渡海するか、家康を起たせて總帥とするか、少なくとも小早川隆景などをもつと重要な職務に宛て、要すれば之を起用して總帥とするならば、もつとよい成果を收め得たかも知れぬ。

秀吉の晩年の人事は征鮮役を有耶無耶にし、豊家を滅亡に導いた主因で、如何にも秀吉の老衰を思はせるものがある。

夫れは兎に角、三成、行長、義智、如安、調信の如き人物を排除することは何れの時代に於ても必要であることは、此の征鮮役の貽す最大の戒訓である。

唯この征鮮役を見て筆者の感心することは、外征諸將、殊に加藤清正や小早川隆景、島津義弘などの活動振りと後世に貽した得難き好戦例とである。又何れの將士も戦國時

軍儀の不始末と兵衛的武將の偉大性

代長期戦を続け、息ふ間もなく外征である。そして然もそれが前後七年の長期に亘つて
 る。中には厭戦氣分の武將もあつたが、兎に角、成果如何は別としてこの長期戦に堪
 へた吾人の祖先の意思の強い點は後世吾人の範とせねばならぬ所である。太閤は天壽な
 く此の旺盛且つ意思の強い將士をして遂に疲勞のみに終らせてしまつたのは惜しむべし
 であるが、太閤のまづかつた所を戒とし、將士の善き所を範とし、現代の聖戰完遂に萬
 全を期せねばならぬ。何れの時代の失敗史を見ても、一般將兵や、國民大衆は悪い爲め
 ではない、多くは其の指導者や指導乃至上層階級が悪いのが原因である。長期戦となる
 と益々此の點に注意して、指導者や上層が自覺する所がなければならぬ。太閤の征鮮役
 の失敗は、小西行長や石田三成の徒と除くの外、外征將兵が悪いのではない、要は一部
 の上層指導者に眞劍味が缺けて居つたことは見落すことの出来ない點である。

むすび

太閤の征鮮役後幕末明治維新頃迄は國史上長期戦はなく幕末及明治維新前後の内戦は
 又長期建設戦である、爾後明治の御代の二大戦役は必ずしも長期戦と見ることが出来る
 大正の御代の歐洲大戰參加及之に引續く西伯利亞出兵を通觀すれば又長期戦である。そ

長期戦の戒

の後滿洲事變及支那事變を通じ更に大東亞戦に入つた此の聖戦は、是亦世界史に遺る一
 大長期戦である。

然し乍ら新時代の史實は概考するにも及ぶまいと思ひ、長期建設戦の概考は太閤の征
 鮮役を以て終止符を打つ事として最後に若干結言する。

筆者は國民紙の御依頼に應じ、急遽筆を執つた次第で、十分に研究を盡す餘裕はなく
 たゞ、自己の歴史常識を基礎とし、記憶をたどりつゝ一氣呵成に書き上げたので、考察
 も甚だ大雑把であるが、我が國史上に於ける長期建設戦の迹に鑒みれば、今人の心せね
 ばならぬことが、段々あることは讀者各位も御分りのことと思ふ。所見は其の都度述べ
 て置いたから、更めて要約再録はしないが、大東亞戦争も之れからが本格的の長期建設
 に入るのである。長期戦は最後の段階に近づく程大事である。大事は以前よりも今後の
 戦に在る。武力戦も將又外交戦、經濟戦、思想戦、謀略戦等も勝敗の決は、今後に在り
 其の勝利の榮冠は是非之を收めねばならぬことは申すまでもない。支那事變以來既に滿
 五年近く経過したとは云へ之を吾等祖先の行つた長期戦に比すれば、時間的にはまだ、
 より短い期間しか経過して居ない。吾等祖先のことを想はゞ意氣衝天の槩を以て時艱を
 克服せねばならぬ。我等日本民族は二千六百年間、偉大なる長期戦に耐へ克つたことは
 大雑把乍ら申述べた通りであるが我等民族は長期戦力に於て他民族に優りこそすれ、斷

じて劣るものではない。此のことを矜持として祖先傳統の長期戦力を益々偉大に發揮すべきである。それには、どうしたならば宜しいか。

謹んで回顧すれば皇紀二千六百年の紀元の佳節に賜はつた、詔書の御一節に

爾臣民宜シク思フ神武天皇ノ創業ニ聘セ皇圖ノ宏遠ニシテ皇謨ノ雄深ナルヲ念ヒ和衷戮力益々國體ノ精華ヲ發揮シ以テ時艱ノ克服ヲ致シ

と宣はせられたことは、讀者各位の御記憶のことである。筆者は建國聖戦史を讀む度に思ふことは、凡そ長期建設戦の眞諦は實に神武天皇の建國聖戦の聖範に盡きて居ると思ふことである。筆者は本稿の初頭に於て、其の主たりと存する點を御紹介したが、現代聖戦に處しても常に右謹抄せる詔書を奉體して 神武天皇の 聖範を感佩奉行することが絶對緊要である。

更に謹みて三國同盟成立の御御渙發遊ばされた詔書を拜誦すると其の御一節に

爾臣民益々國體ノ觀念ヲ明徴ニシ深ク謀リ遠ク慮リ協心戮力非常ノ時局ヲ克服シ

と仰せ給はつたことは是亦讀者の御承知の通りである。

筆者はこの兩詔書を拜れすば、非常時局或は時艱の克服の爲めには、國體觀念を明徴にし國體の精華を益々發揮することを以て最高の要道とするとの 聖旨がおはしますと拜察し奉るのである。國家の凡有部門に於て國體に即し國體の精華を益々發揮するやう

施策すれば必ず時艱と非常時局の克服は出來ると確信する。否之が即ち承認必誦、皇謨奉行の臣道實踐である。

更に謹みて宣戦の大詔を拜讀すれば

億兆一心國家ノ總力ヲ擧ケテ征戰ノ目的ヲ達成スルニ遺算ナカラムコトヲ期セヨ

と仰せ給つた、億兆心を一つにすると云ふことは我が國體の精華の重要部分であることは教育勅語を拜すれば明らかである、故に宣戦の大詔を奉行するにも亦國體の精華を最高度に發揮せねばならぬと謹考する。

斯く詔書を謹按し更に我等日本民族の戦力を考察すると、我等日本民族の戦力は、斷じて好戦精神から出るものではなく、又霸道心意から生ずるものではない。我等日本民族の戦力は、明徴なる國體觀念を基とし、國體の精華を益々發揮し、金匱無缺の國體を擁護し、皇道を宣布せんとする場合に於て最も強烈に發揮せらるゝことが分る。古來の内戦史でも、皇師となれば、士氣百倍し、賊軍となれば士氣沮喪してしまふ。外征に於ても皇軍として聖戦に従事するときは大御稜威の下必ず大戦力を發揮し、大戦果を收むるが、權臣の霸心に基く政略出兵はどうも香しくない成績に終ることは史上に顯著のやうに思ふ。今日の聖戦は斷じて政略出兵ではない。斯るが故に、今日迄の大成果を收めたのであるとも見ることも出来る。

戦争の前途は尙長期戦を覚悟し、否これからが寧ろ本格的の長期戦に入るのであると覚悟せねばならぬ。そしてこの場合に於て進むべき途は、右謹抄の詔書を必謹奉行し益々國體の觀念を明徹にし國體の精華を彌々發揮するにある。斯くすれば必ず如何なる難局の克服も美事に出来、聖戦完遂の美を收むることは疑ひなしと重ねて強調する。

然らば國體の精華とは如何、之れは教育勅語及び 今上陛下の御即位の御大禮の御砌、賜はつた 勅語を拜誦すれば炳乎として明らかである。即ち教育勅語には

我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ

と宣ひ、今上陛下の御即位御大禮の御砌、賜はつた 勅語には

皇祖皇宗國ヲ建テ民ニ臨ムヤ國ヲ以テ家ト爲シ民ヲ視ルコト子ノ如シ列聖相承ケテ仁恕ノ化下ニ洽ク兆民相率キテ敬忠ノ俗上ニ奉シ上下咸孚シ君民體ヲ一ニスレ我カ國體ノ精華ニシテ當ニ天地ト竝ヒ存スヘキ所ナリ

と宣はせ給ふ。御文章は異なるが、聖旨は御同一と拜察し奉るのである。讀者各位は此の兩勅語に宣はせ給ふ國體の精華に照らし、現在の世相を観るならば、何人も心を維新し、凡有、國家部門に於ける施設や施策に革新を要するものがあることを認むるであらう。革新は總て先づ國體の精華に副はざる點を直すと共に、益々國體の精華を發揮するやう

すべきである。筆者は本稿に於て反國體史實を極端に排撃する所以も此に在る。外國模倣や、我念我流では、非常時局や時艱の克服の爲に必要なる革新は出来るものではない。革新も總力發揮も必ず國體の精華に副ひ、益々之を發揮するやうしてこそ、茲に遙に敵に優る偉大なる力が發揮出来るのである。日本民族は規則攻めや理窟詰めや、多數黨意識や壓制では心から隨從する民族ではない。何處迄も承認必謹、皇謨を奉行し、國體の精華の中に生かすやう指導すれば水火尙辭せざるやうになる民族である。國民中に若し指導者の思ふやうにならぬ點がありとするならば、指導者は其の指導は承認必謹、皇謨奉行、國體の精華に副うて居るや否やを先づ再検討して、然る後、善後策を講ずべきである。

國體の精華を最高度に發揮するの必要は今日より大なるはない。それには承認必謹精神を極度に作興して聖戦完遂の皇謨の奉行、翼賛の大義に邁進すべきであることを繰返し強調して筆を擱く【終】

420
289

長期戰の國史考

不
許
製
復

昭和十七年九月三日印刷
昭和十七年九月八日發行

登錄會員番號一一〇五四五

(三冊)

定價 金壹圓

著者 東京市世田ヶ谷區世田ヶ谷五丁目二八五番地 中井良太郎

編輯印刷 東京市杉並區圓通寺三丁目二九八番地 楓井金之助

印刷所 東京市京橋區銀座西七丁目二番地 國民新聞社代理部

發行所 東京市京橋區銀座西七丁目二番地 國民新聞社出版部

東京市神田區淡路町二丁目九番地

日本出版配給株式會社

配給元

終

停

定價一圓